最新講評

互先石立軌範

特259
710

始

特259
710

圍碁同志會編
主任 八段 中川亀三郎
七段 岩佐銹

最新講評

互先石立軌範

東京 大阪屋號發行

例言

一本卷は骨子を中川龜三郎所有の傳寫本に採り、校訂增補を加へ、圍棋同志會の編輯に係る雜誌圍棋世界に連載せしもの、既刊置棋の部と共に本書を完結せんため、特に之を單行する事とせり

一本卷の體裁既刊置棋のそれと異れるは、講說の精細なるが爲にして、行文の長短自ら然らしめしのみ、爾も彼の文語體なるに反して是の口語體なるも、亦讀者に透徹を期したるに外ならず

一主として本卷の作製に任ぜしは、中川龜三郎、岩佐銈の二人なり

一本書の抱負及び責任に就ては、前卷之を告白せり、今贅せず

編者識

互先石立軌範

起手第一着は何處に打つべきか

起手第一着は古くは中央天元に打つたものである、圍碁式や今昔物語を見ても分る、それが漸次研究發達して邊側星下に打つ事となり、江戸草創時代の碁譜にまで殘見する、遂に三轉して隅角に打つ事となり、小目、目外し、高目の三者と決つた

一目の地を中央へ作るには、甲圖の如く四着を要する、それが側邊となると、乙圖の如く三着で足りる、それが又隅角となると、丙圖の如く二着で出來る、此經濟上の原則は、起手第一着をして中央天元より邊側星下、隅角三者と發達せしめた徑路である

比較的少い着手を以て比較的多い領域を作り得る利便は、中央よりも邊側に、邊側よりも隅角に在る、隅角は局上最良の根據地で、此處に小目、目外し、高目の三着點が在るのである

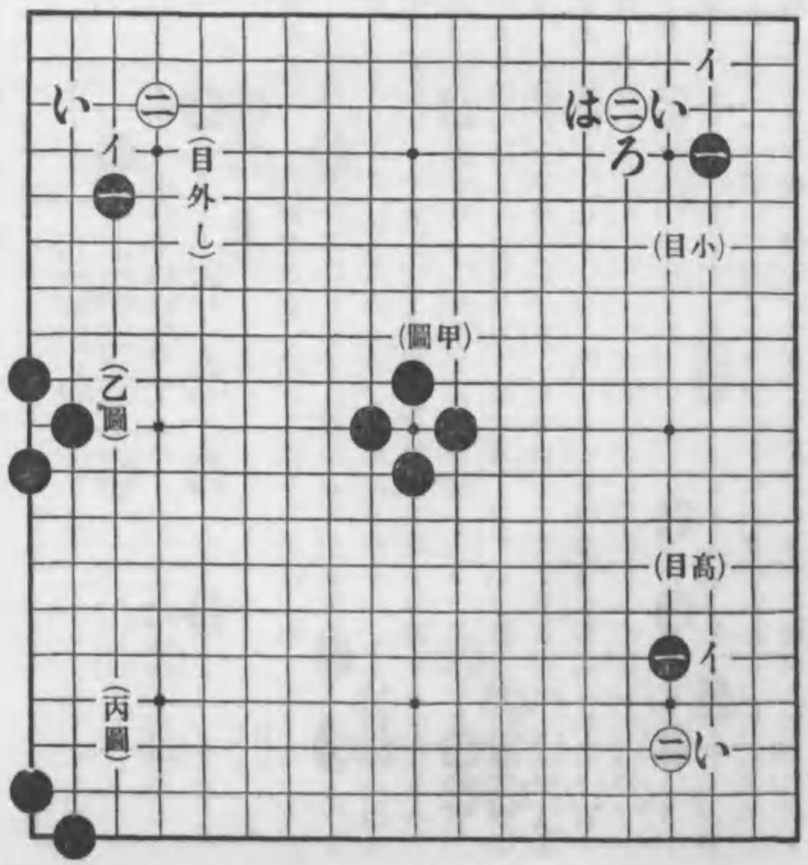
小目は第三線と第四線との交叉點に在つて、三者中最も隅角に近く位置して居る、目外しは第三線と第五線との交叉點に在つて、小目よりは邊側に近く位置して居る、高目は第四線と第五線との交叉點に在つて、最も中央に近く位置して居る、されば前述經濟上の原則に照して、根據の最大包含量を確保する位置は、第一小目、第二目外し、第三高目と云ふ順序とならねばならぬ

今之を圖說すれば、小目黑一とあるに、白二と懸つたとする、黑は「い」に尖頂けて完全に隅角を占領する事が出來るが、白が黑の根據を奪取すべく「イ」に斜走した所で、それが決して完全なる根據の奪取とは云へぬ、然るに之が目外しとなると、小目に於ける黑白の位置が全く變つて居て、黑が「い」に斜走したからとて隅角の占領が出來ない反對に、白に「イ」に尖頂けられると、全然根據を奪はれて了ふ、高目に至つては直ちに白に二と根據を衝かれて、黑が「い」に頂けても隅角の占領が出來ぬ許りか、白に「イ」に頂けられると、目外しのそれよ

りも隅角の占領を多大に附與する事となる

以上は專ら守備の方から云つたものであるが、發展の方から云つても、小目は「ろ」に締ると二に締ると「は」に締るとの三途を有つて居るのに、目外し及び高目は單に二に締るの一途しか有つて居らぬ、是に依ても自ら手段の廣狹策戰の深淺に差等があらねばならぬ

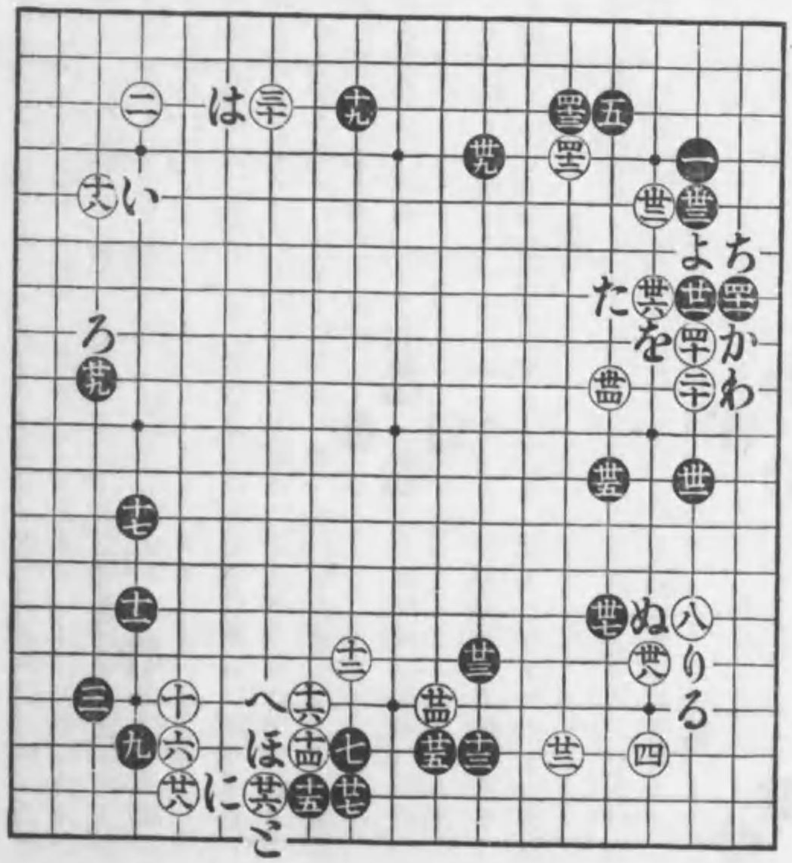
右の樣なわけで、起手第一着は守備にも發展にも最も利便である小目に打つが宜いので、特種の注文ある稀有の場合を除いて、殆んど全く小目に打つを常例とするのである



三間挾

第一圖

黒が五と締つたのは、先づ自ら地域を占めて、其歩武を確實にしたものである、何となれば此締りといふのは、總掛りに較べて此方面に白の着手を制限し得るだけ、それだけ局面が狹くなるわけであつて、先着の効果を早く收め得るといふ意味に歸するからである○白が六と黒三に對して掛つたのは、假に二若くは四に對して締るとすると、黒は三に對して締ることゝなつて、白は益々其手段を制限されることになるのであるから、斯く打つたのである○黒七とそれを三間に挾んだのは、白が手を拔くと、圖の如く九に尖頂けて此白を攻立てやうとするので、九より十七までは定石を趁ふたものである○白十八と特に小桂馬に締つたのは、若し「い」へ一間に締る時は、二九又は「ろ」が絶好の處となるから、黒は直ちにそれを占領するであらう、さうなると白が

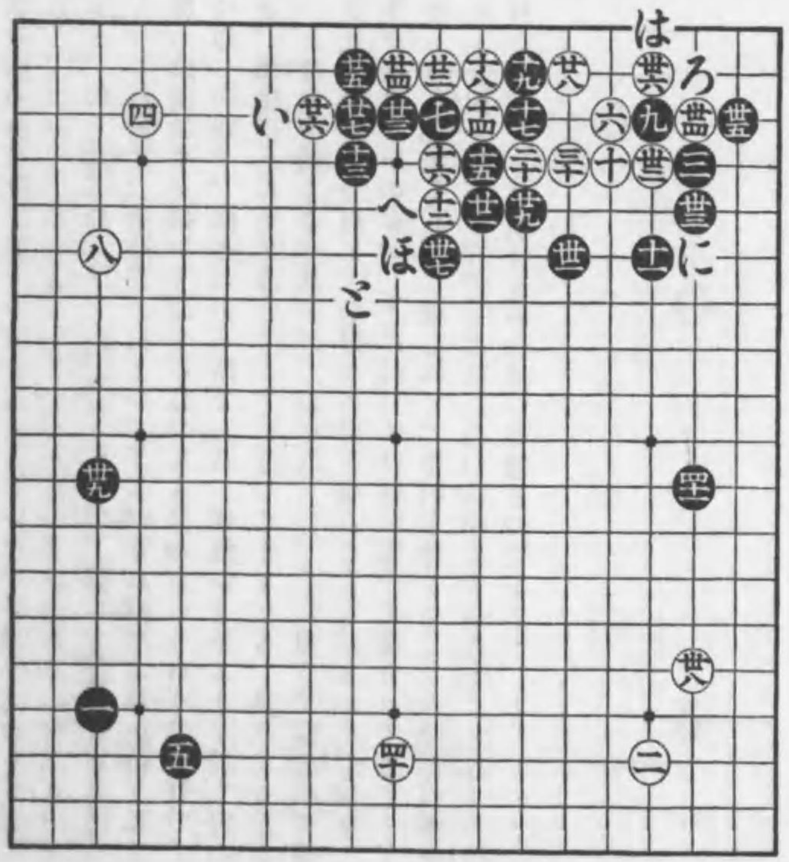


第一圖

締に依て得たる地境を侵略さるゝことが、譜の如くなるに比べて損害が多いからである○黒の十九と白の二十とは所謂見合ひの場所で、双方何れかゞ其一方を占めれば他は他の一方を占めることに、手割の上から打算せられてあるのである○黒二一は二二へ詰め、「は」と二一とを見合ひとして打つも亦一手段である○白二八の手は時機が早いけれども、黒に「に」に頂けられると、白二八、黒「ほ」、白「へ」となつて、黒に「と」に一目を提られることになる、さうなれば白の石に眼がなくなる反對に、黒の石が治まつて了ふ、それ故黒の頂を防ぎ且つ黒の左下隅を消す目的を以て二八と下つた、併し此處は手を拔いて三十に打つても無論宜い○白三二と打つて黒に三三と受けさせ、そして三四に飛んだのは卽ち手順で、働きのある所である、何故かといふと、若し白の三四と黒の三五と交換した後白が三二に打つと、黒は三三に受けないで「ち」に打つことゝなる、さうすると三六に頂ける手が無くなつて了ふ○黒三七と打つた時白が若し手を拔けば、黒は直ちに「り」に頂け、白三八に綽ねると「ぬ」に截り、白に「る」に一子を與へて其代價に外側を堅め、壯厚の形勢を張ることになるから、白は三八と備へたのである○黒三九と圍つて右側に手を附けないのは、「を」に綽ねては白に四十に截られて惡しく、又四十に突當れば白に「を」に打れて、「わ」に盤らうとしても「か」に截られて、目的を達することが出來ぬ處から、手を拔いて白から四十と來るのを待ち、そして四一と下つたのである（黒の此手は普通は「よ」に粘ぐのであるけれども、三九と圍つたものだから斯う打つて、「た」に頂ける筋を狙つて居るのである）

第二圖

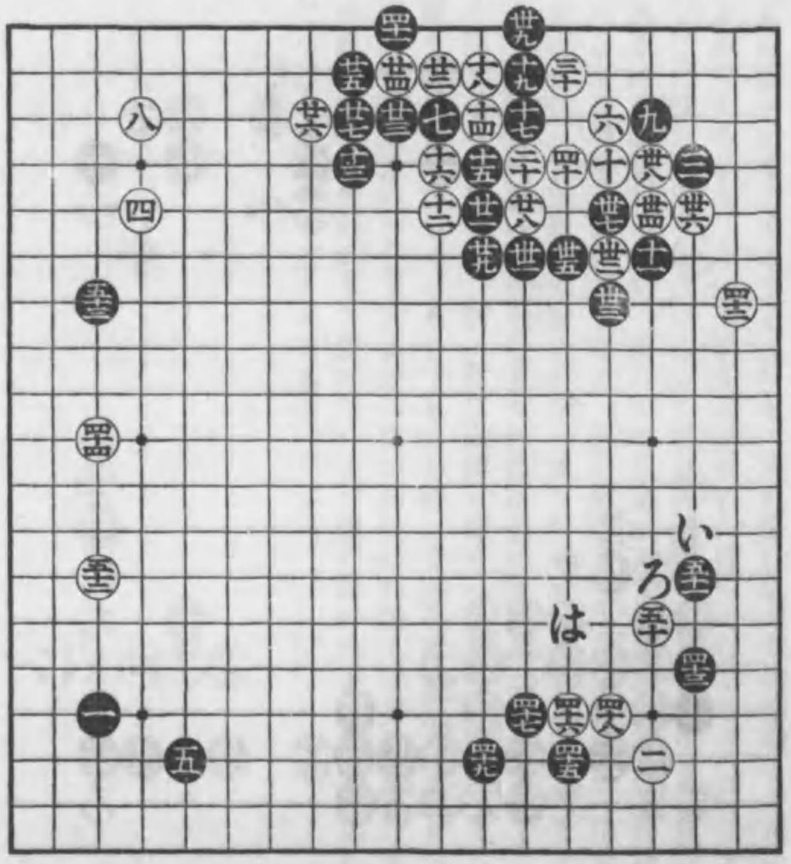
本圖は黒の十三から前圖と異なつて居る○白十四から黒三七までは定石であるからここに示したけれども、白の方面白くないので、近世は十四の手で「い」に詰めて打つ、それは白を持つては碁を廣くせばならぬといふ意味から來て居るのである、(右の定石中三三の手で三四に粘ぎ、白三六、黒「ろ」、白「は」、黒「に」と打つ變化もあるが、これは古い型で、白から「ほ」に尖まれて甚だ面白くないのである)斯ういふ石立となつては黒の形勢は十分で、それは畢竟白十四と頂ける定石を襲用したのに胚胎したのである(因にいふが、若し白が十二、十六の二子を「へ」に曲つて逃げやうとすれば、黒は「と」に掛けて取つて了ふのである)



第二圖

第三圖

白が四と高目に打つて置いて後に八と締つたのは、矢張前譜と同巧異曲である、而して三間挾に於て、本譜は前譜二八からの變化を示したものである、以下四二までの結果、白に右上隅を占められて了ふことになるから、此振替りは一寸白が利益であるやうに見えるけれども、其實決してさうでない、黒は前に三二の一子を打拔き、後に十四以下の四子を得、中に十二、十六の二子を擁して中央に一帶に堅壁を築き、其形勢甚だ手厚くして、白は到底其得し所を以て其失ひし所を償ふに足らないのである○黒四五と白二の石を一間に挾んで激しく打つのも、畢竟中央が堅固であるから出來た結果である○黒四九は普通は手を拔いて「い」又は「ろ」に打つのであるが、本譜に於ては既に白が四二と出て居るので、「い」又は「ろ」に打つても格別の効果がない、それで四九と掛粘いで、遙に一及び五と犄角の勢をなし、地境を此方面に占めんとする計劃

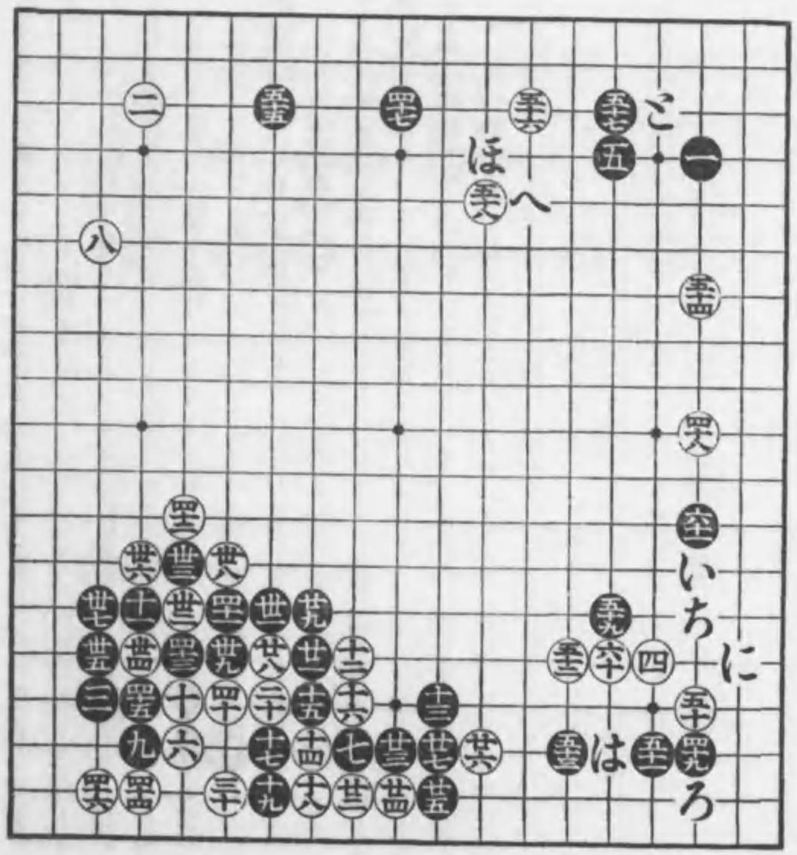


第三圖

である○白五十はこれも普通は「は」に飛ぶのが定石であるけれど、中央の黒が厚く、尙又右邊に四二と出て居る所から、斯く掛けて黒に五一へ受けさせ、先手を取つて大場に轉じ、五二と拆いたのである○黒五三と單身馬を躍らして白の陣中に斬込んだ打方も、矢張中央の黒壁が堅いから出た着手である、以て此三間挾の振替りが黒に大利あることを悟るべきである

第四圖

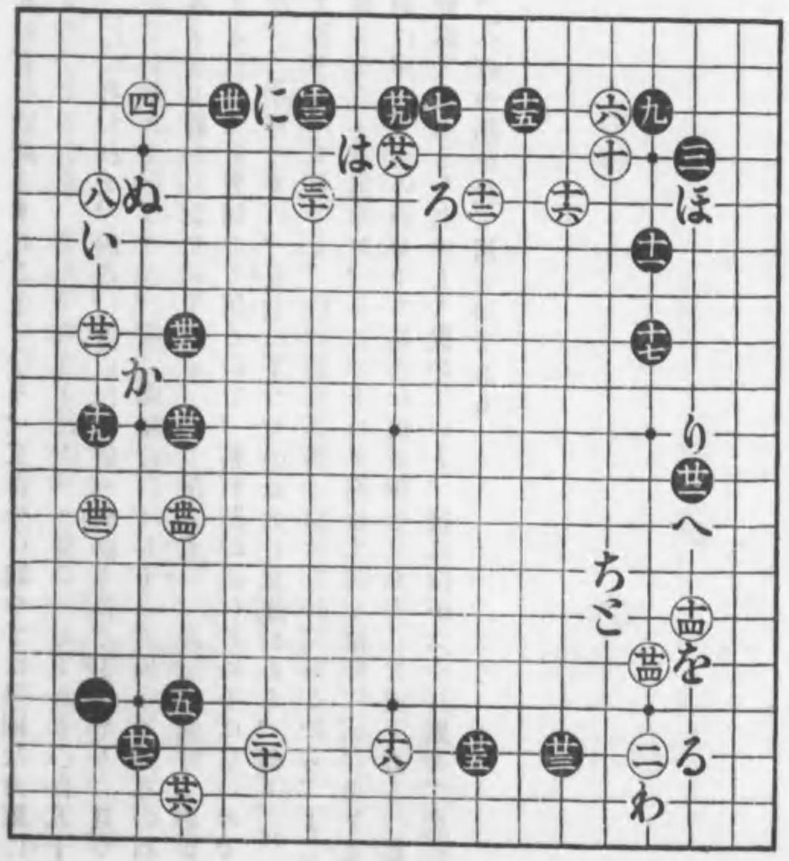
黒五の締りが前三圖と違つて居るのも、矢張同巧異曲である○黒三五から白四六までは前譜の變化を示したものであるが、此三五の手は打つべからざる惡手である、其結果三三の一子を白に先手で打拔かれるなどは、最も甚だしい罪である（元來四ッ目に一子を打拔かせるといふ事は、碁の法則上甚だ忌むべきである）○白の四八は左方の黒が堅いから、五一へ締つても黒から「い」に打たれて、白の地域が緊縮すると正反對に黒の懷中が廣くなつて不可ぬから、先づ



四八に拆いて後に締らうとしたのである○黒四九は普通は五一へ入るのであるが、さうすると白から四九に頂けられ、黒「ろ」の時五十に引かれて、丁度四八の石を活躍さすることゝなり、又自分に取つては堅固な方面に石を集めるといふ、所謂棋家の嫌ふ凝形となるのであるから、それで四九と三の三へ打つたのである○白五十は普通は「は」に打つけれども、それでは黒に「に」に打たれて、四八に拆いた手が一向詰らぬことになり、且つ爾かく遮斷して見た處が、黒の一方は堅固であるから其効をなさぬ、故に此場合白は五十と尖頂けて四八の石を働かせ、且つ前述の黒の堅き方に追ひやらんとする趣向に出たのである、併し黒は五一、五三と逃げて聊か堅きに集るの嫌がないでもないけれども、四九と三の三を突切つて居るので、格別割が惡いわけではないのである○白に五六に打込まれた時、黒が「ほ」又は「へ」に打たずに、五七に下つたのは大に意味がある、卽ち「ほ」又は「へ」に壓迫した處が、白に「と」に打たれて活きられて見ると、既に白に五四と詰められてあるから、よし堅壁を形成したからとて、其効果を滿足に發揮することが出來ぬ、そこでそれを避けて隅を確實にし、白を五八に逃げさせて先手を取つたのである、此趣向は早く五五の石を下す場合に黒が胸中に算策した處である○黒五九と覗いて六一に打つたのは手順である、此處で此覗きを利かして置かないと、後に白が六十に應じて呉れるか何うか分らぬ、又六一に打つのは次に「ち」へ打つ筋を見て居るのである

第五圖

白八は是まで「い」に大桂馬に締つたが、本圖に小桂馬に締つたのは大に所由がある、大桂馬に締る意味は、「ろ」に冠して黒に「は」に受けさせ、そして「に」の邊に拆かうといふ趣向であるが、今度は圖の如く十二と大桂馬に打たうといふ旨意で、さすれば黒は二八へ尖むか、十三へ拆くが定法であるから、其便宜上小締に打つたのである○白十二は既に八の石を下す時からの趣向であるが、之を前數圖の「ろ」に打つた手と比較して見ると、其是非善惡は込入つた大議論になるから此處には略することゝして、此十二は普通白が此方面に手を拔かうとする場合に用ふる着手であるといふ根本的意志の相違があるのである○黒十五と打つて白に十六と應じさせ、而して十七に飛んで自己を守つたのは手順といはねばならぬ、何故かといふと、九と尖頂けて十一と桂馬した形は、何時でも「ほ」に頂越される疵を負ふて居るのである、故に黒は十七に飛ん



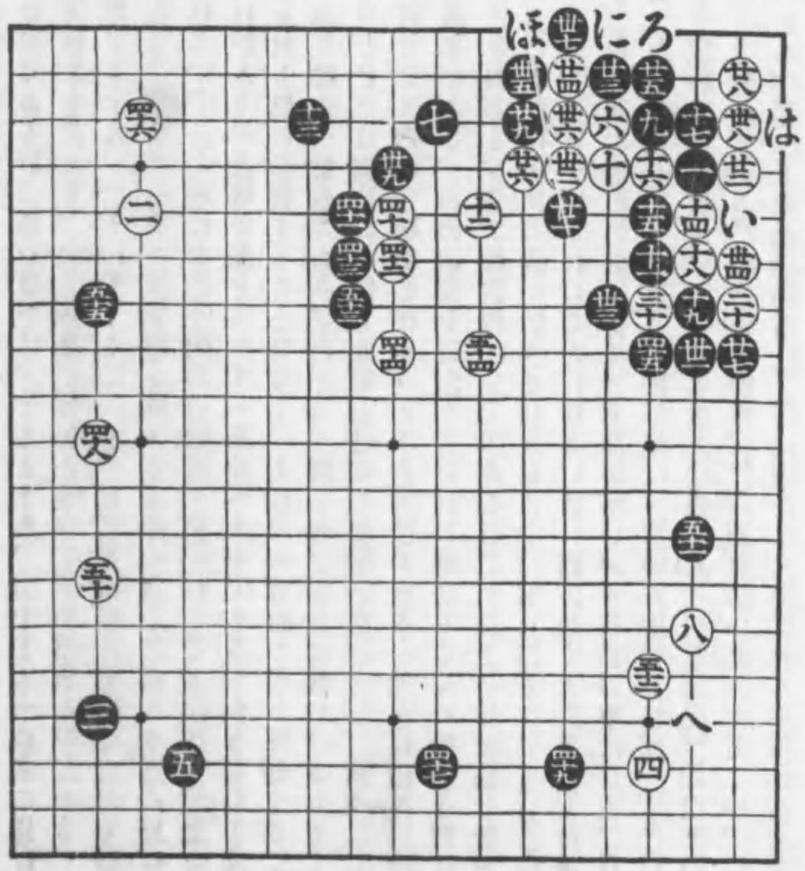
第五圖

で其疵を癒すことは定石となつて居るが、之を打つ前に十五と十六を交換して置いたのは黒の働きである、併し此場合十五の手で十八の大場を打つても宜いのであるが、黒の意中は、十八と十九、二十と二一は共に見合の大場であつて、白が其一方を占めれば我は其他方を占めて、以て地境の均衡を保つことが出來るのだから、それで十五、十七の着手を先にして、十八に對する十九、二十に對する二一と、互に大場を占め合つたのである、而して黒の二一は一寸見ると、今一路進んで「へ」に打つ方が其領域を廣める意味に適して居るやうに思はれるが、さうすると白に「と」又は「ち」に打たれて、「り」の邊に打込や何かの間隙を狙はれることになり、之を防げば白に下方に尨大の地境を形成される恐れがあり、是等の點を考へて一路控へたのである、かうなつて見ると白は「と」や「ち」に打つたからとて、差當り何も黒に影響することはなし、それで一寸打つ手に困却することゝなるのである○白二二は八の石が「ぬ」にある場合ではなし、それに黒に影響するこは緊要であるけれども、圖の如き場合は狹い、さりとて三一に詰めるのは、八の石が「い」にある場合でなければ尙狹い、併し此場合適切な着點がないから、先づ二二と我慢して三二の打込を狙ひ、黒に何處へか打たせて活動の端緒を作らうとする爲體である○然るに黒二三は白の意中を猜して、而して極めて場合を得た着手である、白の活動を制限してそれに乘せらるゝの紛擾を避けやうとすれば、成るべく白の薄弱なる點を衝くを良策とする、此意味からして此場合二三以上の好着點を發見することは出來ぬ、白から二五に攻められても、「る」に頂けて隅に活きる筋もあるし、又二四と打つて「を」に受けさせ、「わ」に頂ける筋もあつて、容易に白から攻めつけられぬことになる、故に圖の如く大桂馬締りの場合には、二三へ打込むのが要處で定法である○白二四は黒が二五に拆くも其間が狹いから格別の事はなく、自己には今いふた通りの間隙があるから、安全に之を防止した手である、併し他に一層の好處があれば、「る」に頂けられた場合に隅に活かすを覺悟して、手を拔いて其處に轉ずる場合もある○白二八、三十は先づ六以下の石を整へて、「に」の頂と三二の打込とを兩睨にしたのである○黒三一は卽ち「に」の頂を防いだのであるが、三二の打込を防ぐべく三三に飛んでも宜いのである○黒三五を初心の者は「か」に覗かるゝを怖れて容易に打たぬが、斯かる場合に斯く打つは通則であつて、少しも恐るゝに足らぬのである

第六圖

黒十三までは此三間挾が前圖と同じであつて、而かも此形は何時でも頂越の疵を負ふて居るといふことは、前圖に述べた通りである、然らば直に其疵を衝いたら何うであらうといふ疑問が、讀者の胸に浮ぶであらう、本圖以下三圖は其疑問を説明しやうとするのである、併し白が十四と頂越すのは、此場合未だ時機が早いといふことを記憶して置いて貰ひたい

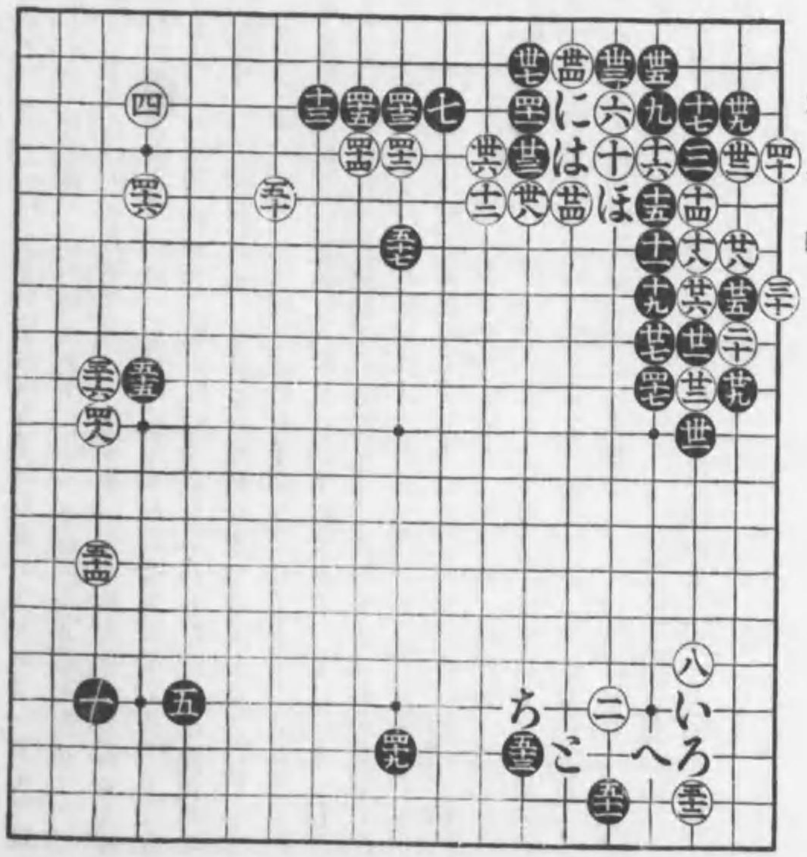
○黒十九は三十に行びる手もある（次圖に示す）○黒二一は白に二六へ受けさせて、二七へ二段綽をしやうといふ手である、所が白は中々二六に應じない、先づ二二に綽ねて黒の二段綽を防ぎ、のみならず二八と打つて黒の三子を取らうと構へたのである、之に對して黒が二三、二五と綽粘いだのは、餘程考へた手である、若し三八へ約へると、白三一、黒三十、白「い」、黒二三、白二四、黒「ろ」、白二六となつて、白に二六と備へる前にいろ〳〵利を打たれること



になるから、譜の如く綽粘いで暗に白の應答を試みて居るのである、斯うなると白は是非とも二六に應じなければならぬ、何故かといふと、若し二九に掛粘げば、黒に二六と尖頂けられる手があるからである、而して此隅の黒は白から三八又は二八に打たれても、三五に頂けて盤る手があるから、二一と打つた意志を繼承して、こゝに二七と二段綽を遂行することが出來るのである、白が之を嫌つて二六の手を二七に行びれば、黒は二六に打つて白の四子を取ることになるから、白は否が應でも二六に打たなければならぬことゝなるのである○白二八は三四の粘が何時でも利いて居るものとして打つたのである（三四に粘いでから二八と打つのは不器用である、黒が三八に突出して來るを俟つて三四に粘ぎ、三一の截と「は」の盤とを兩睨にすべきである）○黒二九は三十に粘ぎたい所であるが、さうすると白に三八に粘がれて、一以下黒の五子は取られて了ふことになるから、斯く打つて之を擁護したのである○白三十と三二へ粘ぐ前に截を入れたのは手順である、黒は三十へ粘ぎたい意志を有つて居ることは已にいふた通りである、此場合若し黒が三二へ出れば、此振替りは白の方現に利益であるから、黒は三一に粘がねばならぬ、而して白の三十の石を提るには、黒が二手を要するから、白は同時に一手何處にか打てる勘定である、以下四五までの結果に徴して黒の方少し得であるのは、そは前にも斷つた通り、白十四の頂越が時機早い故から來たのである（白三四の手で三八に粘ぎ、黒三五、白三六、黒三七の時、白「に」に打つて黒に「ほ」に粘がせ、先手を取つて打つ方が、譜の如くなるより少し優つて居る）○黒四五は場合を得た手である、凡て征にしてる石は其中りを打たれぬ前に、間を見て打拔いて置くべきものであることを忘れてはならぬ○黒四七と白四八、黒四九と白五十は何時もいふ見合の大場である、併し其撰擇の優先權が黒の手中にあることは、先を布いた効能である○白五二は手を拔くと黒から「へ」に打込まれて盤られるから、それを用心したのである○黒五五の打込は亦場合を得たものである、中央の黒壁堅固である此石立では、斯く打込みしとて白から容易にイヂめることが出來るものではないからである

第七圖

白八の締りは今は「い」に打つが普通とされて、圖の如く打つを好まざることゝなつたが、古くはよく打つたものである、其打たざるやうになつた原因はといふと、「ろ」に打込まれて活きられるからだので、併し此處では趣向として變化して見たのに過ぎぬ○黑二一は二二の處へ桂馬に打つ手もあつて、黑の方惡いことはない○白二二の綽は二六へ當てると、黑に二九に二段綽をされてマヅいし、又二五へ引くのは筋違で、黑に二二に行びられて宜くない所から、黑が若し二五に綽出さずに二九へ截れば、其時二五に引かうといふ考へであるのである○茲に於て黑は白に二五に引かれては面白くないから、二五と綽出して二二の一子を提り、三三に綽ねて振替らうとする胸算を立て、それには隅の黑は活きて置かねばならぬことになるので、其時の都合のよいやうにと、此處で二三と二四との交換を了して置いたので、卽ち後を慮る周到の用意であ

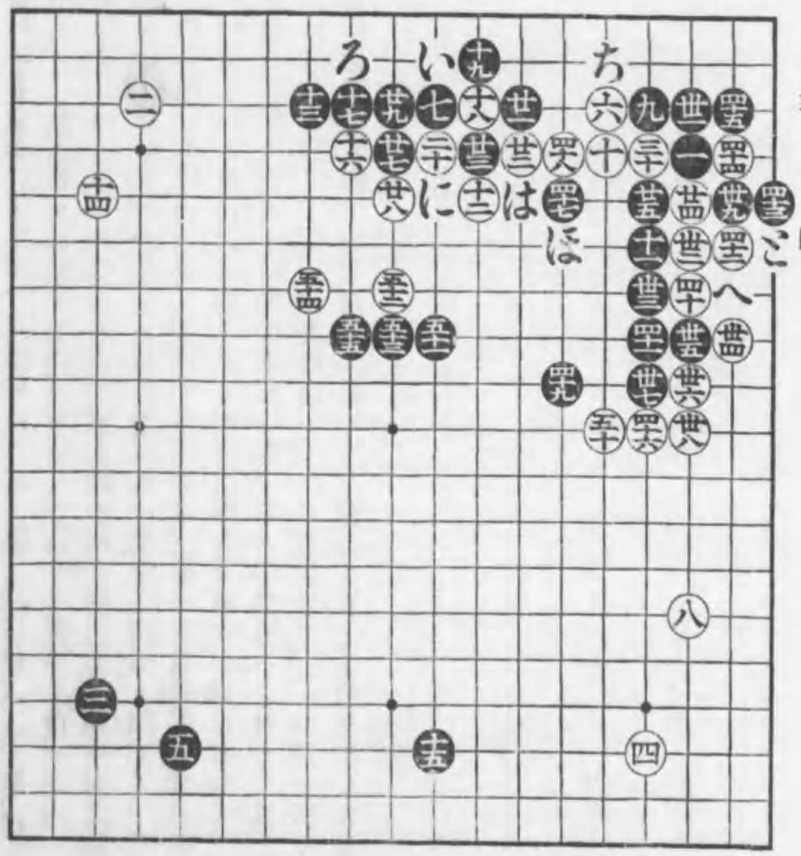


第七圖

つて、所謂手順で働きのある着手といふべきもので、此處らが眞に棋を味ふべき所である○白三六は一見四一に打ちさうな處であるが、すると黑に三六に引かれることになつて、其結果白三九、黑「は」、白「に」、黑「ほ」となり、隅の黑の五子を提ることは出來るけれども、此振替りは白の不利である、さればと言つて白が三六に打たないとすれば、外に打つ手に困るので、それで三六に打つたのである、併し圖の如く四五までの結果矢張白の方面白くないのは、前にいふ通り十四の頂越の時機が早いからである○黑四七は前圖の四五と同じく、凡て征にした石は間合を見て提つて置かないと、後に種々の障害を來すものであるから、當りを打たれぬ先に提つて了ふことが肝要である○白四八、黑四九は何時もいふ見合の大場であるが、黑四九で五十の處に打つて、中央の白を睨みつゝ左側の白に打込を狙つても宜い○從て白五十は釣合の宜い手である○黑五一と打つて五三に打つたのを、「へ」に打つ筋を存して單に五三に打つて居ても宜い、其時白が「と」に尖頂けて「へ」の筋を防げば、「ち」に行びて中腹が手厚くなるからである○黑五五と輕く地を消して置いて、而して五七と筋を衝いた着手は、五五の石と相呼應して大に宜しい

第八圖

前二圖は直に頂越を試みて失敗したから、今度は多少模樣を替へたので、白十六より二二までは二四に頂越さん爲めの準備として打つたのだが、矢張結果は前同樣で、つまり此方面は手を抜くが最も得策であるといふ事に歸する、白二二の手で二九に綽込み、黒二三に一子を提り、白「い」に當て、黒十八に粘ぎ、白「ろ」、黒「は」、白「に」、黒「ほ」と振替る定石が古くあるけれども、白に不利大なるを以て今は採らぬ、これは只參考としていふて置くのである○黒三七は前圖には「へ」に打つたのであるが、本圖の場合は上邊の方が違ふから、「へ」に打つては隅の黒の活具合が面白くない、それで圖の如く三七に綽ねたのである○黒四三は「と」に綽ね、「へ」に粘がせて四五に打つを普通とするのであるが、此場合はさうすると白から「ち」の下りを先手で利かせらるゝことになるから、それを避けて斯く打つたのである、卽ち白が「へ」に粘いでも、隅の黒に容



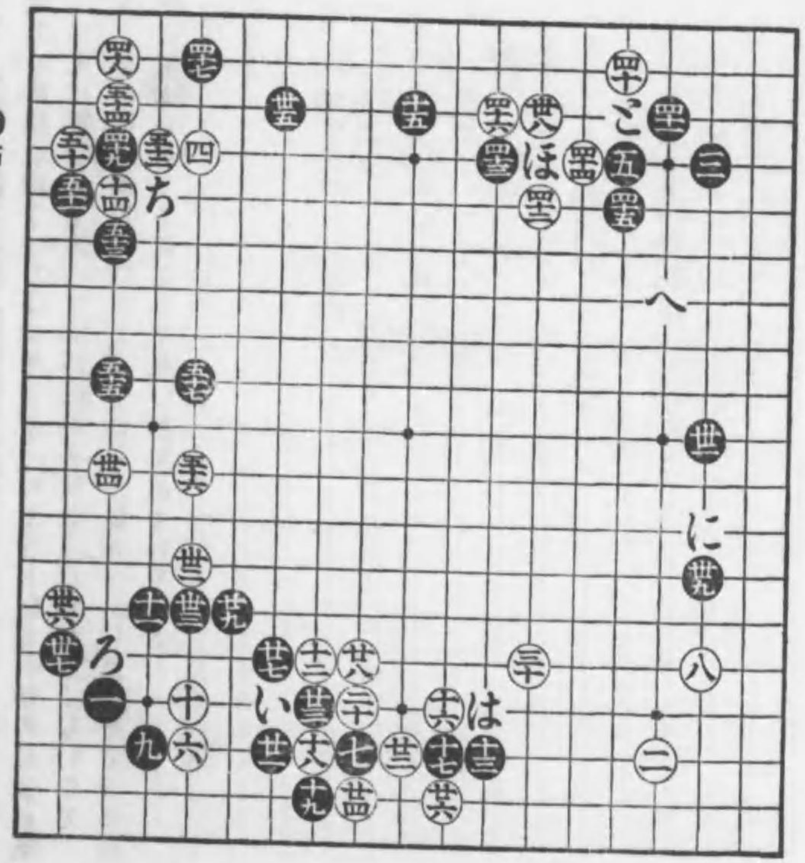
第八圖

㊇ 劫取

易に死形がないから、黒は手を抜くことが出來る、それで止むを得ず白は四四に截を入れて先手を取つたので、黒は得たりと四五に此の一子を提つたのは、直ちに此隅が治まつて了つて、「ち」の下りも何も一切の厭味を無くして了ふので、黒の利益は甚だ大なるものがある、斯くて黒四九までの結果は矢張白の方面白くないので、結局時機尙早の頂越は失敗に歸するものであることは明らかになつたわけである○黒五一から五五までは手筋である、若し白が五十の手で五一は打てば、黒は五十に打つて同じく手厚い形を成すのである

第九圖

黑二一の時白「い」に約へて「ろ」に頂越す趣向は、前圖に示したが、頂越はいかぬといふので、此處には單に六、十の白と十三、十七の黑と振替る定石を示したのである、白二二以下黑二九までは卽ちそれであるが、今は白の方損として、此定石を採らぬことゝなつて居る、といふ理由は、黑と白との取具合が違ふからである、黑は白の二子を完全に取りきつて居るが、白が黑の二子を完全に取りきつて了ふには今一着を要する、卽ち黑にはまだ「は」に曲つて逃出すやうな活動の餘地を存して居るので、白は三十と打つてトヾメを刺すの止むを得ざるだけ夫だけ割を食ふわけで、白は面白くないからとて今は流行しなくなつたのである○黑三一の處は三、五と高く締つてあるから、此場合第一等の好着點であつて、一には敵の模樣を消し、一には我が模樣を張るといふ天王山である、白が三十と黑の十七、十三の石を取りきつて居れば、黑より直に



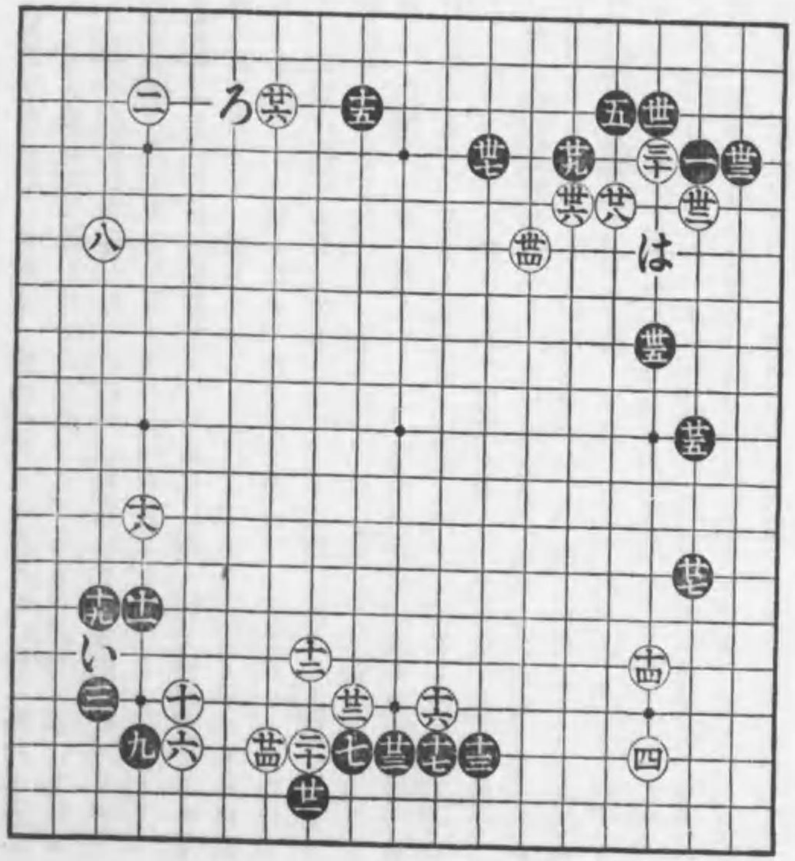
第九圖

此最緊の要害を扼せらるゝ手順となるので、二二以下振替の定石が白の不利であることを、一層適切に證明し得らるゝのである○白三八の打込を放任して黑が三九に打つたのは、此場合三八の石を直に擒り得べき妙手もなければ、急にイヂめやうとする着手もなく、又其儘にして置いたからとて十五、三五と二間に拆いて居る黑に格別の影響を來すといふわけでもないから、手を拔いて三九に詰めたので、此處は白から「に」に來られると黑から三九に行くのと、出入の損德からいへば多大の處であるから、先づ此點を占めたのである○白四十、四二は黑から急にイヂめられる氣遣ない處であるならば、今打つ必要がないではないかといふ疑問があるかも知れぬが、三八は挺身敵城深く躍り込んだ單獨の石であつて、黑からいへば急にイヂめることも出來ぬかは知らねど、白からいへば何處までも薄弱極まる石であることは免かれぬ、玆で之を整理して置かないと、白は思ふ樣に今後の活動が出來ない、何故かといふと、其爲に孤獨な石は救ふべからざる窮境に陷るべき懸念があるからである○黑四三と覗いたのは白に「ほ」に粘がせやうとしたので、若し白が「ほ」に粘いでは眼形を失ふことになり、所謂形違の手であるから、黑は然る後「へ」に圍ふが他に轉じやうが、自由自在な活動が出來るのである、故を以て白は「ほ」に粘がずに四四に尖頂けたのである、黑若し手を拔けば直に四五に綽ねられるので、是非とも四五に行びなければならぬ、そこで四六と打ち、「と」の利きを以て眼形を整へ、黑の覗の趣向を挫いて根底から其意味を無効に歸せしめたのは、洵に鮮やかな手際であつて、此形は讀者に注意して心得て貰ひたいのである、斯く眼形が整つては、黑は最早此方面に手を着けることが出來ないから、四七に斜走して左方の白域を侵略すべく出懸けたのである○黑四九は白の應手を試みたので、卽ち手筋である、白が若し「ち」に引くと五一に綽ねられる厭な味があつて、大に不利を來すから五十に綽ねたのであるが、黑は五一に截り五三に綽ね、五五、五七と打つ順になつて大に働いて居るに反し、白は四九の一子を打拔いた五二、五四の尻尾に、黑には痛痒を感じない四、四八の二子がくッついて居て、所謂無駄石を集めた畸形を成して居る、四、四八の二子が馬鹿面をしてブラ下つて居るに反し、五一、五三の二子は五五、五七の黑を大に擁護して居る、これは四九の手から生れ來つた當然の結果で、一着の石が處を得ると否とは直に斯る差異を生ずるから、手筋といふものは

恐ろしいものであることを味つて貰ひたい

第十圖

黒十九は白十八が來ると何時でも「い」に頂越されるから、それを防禦したのである○黒二三は前譜第九圖には二四に打つて振替るが利益であると說いたから、何故粘いだといふ質問が出るかも知れぬが、本譜は已に十八、十九の交換が了されて居て、前譜とは場合が違ふ、若し此場合に於て前譜の如く振替るものとすれば、十八、十九の交換があるだけ、反對に黒の方が割を食ふことになる、元來黒の恐れるのは、此一帶の白に整理がつくと、直に「い」に頂越されるからで、それで此白をイヂめて頂越させるの間隙を與へないのであるが、十八、十九の交換に依て此隅には何の厭味も無くなつて了ふたから、白に二四と整へられたとて、顧慮することなく他に轉ずることが出來るのである、而して白が二四と行びたのは、此場合手を拔いて二五の邊に據りたいは山々であるが、黒から二四に綽ねられると直

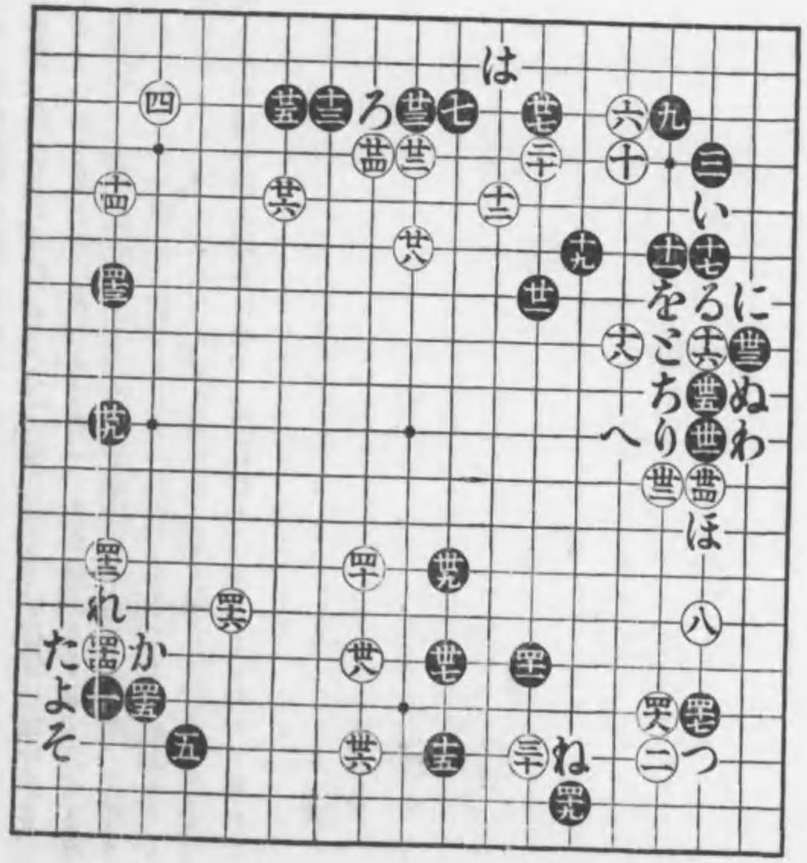


第十圖

に眼形を失して、此一帶の白が薄弱になり、中々一手位大場を利したからとて、其損失がおッつかないからである○白二六、黒二七は同じ見合の好處ではあるが、白としては黒より「ろ」に來られる方が打擊が強いから、二六を擇んだ次第で、大桂馬締りは隅の關係がヒドいからである○白二八は黒一、五の締から十五、二五と兩方に廣く拆いて居る場合に古來から能く用ふる慣手で、黒が孰れか一方の領有を確實にせんとすれば、其他方を侵略しやうとするので、それには兩方の中心たる二八の地點を占據することの利益であることはいふまでもない、本圖では黒の右邊は二五、二七の二間拆があるので、比較的薄弱なる左方を二九と圍つたから、白は三十以下右邊を消すことゝなつた次第である、若し黒右邊を圍ふ場合には、「は」に打つべきことを知つて居ればそれでよい

第十一圖

白十六は第十圖の十八と同じく「い」の頂越を狙つた手であるから、黒は同じく之を防いで十七と打つたのである○黒二七は「ろ」に出截りの厭味を負ふて居る處で、急には手もあるまいけれど、白から「は」の邊にでも來られることになると眼形がなくなるから、イヂめられぬ用心の爲に補つた手である○白二八も同じく上部が薄弱であるから、又一着を補つたのである○黒三一の打込は三三の盤を見て打つた手で、其時白が「に」に尖んで盤を止めると、黒は「ほ」又は「へ」に打つことゝなつて、白の石は遮斷されて薄弱となり、容易に黒を攻めることが出來なくなるから、白は輕く三二に打つたので、黒も當初の意志通り三三に盤つたのである○白三四と約へたのは、若し「に」に約へると黒は「と」に割込む、白三五に突當る、黒「ち」、白「り」に截る、黒「ぬ」に引く、白「る」に粘ぐ、黒「を」に粘ぐ、白「わ」に截る、黒三四に有びるといふことになつて、

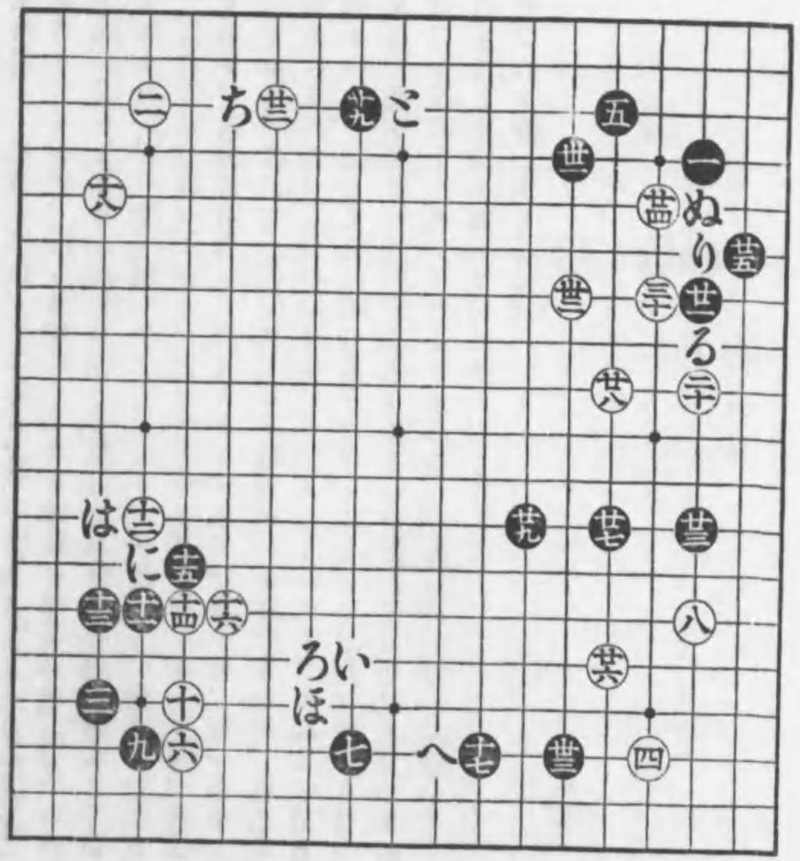


第十一圖

黒の方が大に宜しい、それで白は三四と約へて黒に三五に突當らせたのである○白四四と頂けた時、黒が若し「か」に綽ねれば白も「よ」に綽ねるのである、其時黒「た」に截れば白「れ」に粘ぎ、黒「そ」に「よ」の一子を取れば、白も亦四五に截つて「か」の一子を取るといふ振替りになるが、何も黒は好んでさる紛擾を起す必要はないから、四五と素直に引いたので、白も亦四六と平穏に左右を聯絡したのである○黒四七の打込を白が四八と外から約へたのは、此四七の一子は隅に活を有して居るから、一見大損のやうに見えて、何故「つ」に受けないだらうとの疑問が讀者の胸中に湧くであらう、併し此時の白の腹の中には、よし此一子に活を隅に與へても、其影響に依て十五以下の黒は薄くもなれば浮いても來る、其處に附込んで思ふさまイヂめてやらうぞ、打つてやらうぞといふ、淋漓たる精神が滿ち滿ちて居るのである、(之を「つ」に受けては平穏無事には違いないが、四七の石が十五以下の黒と犄角の勢を成して、其爲容易にイヂめることが出來ないといふことになる) 此消息は讀者に分らないかも知らぬが、黒には能く分つて居るから、決して急に隅に活きやうとはしない、先づ四九と打つて敵の動靜を窺つたのである、此四九は又深長なる意味を有つて居て、此場合では白が「ね」に應ずる位のものであらうが、四九と「ね」と交換して置くことが、十五以下の石がイザといふ場合には大に役に立つのである、斯ういふ風に意味の上にも意味を存し、機謀の上にも機謀を算して行く處に、言ふに言はれぬ妙味があるので、棋家は之を味と稱するが、此處いらが碁の機微で六ケ敷い處である

第十二圖

白十二はこれまで「い」又は「ろ」に打つて來て、それが本手であるけれども、碁が分りよくなる氣味があるので、一つ變つた外の着手を試みやうとした結果、十二と打つて黑の應答を聞いたのである、全體白は六、十の弱い石を其儘に放つて置いて、十二の方面から行かうといふのは少し無理な相談で、それで好い結果を得やうとするは餘りに虫の善過ぎた事であるが、白を持つた態度の上から趣向に出たのである○黑十三は前にもいふた頂越を防ぐ意味から之に應じた着手で、古來から有來りの手であるが、近代は尙研究が積まれて、十二と打てば十四へ、「は」に打てば十三へ受けるが宜いといふ事に諸大家の意見が一致されて、今ではそれが法則のやうになつた、何故かといふと圖の如く十四、十五、十六となつて、黑が「に」粘ぐ場合が來たと假定すれば、十三の石は堅い處にブラ下つて不器用な形を成して居るが、若し十二の石が「は」にあつ

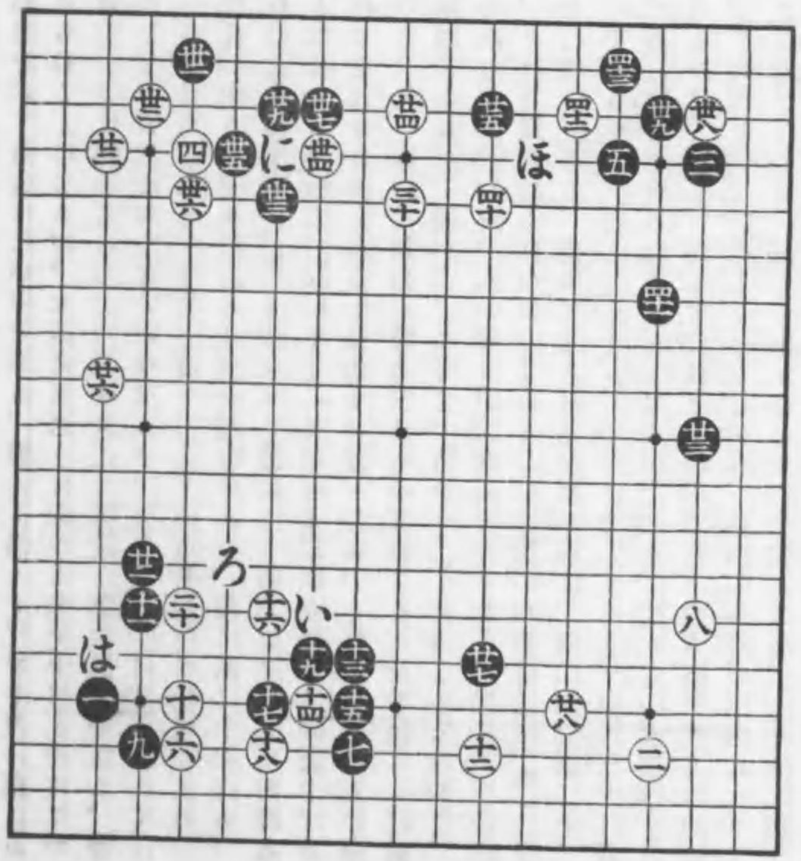


て見れば、丁度十二に掛粘ぐことになつて形が好いからである、又黑十三の手で「に」に突當つて打つても、根が白の十二が横着な手であるから、黑に惡い結果を來す氣遣はないのである、而して黑の十三が十四の處にあるものとすれば、白は「ほ」に走路を取らねばならぬことになるが、本圖は有來りに從つて黑が十三と受けたから、白は得たりと直に十四、十六と頂行び、黑を「に」に粘がしめて七の黑を攻める手段に出でたのである、併し黑の「に」に粘ぐは前いふた通りの不器用な形をなすので面白くないのみならず、白から「へ」に詰められては七の石が逃げねばならぬことになるので、「に」の粘は其儘にして十七に拆き、以て此方面を守つたのである○黑十九、白二十は双方見合の大場であるが、黑先づ十九を擇んだのには少々理由がある、假に黑二十を占め、白「と」を占めるものとせば、白の二、十八を中心として十二、「と」と圍はるゝ模樣は、略方形を成して面積甚だ大なるものあるが、圖の如く四、八、二十と圍はるゝ模樣は、既に十七に黑があるだけそれだけ狹長で、其比較同日の談ではない、卽ち白に「と」に據られると二十に據られるとは如上の差がある、それで黑は十九を擇んだので、見合の場合に優先權を有つて居るのは、先を布いた効力の偉大なるものであることを遺憾なく證據立てゝ居る○黑二一と白二二も前同樣の見合場所であるが、黑が「ち」に打てば白が「り」に打つことゝなつて、さうすると黑は一寸打場所に窮する委となるのみならず、白四、八の締りが大桂馬であるから、黑は二三の打込上二一を占める方が何かに便宜であるので、それで圖の如く打つたのである○白二四の時黑普通は「ぬ」に受けるのであるが、此場合二五と尖んだのには大に理由がある、黑の二三と打込みたる石は、白二六、黑二七、白二八、黑二九となるは必然ともいふべき成行であるから、若し二五を「ぬ」に受けたとすると、白に三十に飛頂けられた場合に、「る」の突當りを利かされて直に眼形を成されることゝなるが、二五に尖んだのは直接「る」の利きが響かないから、殆んど一着の相違があるわけである、而して白は三十の手で三一の方面を打ちたいのは山々であるが、二十、二八の孤立を恐れて「る」の利きがないことを知りながら、此白の維持が困難になつては堪らぬから、三十に飛頂けるの止むを得ざるに出でたので、斯くて黑は悠々三一に尖んで五、十九間の薄きを補ひ、尙白をして三二に一着を費すべく餘義なくせしむるに至つたのも畢竟二五の働きで、白が斯う自己を

補ふに急になるだけ、それだけ二三以下の黑が餘裕を有つて居るのである

第十三圖

白十二は前圖の十二と同樣六、十の二子を捨置いての趣向に出た着手で、卽ち前圖黑十七の拆を白が先に占めて見たのである○黑十三を「い」に打ち、白十四を「ろ」に打つた遣方は、村瀨秀甫師の方圓新法に出てゐるから、此處には詳說を略するが、圖の如く十三と飛ぶのも穩健な手で、既に十二を白に打たれた以上は、是非六、十を攻めて白を二十に頂けるべく餘義なくせしめ、二一に行びて以て「は」の頂越を無くして了ふといふ意志を有つて居るのである、併し白とても二十に頂けてムザ〳〵黑の此疵を無くして了ふのは如何にも殘念であるから、出來得る限り他の方面に其出路を求め、以て「は」の疵を狙はうとしたので、それで十四と覗いて十六に斜走して見たが、黑から十七、十九とイヂめつけられては、終に二十に降參する外出る途がない、斯くて黑は

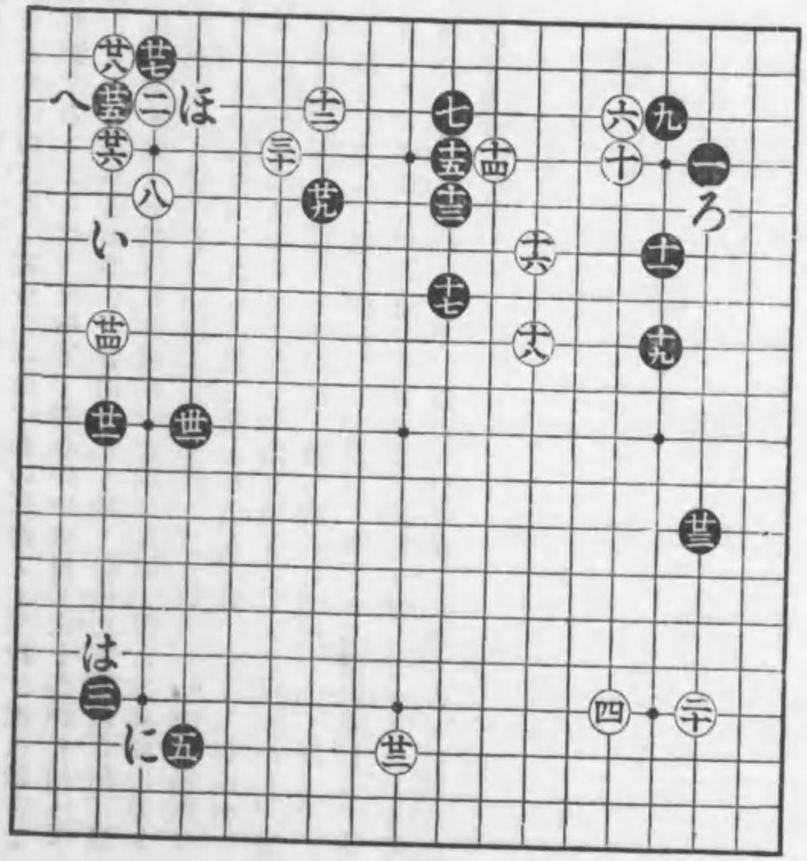


第十三圖

思ひ通り二一に行びて凱歌を奏したが、白は此處で大に損をして居る代りに、前に十二とうまいことをして居るから、大局の上に於てはさしたる事もないのである○白二三と締つたのは、碁の原則として締り又は懸りを最大とするのみならず、此場合に於ては最好の要點であるから打つたので、初心の中は得て之を等閑に附して他の茫漠たる所に打ちたがる弊癖あつていかぬ、これは初心者の爲に一言注意して置く○黑二三、白二四、黑二五、白二六は各大場を一方づゝ占據し合つたので、本圖は其撰擇に前圖程の意味はない、單に其氣合に從ふたのである○黑二七は直に二九に打込みたいのであるが、先づ自己を丈夫にして置いてそれから喧嘩に出懸けるといふのが黑本來の主旨であるから、斯く一着を補つた次第である○黑二九と打込んだ時、白は三四に掛けても、又「に」に頂けても打つ手があるが、それでは下の方で活きられて却つて地を損することになるから、單に三十と飛んだのである、而して白三四と覗いた時黑三五に尖頂ける手筋は、第九圖の白四四と全く同じで、これは前に詳說してあるから省略する○白三八と頂けて黑に三九に約へさせ、而して四十と二四以下の石に補つたのは、內々黑に一寸厭がらせの味をつけて置いて、序に「ほ」の邊に受けさせ、其形を凝らせやうといふ野心が含まれてある、故に黑は此方面をば放つて置いて四一に圍つたので、素より白に四二に來られゝば四三に受けるといふ覺悟は、前から既に決めて置いたのである

第十四圖

本圖は黒の十七から前圖と異なつて居るが、前圖では白八の締が「い」に在つたから、其間に間隙を有して居るだけに、七以下の黒に對する壓力の程度が違ふ、本圖は一間の高締であるから、前圖に比しては黒に強く應えて居て、前圖の十七、十九の如く直接に行くことが出來ぬ、(何故かといふと、二九と打つても前圖の二七の如く白には響かぬから)それで十七と打つて白に十八と飛ばせ、そして十九に飛んで「ろ」の頂越を防いだわけである、前圖に比べると手緩いやうであるが、それは白八の締り方から來た必然の勢ひである○白二十は前圖二二と同じ意味である○黒二一と白二二は共に大場であるが、此場合黒五の位が低いから二一の方面を擇んだので、若し三、五の締が「は」、「に」となつて居れば、無論二二に打つのである○黒二五と頂けたのは卽ち敵の動靜を窺つたのである、此時若し白が二七に下れば、「い」に打つ筋があるから、白は

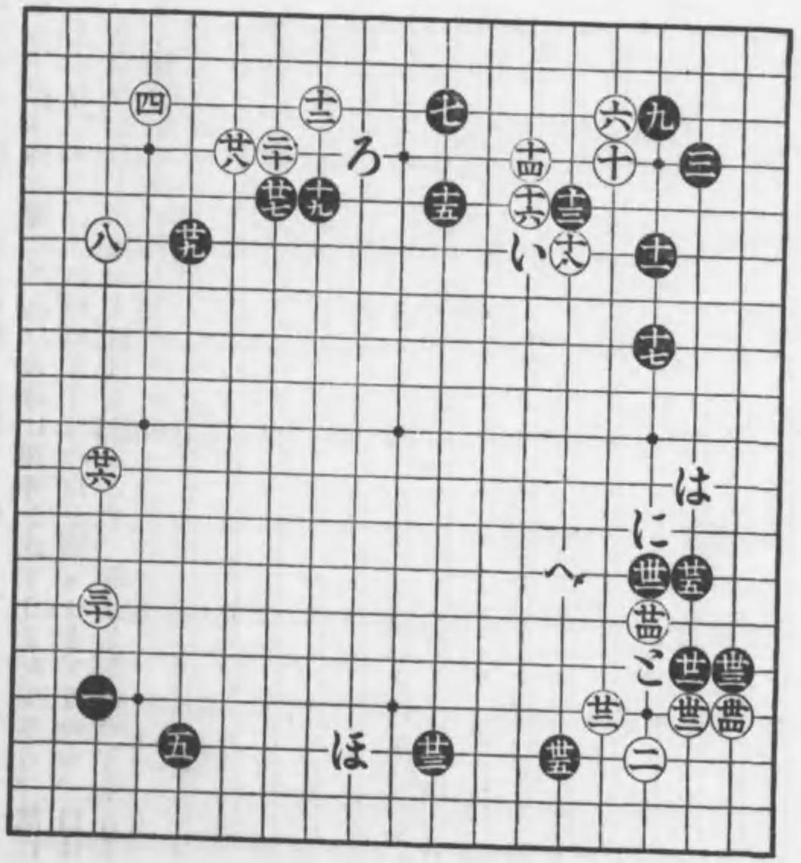


第十四圖

二六に綽ねざるを得ぬ、それを黒又二七に綽ねたのは、卽ち二五の意味と關聯して居る手で、若し白が「ほ」に行びては、「へ」に下つて隅に活を有つて居るから、黒は外に轉じて三二の邊に形勢を成すことが出來る、故に白は勢ひ二八に截らねばならぬ、それで黒は二九と打つて、「ほ」に綽ねて十二の白を擒らうとするから、白は何うしても三十に受けるべく餘義なくされる、此處等が卽ち棋機の玄妙なるところで、斯うして置いてそして三一に飛んで形勢を定めるなど、玩味すればする程棋味の津々たるものがある

第十五圖

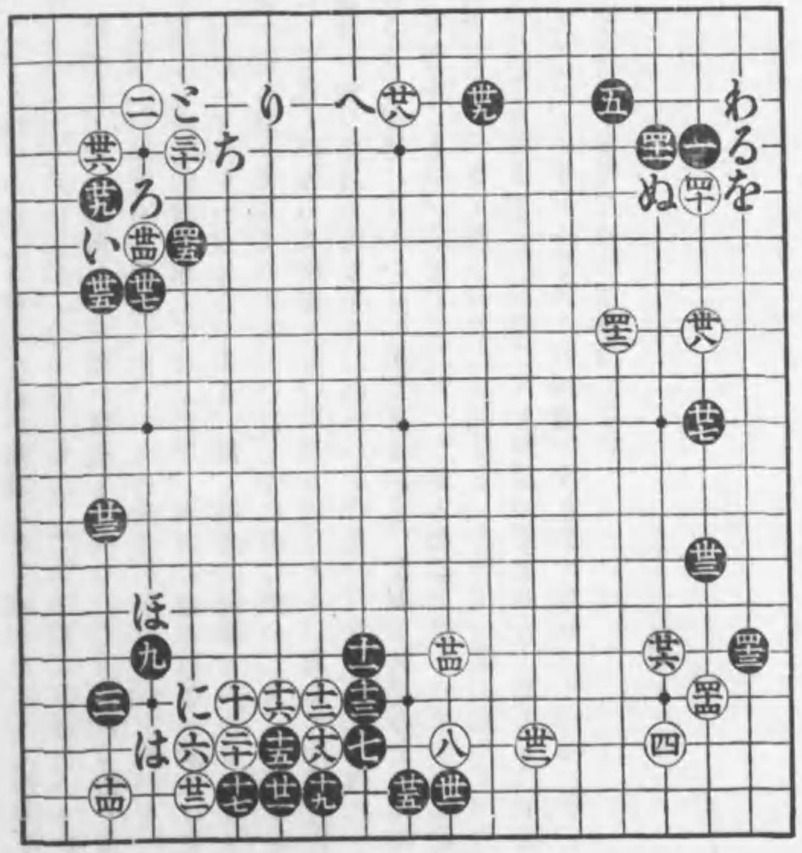
黑十三は前々圖及び前圖では單に十五に飛んだが、本圖では先づ一擊を白に加へてから飛んだので、白の十四、十六は黒から與へられた命令に從つたのである○黒十七は一見「い」に約へたいやうな處であるが、それは無理であるから先づ十七に備へて自己の缺を補ひ、而して後に「い」に約へんとするので、それでは白が堪らんから十八に綽ねたのである、此綽は此場合必ず打つべき要處であることを忘れてはならぬ○黒十九は本來は二一に懸るべきであるけれども、先手であるから斯う打つて、一着七、十五の薄弱に補つて置いて二一と懸つたので、是迄は黒十七の時から企畫された事を遂行したに過ぎぬのである、(黒十九と冠した時白の二十は、普通は二八に受ける形であるが、四、八の締が大桂馬である時に限つて斯く尖むのである、後に黒二七に赶し、白二八に行びる手順になるは必定で、斯うなると此一隅の白地は黒から一指を染めることが出來ないのみならず、白からは「ろ」に打つ狙を有つて居るのである)○白二二は一寸「は」に挾みたいやうな所であるが、右上隅の黒が堅固であるから、二二に掛けられては挾んだ石が孤獨になる虞がある、それで二二に尖んで置いて、外方から黒地を削減しやうとするのである○黒二三は既に白が「は」の方面に打込まうといふ碁勢でないから、此方面の警戒は放棄して、反對に二二の方面から自境を擴張して行つたので、白も同じ意味から二四に掛けて先手を取り、二六の大場を占領したのである○黒二七、二九は此黒が弱いと左上隅の方へ大きな白地を構成される虞があるので、自己を補ひながら敵地を消して行くので、如何に敵の疆域が廣大に見えても、一方自己の弱石を負ふて居る場合は、打込んではいかぬものである、斯く壓迫的削減を加ふるのはさして大きくないやうに一寸思はるゝが、其實甚だ敵に應えて居るのである○白三十は直接黒の二九に對して挾拶の仕樣がないので、此場合二六の石を丈夫にして置くが卽ち其挾拶となつて居るのである、而して此處は出入の損得甚だ大なる要點であることは、既に讀者の知つて居る筈である○黒三一と今此を打たないと、白に一着「に」の邊に地を消され、直に「ほ」に打込まれさうな形勢になりかけて來て居るから、此處で其用心をしたので、而して此手が亦白を攻めて居る意味を成して居ることは、白をして三二、三四と此石を整へさせた所に現はれて居る○黒三五は一寸「へ」に打ちさうな所であるが、さて斯う打たれて見ると「と」の出が酷く應えて、白は「へ」の方面に手を着けることが出來ないから、取りも直さず「へ」に打つたも同樣の効を有し、加ふるに下邊に幾干の地を成して居る、之を單に「へ」に打つたでは、一手が一手ぎりの外他の役を勤めぬわけで、地を殖した上に其牽制で何うしても其處へ敵の來られぬやうにするでなければ面白くない



第十五圖

第十六圖

白八。は是まで二九又は「い」、「ろ」に締つて、黒に「は」に尖頂けさせて打つ種々の變化を詳說して來たのであるが、今度は黒に「は」に尖頂させまい趣向を立て、それで八と詰めたのである、で八に打たれると何故黒は「は」に尖頂ける譯に行かぬかといふに、若しも「は」に尖頂けると、白「に」、黒「ほ」となつた時、七の黒が急激な威壓を受けることになるからである、故に九。と尖んで六の白を攻め、以て七の石に應援するのである○白十。の手で十五に打つ場合も、又は十四に斜走して下隅に活を圖る場合も、或は手を拔いて他に轉ずることもあるのである○白十二。に覗き、黒十三。に粘いだ時、圖の如く十四。と斜走するのは古來からの定石であるが、近代は十四に斜走せずして二四に飛ぶことが行はれて來た、以下二三。までは、古來の定型を示したのである○白二八。は普通ならば二九又は「い」、「ろ」に締るべきで、締りは最も大きいものであることは屢々言

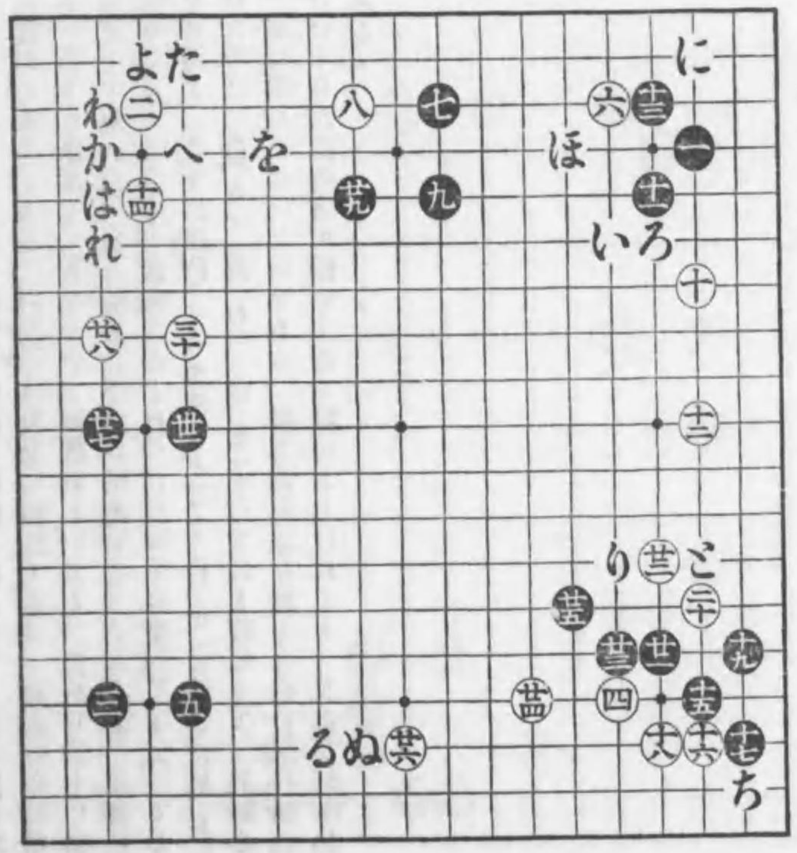


第十六圖

ふて來たのであるが、此場合黒に「へ」の邊に拆かれては、如何にも壯大な模樣を構成されるので、是は白の堪へる所でないから、二八はそれを割つて打つた趣向の着手である○白三十。は緊要の地點である、初心の中は得て斯ういふ處を等閑視するが、是からは忘れないやうに注意して貰ひたい、何故かといふと、黒から三十に掛けられて、白「と」、黒「ち」、白「り」となつたと假定して見れば、白は徒らに下邊の低地を這ふのみで甚だ薄貧なるに引替へ、黒は中腹に絶大なる壯厚の勢を張ることになつて、折角二八と打つた白の手は腐つて了ふのである○白四十。と頂けた時、黒は「ぬ」に綽ねるのが普通で、さすれば白「る」、黒四一となり、白「を」に粘げば黒「わ」に約へることになるのであるが、黒四一と引いたのは、白「る」、黒「わ」、白「を」となつたと假定して、其時必ずしも「ぬ」に曲るとは限らぬといふ意味から、單に四一に引いたのである、併し此意味を察した白に單に四二と飛ばれて見れば、四十、四一と交換した丈けいくらか白の方が働いて居る觀があるけれども、又あながち黒の方が惡いと斷定することも出來兼ねるのである

第十七圖

白八。は前圖同樣黑に十三に尖頂けさすまい手である○黑九。は前圖では十一に尖んだが、是は何方を先にしても可いのである、といふ理由は、白より十一若くは「い」に打たれると、先づ以て一の石に補はなければならぬ、さすれば七の黑は孤獨となる、といふて七の石を九に飛べば、差當つて一の黑がおいてきぼりになるからで、其何れかに一着を補つて置けば、其虞はないのである、又黑九の手で「ろ」に打つ事も、近代は場合に依て行はれて來たのである○白十。十二。は黑に九と飛ばれた以上は、十一に掛けるのも「い」に飛ぶのもうまく行かないから、六の石は一時構はずに、外に利益を求めやうといふ趣向で打つたのである○黑十。三。は掛り締りを最大とする碁の原則からいへば、此場合「は」又は十五に打つを至當とするけれども、白は兩方一時に締ることは出來ないから、其一方を締つた時他の一方を犯して遲くはない、故に十三と尖頂けて

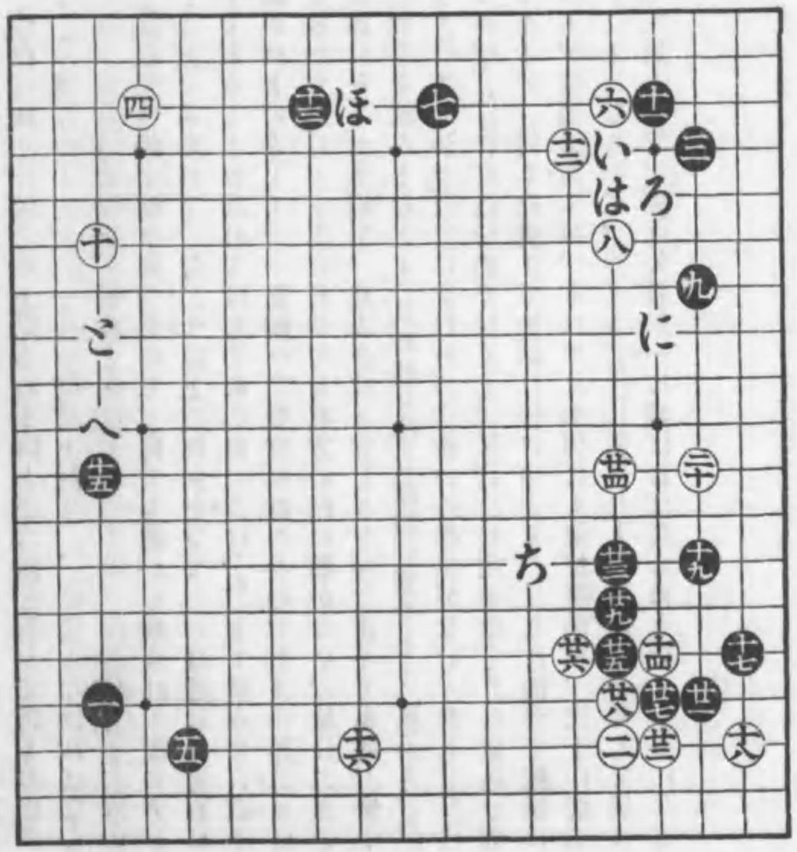


第十七圖

先づ此隅を堅めたので、此手がないと白から「に」に打たれて、六の石を容易に治められるからである（十三を「ほ」に掛けるのは、九の石のない場合である）○白は締りに於て左上隅と右下隅との二點を有して居るのに、何故十四。と左上隅を擇んだかといふに、黑に「は」に懸られると、二と八の位置上白は「へ」に尖まなければならぬ、（何故かといふと、黑から「へ」に掛けられては、白は下邊貧薄の低地を這はねばならぬ、反對に黑は左邊中腹に尨大な模樣を張ることになるからである）故に先づ此方面を締つたので、何でも敵から來られて困る方を先にすべきは無論のことである○黑十五。より十九。までは定石で、白二十。以下の趣向を立てたのは是は此定石に於ける當然の成行である、而かも黑二五。は本手であることを忘れてはならぬ○白二六。は「ぬ」まで進みたい處であるけれども、右方が薄弱だから、其間隙を衝かれまいとして、一路控へて堅實に打つたのである○黑二九。は平常は「る」が大場であるけれども、白が二六。と控へた爲に、「る」に打つても右方の白に響かない、故に二九と打つたので、終には白が「を」に受けねばならぬ樣になるべき處で、此場合最も宜しきを得た着手である、併し今少し碎いて說けば、此手で「わ」に頂けて白の應手を試みるなども、其時機を得た面白い策である、黑から「わ」に頂けられて見れば、白は「か」に約へるか、「よ」に下るか、「た」に尖むかの三着の外受手がない、若し「か」に約へれば「よ」に綽ねる筋で行くし、又「よ」に下れば「れ」に打込む筋で行くし、白の應手に依つて手段して行くのであるが、何も此處まで世話に碎けずとも、二九に曲つて鷹揚に濟まして居て澤山である○白三十。は「を」に受けるが普通であるが、それでは如何にも氣が利かぬ、三十に飛んで居るといふのは、「わ」の頂などが容易にないことになるから、つまり「を」に備へたも同樣の働をなして居るのみならず、一方に於いては二七の黑を脅迫して居るので、黑は矢張三一。に飛ばねばならぬといふやうになるのである

第十八圖

白二。は是まで二二又は二八などに打つを例とし、圖の如く目外しに打つたのは今始めてゞあるが、何れの點を擇ばうとも其場合の氣合に因るのであるから、比較して是非善惡の論評は出來ぬ○白八。は同じく黑に十一に尖頂けさせまい趣向ながら、前第十五圖及び第十六圖とは變つた着手で、黑の九。と交換しては損であるけれども、單に黑に十一に來らしめぬ凌ぎの意味のみに止らない、圖の如く黑の三、九の位を低くして置けば、黑は容易に二一に懸られぬ（何故かといふと、白に十四に掛けられて低地を這ふことになるから）といふことになるから、言はゞ白が二一に締つてあるかのやうな意味が含まれて居て、所謂一手半の利益を此方面で補つて居るのである○黑十一。は實をいふとまだ〳〵其時機ではない、單に十三に拆くが好いが、講說の便宜上示すので、之に對して白圖の如く十二。と尖むのは古來の定型であるが、近代研究が進むに從つて

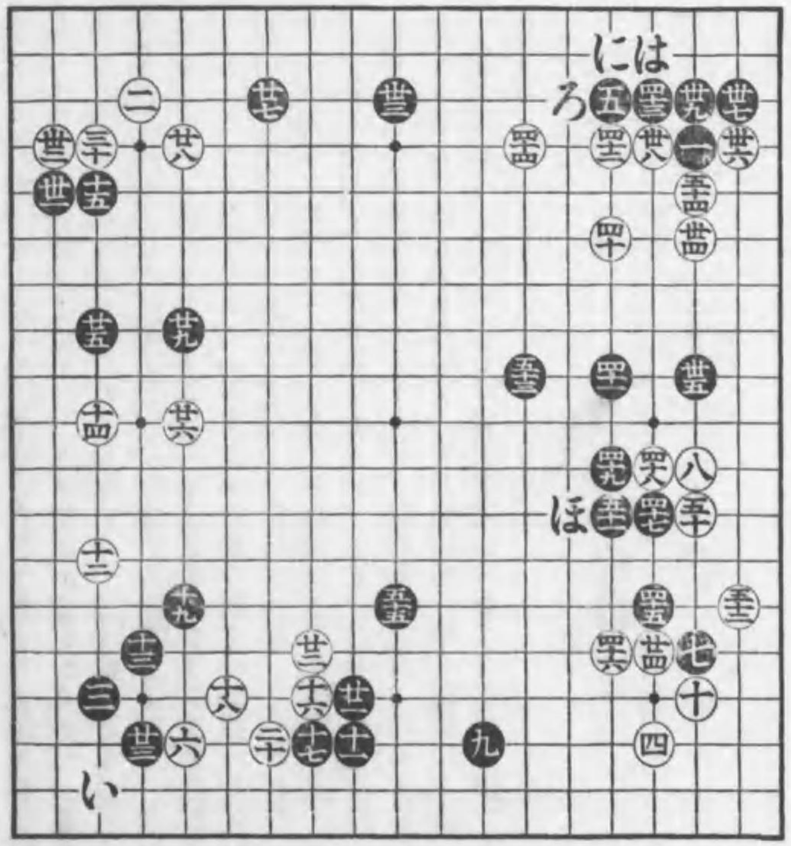


第十八圖

漸く古風は廢れて了ひ、「い」に行び、黑「ろ」に覗き、白「は」に粘ぎ、黑「に」に尖む時、白「ほ」に詰める定石を案出し、新式の方が可いと定まつた、圖の如く黑に十三。に拆かれては、黑に十分の形勢を成さしめ過ぎるといふのである、讀者試に其進化の跡を探究して見給へ○白十四。の締り方は黑三、九の位置が低いから出た一趣向として古法を示したものであるが、黑が十七に來れば白は十八に受けねばならぬ所から、是は損であるといふので、近代は殆んど見ない遣り方である、此處は前にもいふた通り黑容易に二一に懸れぬ所であるから、急いで打つ必要はない、此場合十五に拆いて居るが最も宜しきを得たものである○黑十五。はよく目下々々と口癖にいふ大場であるから、「へ」に一路進むが可いやうであるが、白十の石の釣合上此場合圖の如く一路控へるが好い、何故かといふと、後に「と」に詰める具合が宜いからで、若し十五の石が「へ」の處にあれば、「と」に打つのが餘りに距離が近いから、何だか間の拔けたやうな可笑なものでなる○黑十七。より白二二。までは此締り方に於ける定石である○黑二五。の時白若し二七に粘げば、黑は卽ち「ち」に飛ぶのであるが、二五、二七の交換は黑が働いて居る反對に白が不恰好の形に陷るので、白が自己の形態を整へんとすれば、圖の如く二六。、二八。と打つて、十四の一子を黑の手に委棄せねばならぬ、斯くて黑は十四の白を取つて、此打込の石を早く確實にすることが出來るのである、現代の定石に通曉せらるゝ讀者諸君も、一つや二つは古代の定型に對する打方を知つて置かれることが、强ち無用の業でもあるまいと信ずる

第十九圖

是までは黒が懸つて來た白を三間に挾んだのであつたが、本圖からは白が黒を三間に挾んだ局をお目に懸ける、黒と白とは攻守の立場が根本的に違ふのであるから、其應答手段も亦自から異なる所がなければならぬ、是迄の局面に精通せられたる讀者諸君は今後の局面を見て、黒白の根本義に就て發明自得せらるゝ事が少くないと信ずる○黒七と打つて白に八と挾まれた時、黒九、白十、黒十一と圖の如く打つのは、以前は動かすべからざる定法であつたのだ、併し研究の進んだ現代に於ては、單に白の六を十七に挾むが可いとなつて居る、といふのは、單に十七に挾んだものとすれば、黒は必ずしも九に拆くとは限らぬ、卽ち其拆き方に自由の權利を有つて居られる丈けそれ丈け棋意が廣いといふ理由である○白十二と挾み返して十四に拆いたのは、黒の九、十一に對する趣向の着手であるから、敢て惡いことはないけれども、十二の手で二四

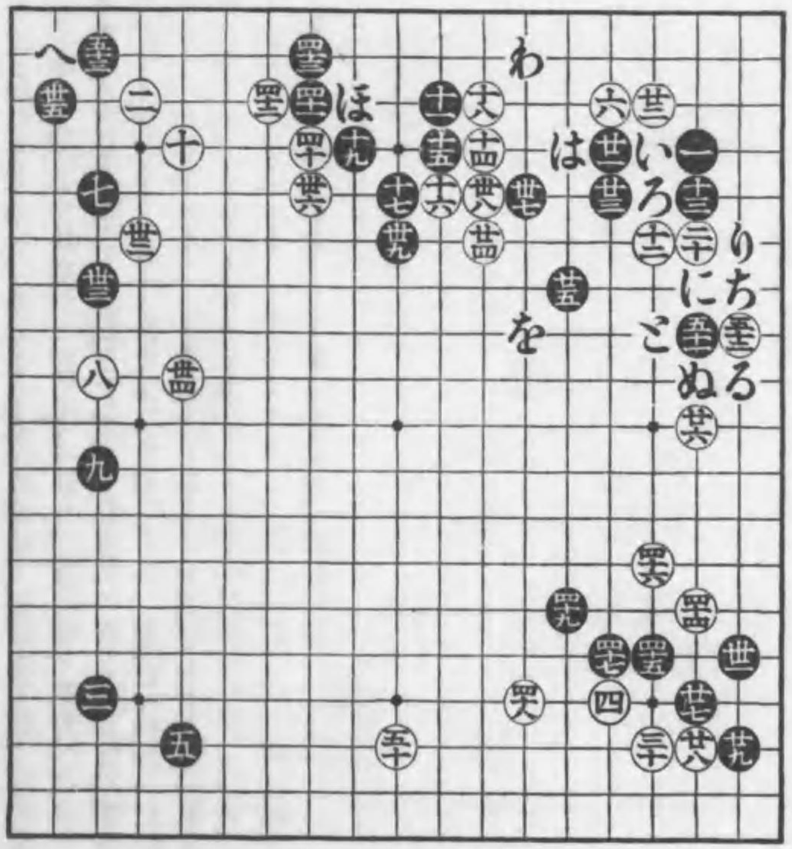


第十九圖

へ綽ねるも亦可い、何故かといふと、假に白四、八とある處へ黒九と打ち、白二四に締り、黒十一に拆いたとすれば、其時黒七へ頂けたから十に約へたといふ手順になるので、此七と十との交換は、白の方手割に於て利を贏ち得た所由になるからである○白十六は黒の九と十一との距離が二間であるから、圖の如く其角へ打つたのであるが、此手で「い」に斜走し、活を隅に求めても可い○黒三九は四三に約へ、白五四の時三九に粘ぐ受方もある○黒四三は一寸「ろ」に行びたいやうな氣がするが、さうすると白に四三に出でられ、黒「は」に約へた時「に」に截らるゝ結果となり、不味の因を後に殘すことになつて不可ぬ○黒四七、四九は手强い手である、白若し五一に截れば、「ほ」に當てやうと、五十に約へやうと、それが又如何に變化しても白に惡結果を來すので、實は五一に截る手は無いのである、而して黒五一に粘げば白は五二に盤るの外なく、五三に打てば五四に約へなければならぬ、敵をして惟命之に從はしめ、而して五五に斜走した手順は頗る妙ではないか

第二十圖

黑十一は三二に尖むが普通だが、其方は手を拔いて圖の如く六の白を挾む石立もある○黑十三は古くから在る手であるが、近來は二一に頂け、白「い」に綽込み、黑「ろ」に約へ、白二二に粘ぎ、黑十三に粘ぎ、白二三に截り、黑「は」に行びるを普通とする事となつた○白十四は二三に尖み、黑「に」に受ける時「ほ」に詰めるが普通の着手であるが、白を持つてる上から變化して見たのである、而して二六までの結果形勢白に可なるものあるは、畢竟黑十三の手が其所を得て居ないからといふ論に歸せねばならぬ○白三四より四四までの手順は面白い、其働いて居る所を能く味ふべきである○黑五一と打込んで敵の應手を試み、白五二と受けし時轉じて五三に備へたのは、白に「へ」に頂けられて七以下の黑を攻めらるゝを避けたのである、白若し五二の手で「と」に應ずれば、黑は「に」に突當つて盤るのであるが、白に五二と打たれて見れば、「ち」に綽ねれ

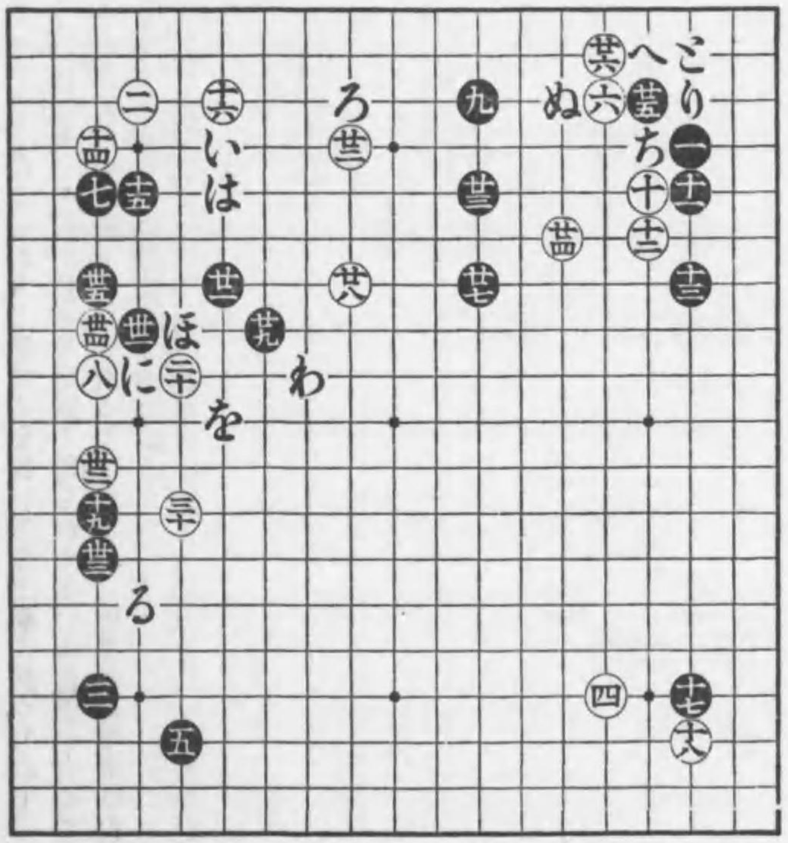


第二十圖

ば「り」に出られ、「に」に粘げば「ぬ」に突張られて面白くない、又黑「ち」に綽ねずに「る」に綽ねれば、白に「ぬ」に截られて矢張面白くない、つまり此處は急にウマいことはないから、黑は手を拔いて左上隅に補つたので、後に「を」の邊に右上隅の石が中央へ出るやうになれば、五一の石が始めて活動し得られるといふ含蓄を有つて居るのである、尙黑は場合を見て「わ」に覗くなどいふ面白い狙をも有つて居るのであるが、此布石の形勢は孰れかといへば白が打てる方で、つまりそれは黑十三の古風なのに原因するのである

第二十一圖

白八と三間に挾んだ時、黒七の石を必ず如何にかせねばならぬといふ限りはない、手を拔いて九と挾むなどは、前々圖に云ふた現代式策戰である○白十、黒十一、白十二、黒十三と相應酬するは定石であるが、此場合白が十と掛ける趣向に出でたのは大に意味がある、それは四の石の位置上から來て居て、卽ち後に十七に黒が這入るとすれば、一、十一、十三の黒が其位低いのに、又十七と位が低いから、白が十八に頂けて打つて居て利あることになるからである○白十四、十六の手は前の十、十二と相連絡して居る、此十六の手普通は「い」に打つのであるが、此場合九の黒があるから圖の如く十六に打つたので、詳しく言へば、假に黒に「ろ」に拆かれるとした處が、黒が「い」に在れば直接影響が生ずるけれども、十六に在れば其障害を感じない、卽ち自己を堅めて置いて九の黒から來るべき着手を馬鹿にするのであるから、黒は此愚を爲し得ざるこ

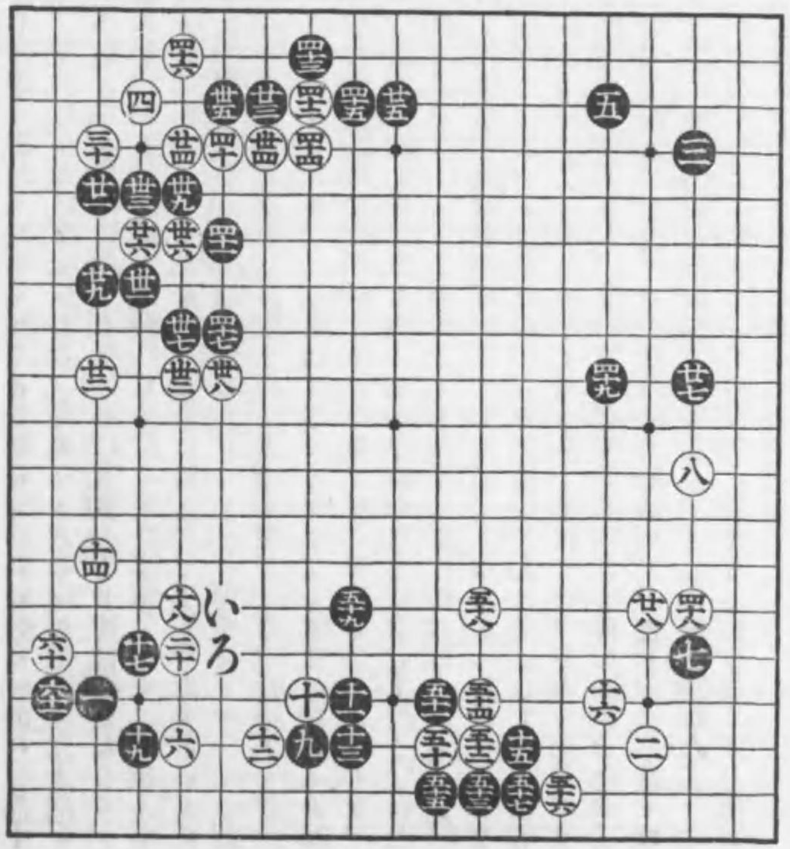


第二十一圖

とゝなるのである○黒十七は白に十七に締られては中々大きい處であるから、單に一着を打つて白に十八に受けさして置くので、之を尙定石通りに運んで行くのは、前述べた通り双方とも黒の位が低いからいかぬ○黒十九は何故普通の如く三二に詰めないかといふに、それには大に意味がある、此場合十六の白が低くて左上隅が堅固であるから、若し三二へ詰めれば白が二十に飛ぶ、さすれば七、十五の石に是非一着を補はねばならぬ、さうなつて見ると三二と三からの距離が遠いよりも、十九と其間隙を狹くして置く方が丈夫である、又白二十の手で「は」の方から七、十五の石を攻擊して來れば、黒は三一に打ち、白「に」に赴せば「ほ」に行びるといふことになる、其時でも矢張一路控へて在る方が都合が好い、畢竟白十六の位地上七、十五の黒が激しい壓迫を被るべき形勢に在るから、三と十九との間を衝かれまいといふ用意である○白二二は十六の位置が低いから高く打つので、若し十六が「い」に在れば、低く「ろ」に打つのである、一方高ければ一方低く、一方低ければ一方高くといふので釣合も調子もとれて行くが、双方高くか又は双方低くかではいかぬ、斯くて黒を二三に走らせ、二四と打つたのである○黒二五と尖頂け、白に二六に受けさせ、而して二七に逃出したのは働いて居る、白二六を若し「へ」に綽ぬれば「と」に約へ、白「ち」に當れば「り」に粘いで居て、よし白に二七に打たれた處で、「ぬ」に頂けて眼形を得るから、一向恐るゝに足らぬ、故に二七に逃出すに先だつて二五、二六の交換を行つたのである○白二八は七以下の黒と九以下の黒とを隔離しやうといふ意志のみならず、黒に二九に尖まして三十に逃げたのは働いても居るし調子も好い○白三十は單に八、二十の石を逃げる意味許りではない、十九を壓して黒に「る」にでも受けさせやうといふ計算も含蓄されて居るのである、併し黒は直ちに其策には乘らない、先づ三一に覗いて白の應手を窺つたのは面白い、之に對して白三二と頂けたのは棋家の所謂形で、之を「に」に粘ぐのは重くて不可ぬ、此處は白が「を」に尖めば黒は「わ」に應せねばならぬ所であるから、これありとすれば「に」に粘ぐの愚なるは言を要せずして分るであらう、黒も白に三二に頂けさして序に三三に守るに至つたのは、當初白三十の時「る」に受けるなどゝ比べて、其働きに雲泥の差があるではないか

第二十二圖

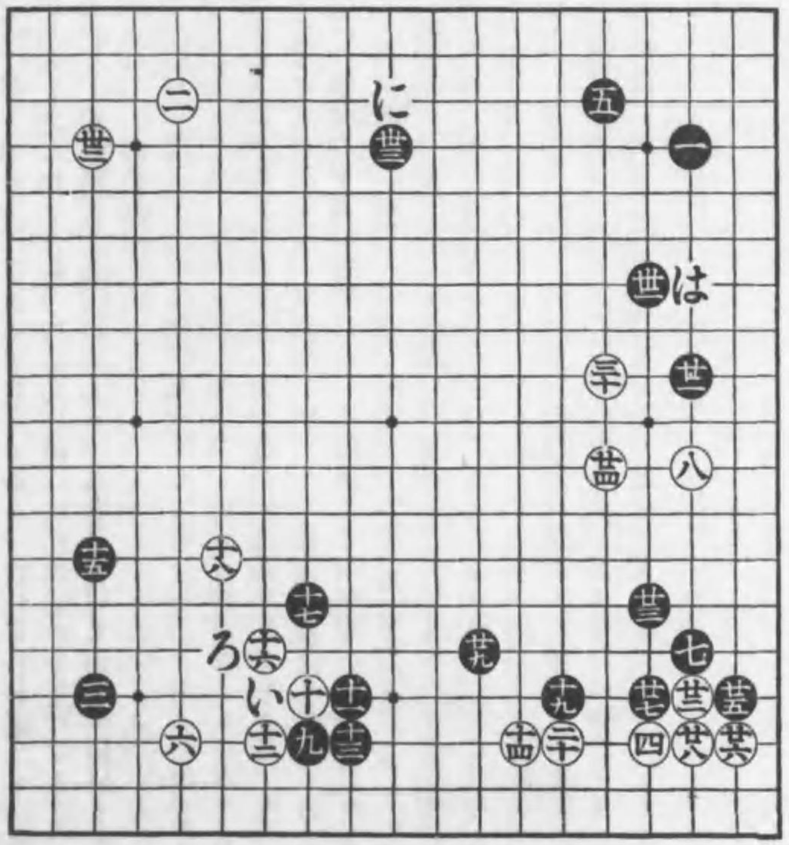
黑十五の手順此場合大に可い、何故なれば、黑十七に尖み、白十八に掛け、黑十九に尖頂け、白二十に約へるが普通の定石であるけれども、白は二十に約へずして十五に拆くかも知れぬ、其虞があるから先づ其方を占めて置いて、若し白が十七に掛けて一の黑を包圍すれば、黑も亦同じく十六に掛けて二の白を包圍しやうといふのである、さうなつては黑の利益が莫大であるから、白は十六に尖出すべく餘義なくされると共に、黑も亦十七に尖出すといふ順序になるのである○黑十九の手を往時は二十に出で、白「い」に行びる時十九に尖頂け、白「ろ」に約へると打つが定石となつて居つたが、近代では二十に出ない方が宜いと云ふ事になつたのは、前にも述べた通りである○黑二三と挾返して二五と拆いた趣向に對して、敢て議論はない所であるが、此場合二七に打つても又は二八に打つてもよいのである○黑三三は三六に綽ねるを普通とされ



て居るが、三三に出る手もないではないから、圖は其變化を示したのである、此時白三九に約へれば黑は三六に截つて、つまり三六に綽ねたと同じ形になつて、早く治まつて了ふことになるから、白はそれを避けて三四に頂け、以て變化を試みたのである、而して黑三五と之に應じた時、白三九に約へれば前述のやうになるし、又四十に粘げば同じく三六に打たれて治られるから、白は黑を三九に出さしめ、其調子を以て四十に粘がうといふ策を立て、卽ち三六に行びたのである、黑も徒らに白に好調を與へまいと、三七に尖頂けて二六、三六の二子を獲るの素地を作るなど、此處虛實の氣合が面白い所で、大に趣味が喚起されるのである、斯くて四七に至りて左上方に一段落が附いたから、白は四八に轉じて七の一子を取切つたので、此手は非常に大きい手であるが、黑は此石に補ふべき機會を得なかつたのである○黑四九は右下隅の白の境疆が堅固になつたので、三、五と二七の間が頓に薄弱となり、危險を感ずるやうになつたから、其侵略に備へつゝ自境を構成して行くのである○白五十と打込んで黑の動靜を探るの手段は、畢竟右下隅が堅固になつて顧慮する所がないから生じたもので、面白い着想である、黑若し五四に尖めば、白は五一に出でゝ戰端を開始するので、如何に變化しやうと、右下隅が堅い丈けに白に惡結果を及ぼす氣遣（假令五十、五一の二子を取られたからとて）はない、故に黑は止むを得ず五一に頂けたのである○黑五三普通は五四に約へる所であるが、白に五七に盤られては啻に損失大なるのみならず、其爲めに眼を失ふやうな事が出來する、故に五三と打つて下から上へ白を追立てた手段は大に面白い、此時白五四を五五に約へれば、黑は五四に約へるので、白は活を黑境内に完ふした所が、右下隅に地を損すること莫大なるのみならず、上邊一帶を黑に封鎖されて了ふことになるから、黑に厚壯の勢力を與ふる事も亦大變なもので、そは白のなし得ざる所である、以下五九に至るまでの折衝を、此意味に依つてよく味はつて見るがよい

第二十三圖

黑三に懸りし白六以下黑九、白十、黑十一、白十二、黑十三の形と、白四に懸りし黑七を白八に挾みたる形は、前圖と全く同一である、而して前圖に於ては白十四を十五の處に打ち、黑十五を白十四の處に打つたが、本圖に於ては白が先づ黑の來るべき十四の好點を占め、而して後に十五に挾まうとしたのであるから、黑も亦白の來るべき十五に據つて、其勢の均衡を保つのである、つまり前圖と各反對の地點を爭奪し合つたので、敵の據つて利ある個處は我亦據つて必ず同じ利を得べく、我の占めて良好なる地點は敵亦占めて同じく良好なる地點で、其處に盤面上の釣合といふものが意味されて居るのである、又黑十五に拆かずして「い」に截れば、白は「ろ」に應ずるのである○白二二に尖頂けた時、黑二三と尖むは卽ち形で、斯ういふ場合は常にあるから、初心者は記憶して置いて貰ひたい、斯くして八の白に迫り、之をして二四に飛ばしめ、二五

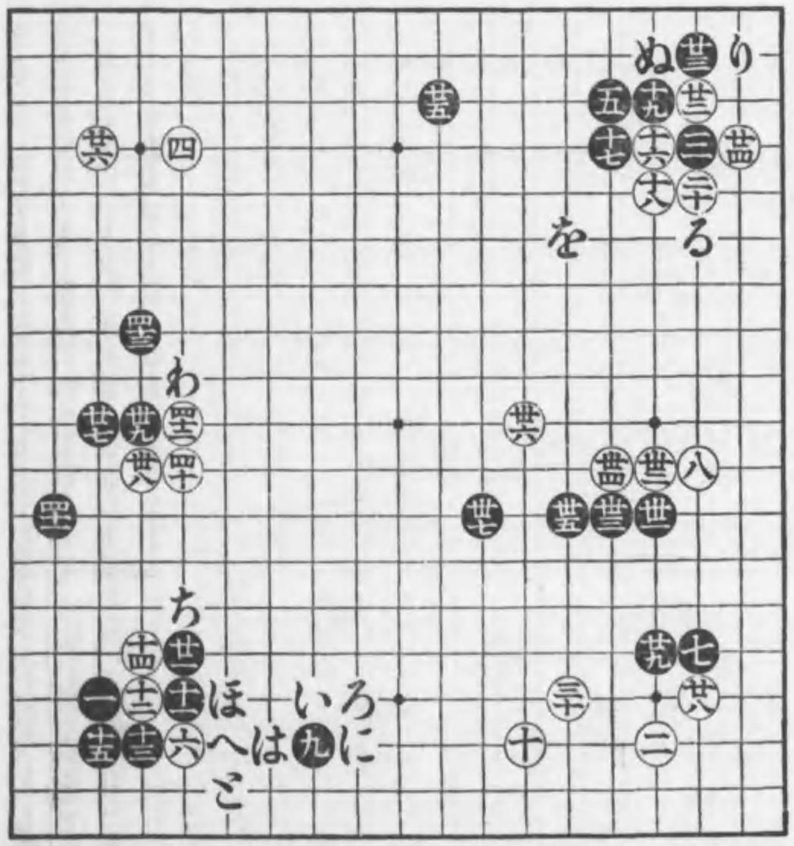


第二十三圖

に綽ね、二七に當て、二九に斜走するに至り、白を右隅を封じて八、二四の白を孤立せしめ、我は九、十一、十三、十七の石に連絡し、連衡縱斷の形勢を成して居る、要するに二三以下二九までの運びは甚だ輕快で、而かも實益ある遣方である○黑三一最も普通の受方であるけれども、場合に依つては此手を「は」に打つこともある○黑三三普通は「に」に拆くのであるが、白二の石も黑五の石も共に第三線の低きにあるから、「に」に打つては聊か重復に失する弊を感ずる、三三は卽ち二と五との釣合上から出た趣向の着手である

第二十四圖

白十の點は黑に取つても白に取つても樞要の好處であるから、前圖及び前々圖に於て互に此地點を爭奪し合つた打方を示したので、それが共に白「い」に頂け、黑「ろ」に綽ね、白「は」に約へ、黑「に」に粘いでから後行はれたのである、併し本圖の如く此折衝を爲さゞる前に先づ來るべき要處を占め、以て敵の動靜を窺ふのも亦一策である○黑十一と頂けた時、白の應手に大凡三樣の定石がある、卽ち十二に綽込むが一つ、「ほ」に綽ねるが一つ、十三に行びるが一つである、第一樣式に從つて十二に綽込めば、黑十三、白十四、黑十五、白「ほ」となつて、十一の一子を征にするのである、第二樣式に從つて「ほ」に綽ねれば、黑「へ」、白「は」、黑「と」、白十二、黑二一、白十四、黑十三、白「ち」となるのである、第三樣式に從つて十三に行びれば、黑十二、白「は」となつて活きるのである、然るに此場合第一樣式に從つては、右上隅に三及び五の黑が在つて、

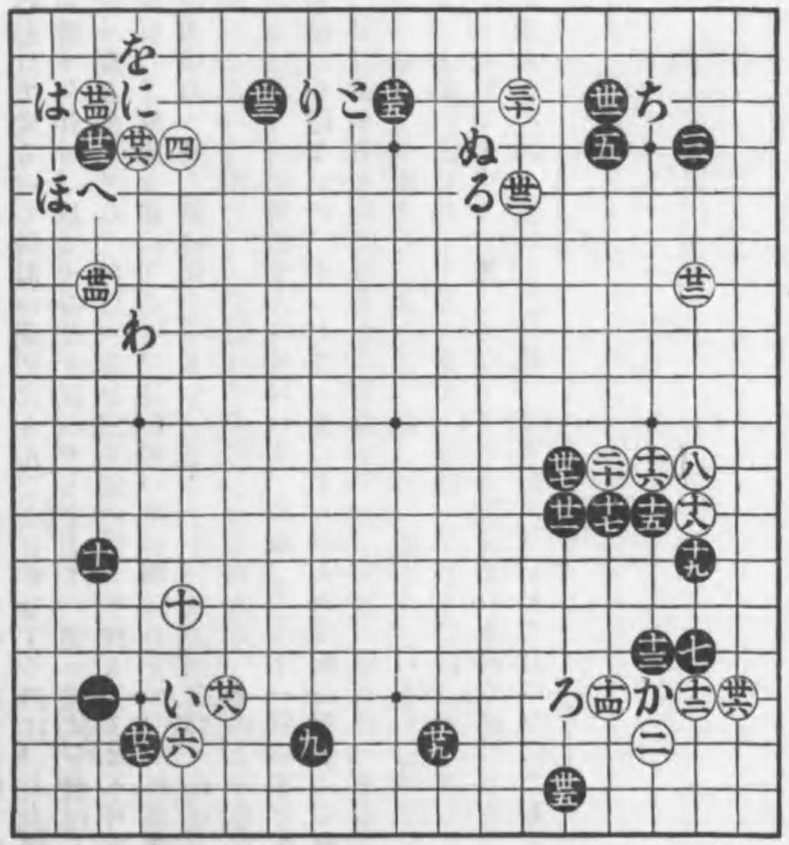


第二十四圖

十一の黑を征に取ることは出來ぬから、白は第二又は第三の樣式に據らねばならぬ譯で、中にも第三を最も普通にして妥當とするのであるが、常に變化を心懸けて成るべく局面の廣茫たらんことを希望する白は、右上隅の小桂馬締りなるに注目し、十六に頂けて征の當りを作り、以て大變化を試みやうとして、第一樣式を襲用して十二に綽込んだのである、(黑右上隅の締りが一間高締りでは、白は一着を以て征の當りを作ることは不可能であるし、若し又大桂馬締りでは、白二着を連打して縱斷を遂行するも、其距離一路の間隔ありて、小桂馬締りに對する如く痛快適切の効果を奏することが出來ぬ)若し黑變化せらるゝを忌んで十三を十四に約へれば、白は十三に粘いで、普通十三に行びて十二に約へらるべき所を、一路敵陣に突出して居る丈け、それより享ける凡ての利益を收め得らるゝことゝなるのである○白十六の時黑十九に受ければ、白は「ほ」に十一の一子を征にするのである、勿論十六と頂けた手は非常な損に相違ないが、十一の黑を征にするの大利は此失を償ふて尙餘りあるのである、故に黑は振替の策を立て、其以前に收め得べき當然の利益を十七、十九に收めて、而して二一と交換したのである、古くは黑十七にて二一に赶し、白十九、黑二二、白二三、黑十八、白十七、黑「り」、白「ぬ」、黑「る」、白「を」と打つたものであるが、本圖は之に比して遙に進步し優越して居る○白二八は直ちに三八を衝いても可いが、七の黑を攻めるを先にしたのであつて、黑二九以下三七までは止むを得ぬ成行である○白三八より四二まで厚くして可い○黑四三と飛んだのは、後に「わ」に約へる手がエラいから打つたのであるが、此手で「を」に打つも大場であつて宜しい

第二十五圖

白四と高く打つたのは、黒の一と三が同一の地點に相對して在るから、六に懸つて黒の位を低くしやうし、黒若し五にて「い」に締れば、三一へ懸らうといふ趣向である○黒五は三一に小桂馬締りを用ひても宜しい○白六と結局黒一に懸ることゝなれば、黒直に二三に這入つては位が低くなつて不可ぬから、七と右方へ懸つたのである○白八と挾みし時、黒普通は七の石に手を着くべきであるが、一、四、六の如き配石の場合には、九と挾むが可い、それは二七に尖頂けて六の白を攻め、追々二三に入れるやうに運ばうとする趣向を存するからである、故に白は飽まで黒に二三に打たせまいやうに、十と飛んで黒に十一に受けさせ、位を低くして置いて十二に轉じたのである○白十四の尖は九の黒が在る時に用ひる手で、無き時は「ろ」に桂馬するのである○黒十五は白に十四に尖まれたから斯く打つたのであるが、尤も十七に打つても惡いことはな



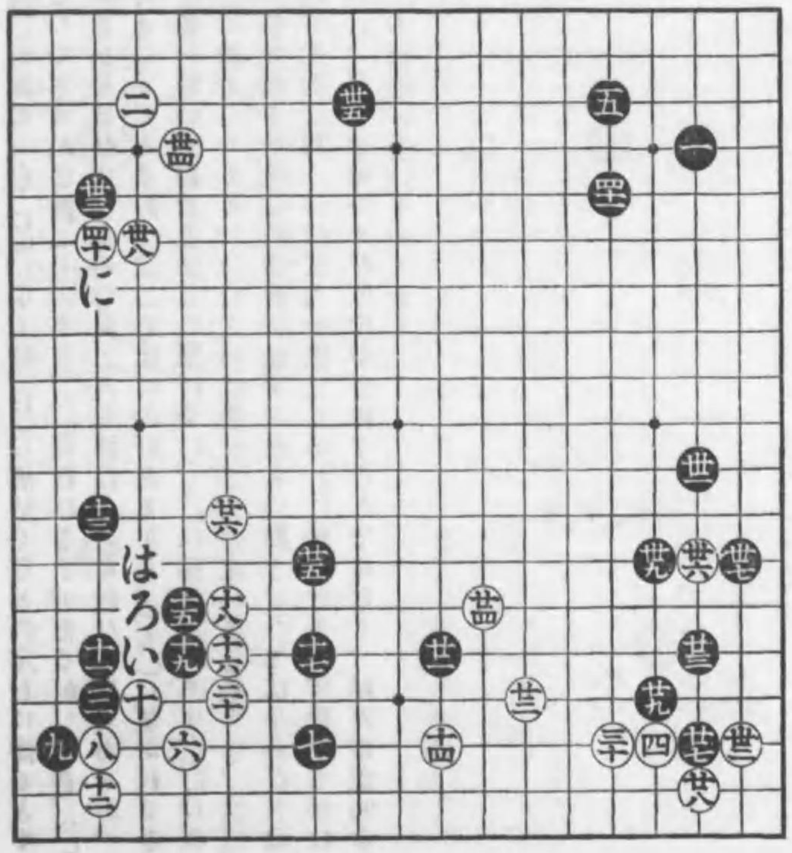
第二十五圖

いのである○白十八と一つ曲つて置いて二十と赶すのは手順である○黒二三と打ち置いて二五と拆いた趣向は佳い、此場合二三の石に拘泥し、普通の如く「は」に綽ね、白「に」に引く時「ほ」に掛粘ぐなどの定石に據るとすれば、前述黒一及び十一の位置上位甚だ低くなつて不可ぬ○黒二七の手で「へ」に行びる手があるが、當初「へ」に行びる積りの時は、二五の石は「と」まで進み置かなければならぬ○白二八普通は「い」に行びる處であるが、此は特に趣向に出たのである○黒三一平常は好まぬ手であるが、二二の處に白が在るから、「ち」に覗かれるを嫌つたので、白を三二に飛ばせて三三に拆くが場合好い、白若し三二に飛ばずに「り」に拆けば、黒は「ぬ」に掛けて打つのである、而して此白三二の手は「る」に斜走しても可い○白三四は黒に三三の處に來られては、二三の石を「へ」に引出され、「を」に掛粘ぐ時「わ」に打たれるが適切に痛苦を感ずるから、斯うなつては是非打たなければならぬ○黒三五は形である、「か」の突込が先手に利く○白三六を黒三五の石に接近せしめて受けるのは惡い○黒三七の曲りは緊要な手である、當に自己の薄弱を補つて厚壯の形を成すのみではなく、種々の意味を包含して敵に當つて居る、斯かる手には何時でも間違は無いものである

一間挾

第一圖

白八より十四までは其趣向に出でたものであるけれども、相敵の碁で先を讓つた局では、餘りに堅きに過ぎて、治まるには早いが好ましくない、是は着手其物の善惡をいふのではなく、白としての態度を云ふのである○黑十五と打つて十七に飛んだのは働きである、若し單に十七に飛べば白に「い」に赶され、黑「ろ」に綽ねれば十五に綽ねられ、黑「は」に行びざるを得ざることゝなり、此白堅くなるに連れて七、十七の黑自ら薄味を感じて來るから、一着十五に打つて白の流暢を妨げるのである○黑二一に打つて七以下の石に補ひ、白に二二に受けさして二三に懸つた手順は、初學の心得べき所である○白二四に衝擊せしに對し、黑之に關せずして二五に飛んだのは、七、十七の石が本流で二一の石は支流であるから、卽ち其根本に復歸した謂であつて、且つ左方の

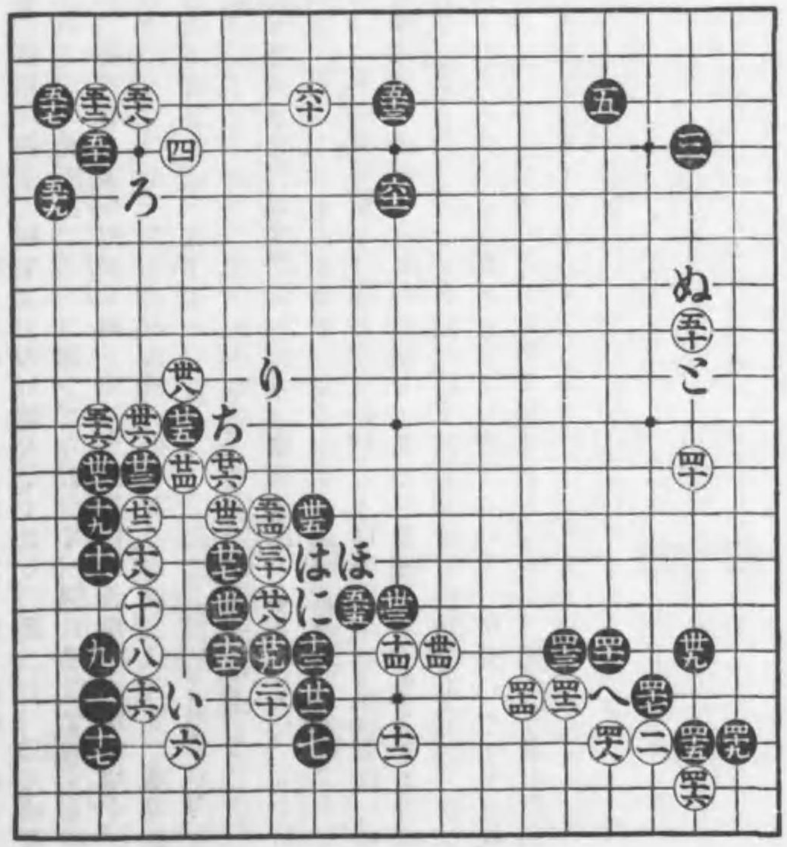


第一圖

白を薄からしむる意をも包含して居るのである、尤も白の二四と掛けたのも、本意は二六に飛ぶに在るので、只其道程を滑かにする爲の手段に過ぎぬ、棋家の術語に調子と稱するものが卽ち是である○黑二七、二九は普通挾まれた場合に處する着手とされて居るのであるが、此處白二二、二四と打ちあつて、隅に手段を弄する餘地のない場合であるから、單に三一に拆く前に、便宜を追ふて行ける處まで行つたのに過ぎぬ、普通の如く三二に下らないで三一に拆いたのは卽ち其意味であつて、二七、二九の石は輕いのである○白三二大きい處であるが、三三に締るも亦可い○白三四の尖は各方面へ發展の素を成すものであつて、これなくしては他に好着を發見することが難い○黑三五は所謂大場を占領するものである○白三八の時黑「に」に受けるを普通とするが、三以下の黑が堅い上に、「に」に飛んだ所が相應呼すべき十三の位が低いから、格別面白いことはない、よし白に四十に取られても、尙四一の好點が殘つて居て、我はそれを占め得れば足るから、此場合手を拔いて三九に三六の白を擒住したのは算を得たもので、爲に一、三一間の廣きを厚からしめたことは非常である○黑四一は局上最緊の要害である、白が黑の模樣を消すに來れば必ず據るべきの地點で、又黑が地境を定めやうとすれば必ず據らねばならぬ地點である、凡て角形(三角でも四角でも)の一角點は必ず最要最緊の地點であつて、敵を衝くには必ず其一角點を占めるを要し、我を保つには必ず其全角點を占めるを要するので、中央に一子を打拔いた跡卽ち四ッ目拔の勢力が絕大であるといふのも、畢竟四角の全形を得て居るからである、此等は甚だ幾何の學理に合つて居ることで、『圍碁幾何學』の一要素を成すものである

第二圖

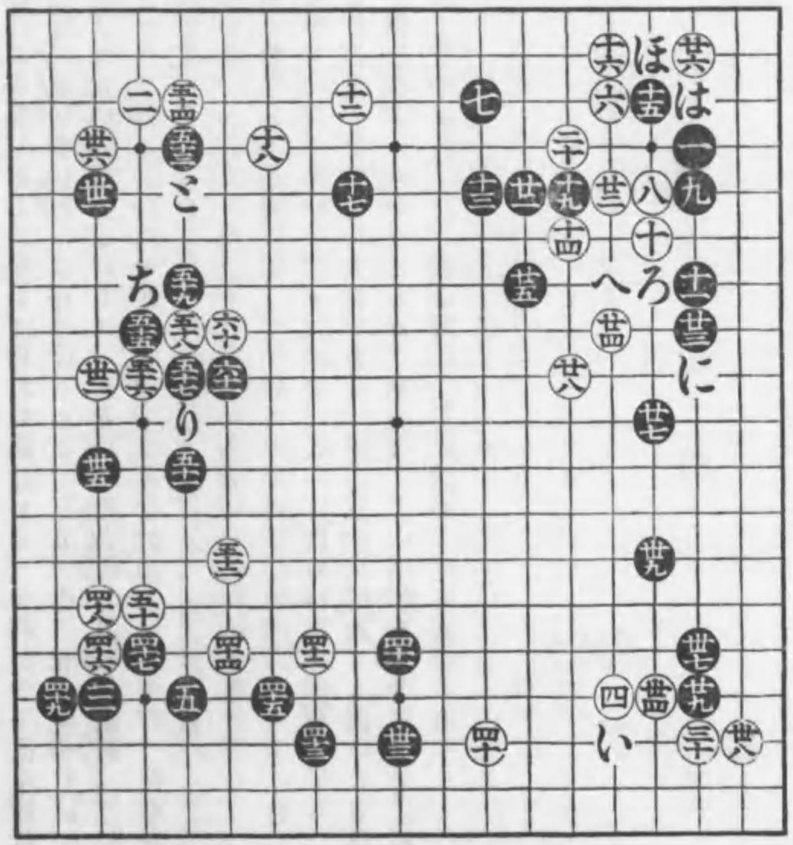
白四は六に懸つた時の黒位を低くする爲である、黒五の手で「い」又は六に締れば五に懸つて、四の石「ろ」に在るよりは都合が好い○黒五白四と高く在る場合には小桂馬に締るが好いといふ事は、屢々云ひ來つた所である○黒七の手で三九に懸るも可いが、五一に入るのは位が低くなつていかぬ○白八は四の石の位置上、黒の位を低くして置いて五一に入られるを防ぎ、先手を取つて十二に詰めやうとするのである○黒十五は自分の石を逃げながら、十六、十七の交換に利益を占めやうとするので、德をしながら逃げるのである、之を單に「は」に飛ぶなどは少しも働きが無くて、白に十七に頂けられて反對に德をされるやうになる○白二十より三八までは定石である、併し黒の二三、二五と二段に綽ねる手は肝要で、白を二六に行ばして二七に覗き、其形を惡くする場合に用ふる慣手段である、此二五の綽を打たずに二七に覗けば、白は三二に掛粘



いで形が整ふ、二七の覗が好い手の場合には、何時でも二段に綽ねることを忘れてはならぬ○白二八普通は好まぬ手であるが、三十、三二と粘がうとするのだから働がある、後では利かぬ處だから、今利かせて置く所に働があるのだ○黒三三と頂け、白三四に引いた時三五に覗いたのは好手段である、三五の手で五五に引けば、後に三五と覗いても白は應へぬ、併し此處で白直に五四に粘がないのは、五五に綽出して、黒「に」の時「ほ」に行びるやうなことが發生するかも知れぬ、其含からである○白四十普通は「へ」に尖むが至當であるが、此場合十二、十四、三四の三子が在つて堅くなつて居る處だから、黒が若し「へ」に掛けて來れば、四七に出截を試み、大に戰はうといふ趣向で挾んだのである○黒四一は「へ」に掛けたいが、前述の意味から其紛擾を避けたので、而已ならず白十二以下の三子が在るから、凝らせやうとの意味にもなつて居るのである○黒四九の手で「と」に詰めても可いが、まだ五一の大場が殘つて居るから、茲で自分を治めたので、五一に白の締りでもあるなら、無論「と」に詰めねばならぬのである○黒五三は征の當りを兼ねた大場である、併し五七に綽ねても惡いことはない○白五四、五六は征の當りに對して二五の黒を取りきつた手である、黒假令「ち」に出ても、今度は「り」に掛けるのである○黒六一は釣合の宜い手だ、併し五十の白「と」に在る時は「ぬ」に詰めなければならぬ

第三圖

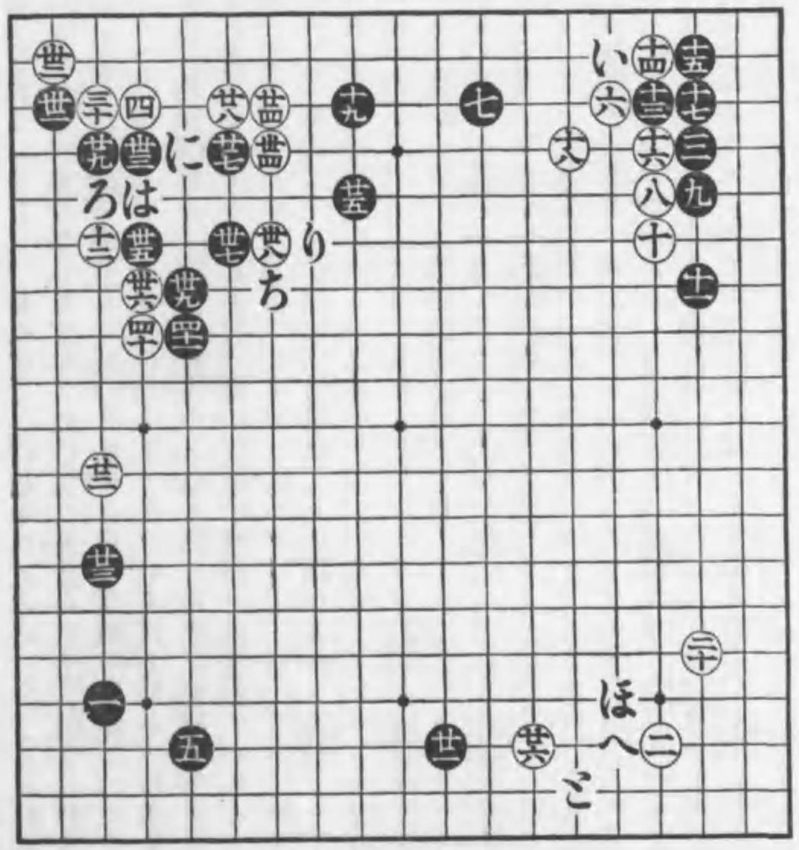
白八、十は前圖と同じく、十二に詰めて七の黒を攻めやうとするのと、又斯く掛けて置けば、黒が二九に入るのが愈位が低くなるとの兩樣の意味からである、併し白の石四に在るか又「い」に在る時は、位を定める上から圖の如く掛けるが可いが、之を顧みずして無暗に遣つては損な手段であることを注意せられたい○白十四は所謂形であつて沈着なる良手である、「ろ」に赶す手もないではないが、十四の處に一着ないと、後に黒から十九に覗かれて具合が惡いのみならず、黒の七が十三と立つて居るから、赶せば赶す程黒の地を殖してやる許りで面白くない、十四と備へて置けば、後は種々に打てる意味が在り、且つ七、十三の黒に迫つて居て、所謂敵を攻め己を守る譯である○黒十五の手順は肝要である、愚圖々々して其機を失ふと、反對に白から「は」に頂けられて、見す〳〵損をせねばならぬ事がある、故に七、十三の石を逃げる前に一寸應



答を試みて置くのである○黒二三は本手である、白に「に」にでも詰められゝば、「ほ」に活きて居ねばならぬ處であるから、斯う打つて自己を用心し、白の逃方を見るのである、初心は「ろ」に赶したがるが、「へ」に綽ねられて形を損ずるのみならず、白の活路を流暢ならしむるに思ひ至らねばならぬ○黒二五は白の眼を缺きながら自己を整へ行くのである、最初二三の手で直に二五に打ちたい處であるが、それでは白に手段の餘地あつて、必ずしも二四に飛びはせぬ、それを黒は二五と打つて白に二四に飛ばせ、而して二三に並んだと同一の結果を得たのであるから、二三の良着なる事は益々明瞭に發揮するのではないか○白二六と隅に利を殘し置いてそして二八に逸出したのは好手順である○黒二九に打ち、白三十に頂けた時、三一と他に轉じたのは働きである、二九と三一との兩大場が殘つて居て、黒は双方一度に打ちたい、併し三一の方を先にすれば、白に二九に締られるから、一着先づ其締を妨げたのは働で、亦幾分の利益である○黒三三普通は三八に綽ねるべきだが、一、九、十一、二三と右邊一帶位が低いから、白に打たしてから捌かうといふので、三三、三五とドシ〳〵大場の占領に取掛つたのである○白三六の時は三七に抱ひたいが、三五と詰められて三二の一子が甚だしく浮薄を感ずる上に、十八の石が十二の方に寄つて居るから、黒から「と」の飛が先手に利く、斯くて五七にでも冠せられては堪らぬから、三二の凌ぎとして三六に尖頂け、三一の黒を弱めて置くべく止むを得ぬのである○此時黒手を拔いて三七、三九と打ち、更に四一に大模樣までは黒の模樣を消す手段で、其運びを見るべきである○黒五三に打つて五四に受けさせ、三二の白を五五に攻めて三五、五一の石に應援し、三一の石を逃げ廻らぬ手段は、畢竟三一の石は輕いからである○白五八に截つた時黒五九に綽ね、白六十に行びた時六一に赶したのは手筋である、普通は五九に綽ねず單に六一に行びる處であるが、それでは「ち」に五五の一子を征に取られて了ふ、さればとて「ち」に行びれば、「り」に白の出路がある、併し白六十に行びずに「り」に割込めば無事ではあるが、六十に一子を打拔いては黒萬歳で、それは白の堪へ得る所で無い

第四圖

白八。と掛け、黑九。、白十。、黑十一。と相應ずるは定石であつて、第二圖以來數用した所であるが、白十二。を七の黑に對つて詰めずに締つたのが第二圖及び第三圖と異なる所である、懸りと締りとは布石に於て最も大なりとされてある處だから、其通則に從つて締つたからとて、一向差支は無いのである○黑十九に二間拆をなす前に十三。に尖頂け置くのは肝要の手順で、其機を失へば白から反對に十七に頂けられて損をする事、前圖十五の手と同じ意味である○白十四。より十八。までは定石であるが、白若し十四の手で單に「い」に下れば、黑もそれなりに十九に拆くのである、併し白「い」に下るは重くて不可ぬ○黑二三。の詰は小に似て大なる處である、二八に詰るよりは大きい○白二四。の詰は七、十九の黑が薄弱で、先手に打てるから打つのであるが、此黑が堅固な時には、二六の詰の方が大きいのである○黑二七。と打ち置いて二九。に打込むは手順であ

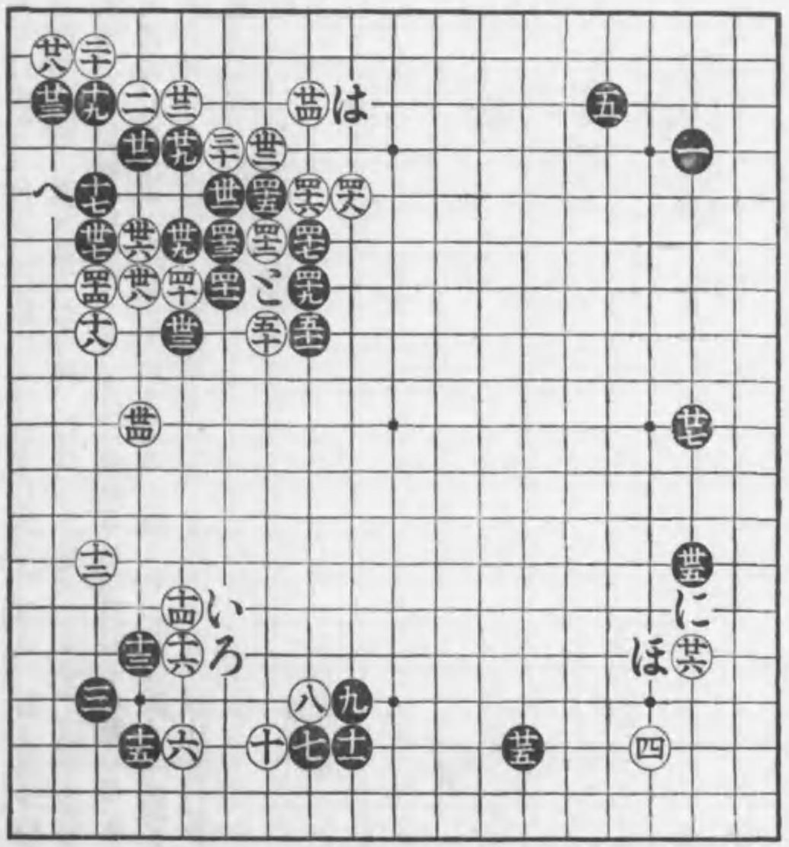


第四圖

る、二七に石あれば、二九に入つた石は取られる氣遣は先づ無い、白若し三三に約へれば、黑は「ろ」に突當つて活る、又白三三に約へずに「は」に尖めば、三三に出て、白「に」に約へる時三十に曲つて活る、斯う活られては白の損失が甚だしいから、白は三十。と約へたのである、尤も黑二七の時、白は二八に受ける手で三四に赶す手段もあるし、又黑二七の手で「ほ」に一着を衝き、白の「へ」に受けるか「と」に受けるか、其樣子を聞くなども味がある○黑三一。より三九。までの手筋如何にも輕く、捌き方が甚だシャれて居る、斯ういふ處は能く味はつて貰ひたい○黑四一。と赶すのは本手である、「ち」に綽ねては白に「り」に行びられて、七以下の黑が弱いから忽ちそれに影響して來る、是等は最も注意すべき事に屬する

第五圖

白八より全く前數圖と變り、挾まれた六の石を先手に處理して、而して十二に挾まうとする趣向で、是亦一種の定石を成して居るのである○黒十五を古くは十六に出で、白「い」に行びる時十五に尖頂け、そこで白「ろ」と打つたものだが、段々研究の結果、十六に出ぬ方が形が輕くて優つて居るといふ事になり、近來は之に確定して了つたのである○黒十七と懸り、白十八と挾むは普通の打方ではあるが、此處で一寸黒は二六に懸るよりも十七に懸る方が、一、五の締ある此場合に好適して居る事を斷つて置く○黒十九と頂けるは早く此隅を治め、先手を取つて二五に打たうといふのである○白二四は普通三二を打着點とするが、一、五の締りが低いから圖の如く打つたので、三二に斜行すれば「は」の詰好處となつて、之を黒に打たるゝ手順となるが、二四と打てば其處なきのみならず、黒は「は」の方面に詰めるよりも二七の方面に拆く方が小桂馬

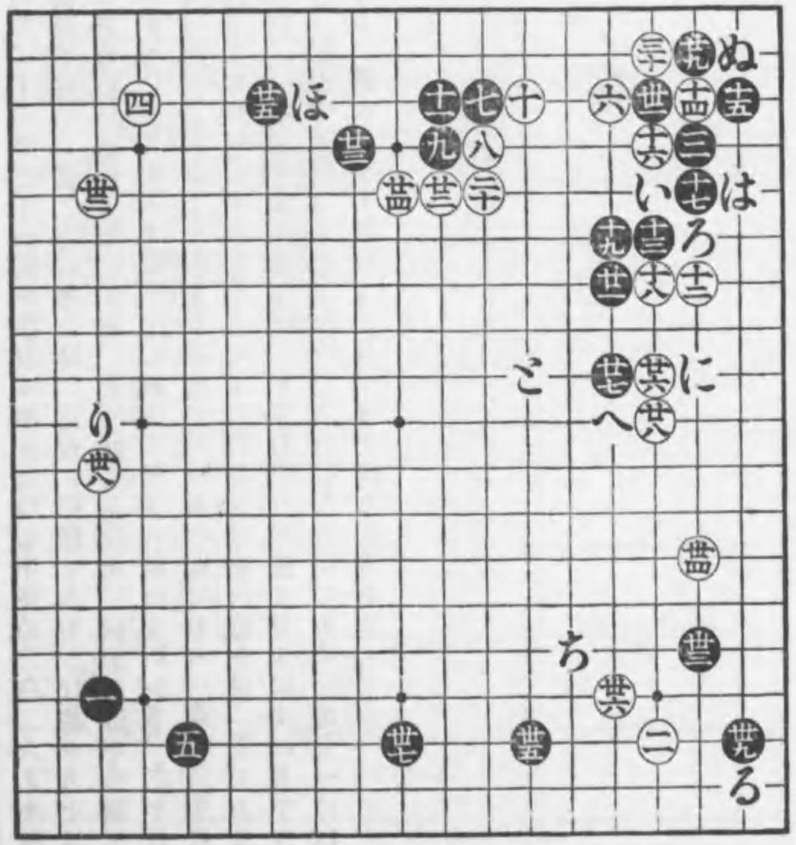


第五圖

締りの位置上好いから、詰める事は面白くない意味を生ずるのである○黒二五は好點である、普通は二六に懸るが、此場合では白に二五に拆かれるから、七、九、十一の三子が間が拔ける事となつて不可ぬ○白二六と小桂馬に締つたのは可い、「に」又は「ほ」に締るは面白くない、黒二七に來た時に直接に影響するやうな締り方では不味い○白二八は釣合を保つ趣向の手である、黒の石が孰れも堅いから、先づ此黒を攻めて我が弱點を牽制せんとする方略である○黒二九常には三一に打つが可いが、此碁では三三に冠して三五に詰めたいから、之を打つ爲に斯う打つたのである○白三六は形である○黒三七と赶して三九と掛粘いだは好手順である、單に三九に掛粘げば三七に約へられて、「へ」の綽などが先手に打たれるやうな事となる○白四四は黒の眼を缺く手である○黒四五、四七の手順は往々遭遇する所であるから、特に留意を要する、只逃げては何處までも追はれるやうな事になる、白若し四八で「と」に出れば、五十に綽ねて逃げるから、ウマい具合になるのである○黒五一は白を重くする手段で、白が動き出せば卽ち重くなる、斯う打つて置いてから一子を提るのである

第六圖

黑十三から前圖と變つて居るが、此十三の手は名人本因坊丈和の發明に係るもので、幻庵因碩は其著圍碁妙傳に於て、大に之を賞賛して居る、前圖の如く「い」に尖んで十九に掛けられるが具合の惡いと思ふ場合には、斯う打つが働きがある、之に對して白十四に頂け、黑に十五に約へさせ、十六と十七とを交換して、而して十八に赶したは好手段といはねばならぬ、若しも十八の赶を先にすれば、黑は十九に行びる、それから十四に頂けるのでは、黑は十五に綽ねずに「ろ」に約へて了ふ、其時白十六に膨れても、黑はスマして「は」に掛粘ぎ、白が十五へでも下つたら、直に「に」に挾まうと構へやうから、それでは十二、十八の石が重くもなり、又隅も凝つた形となつて、白は面白くない、故に十四の頂を先にしたのである、此時前述の如く黑十五を「ろ」に約へても、十二の石が一つしか無いから、白は輕いし黑は面白くないといふ意味になり、結

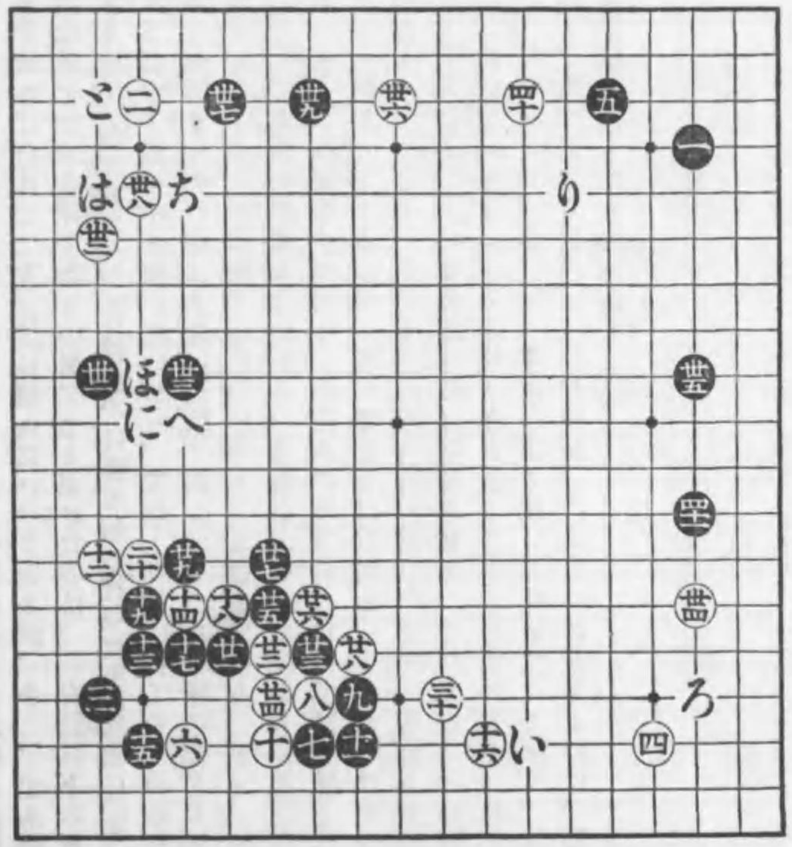


第六圖

局圖の如く應ずるより仕方が無いことゝなるのである○黑二一は厚い手である、二九へ綽ねるはまだ時期が早い○白二二、二四も亦同樣手厚くて可い、元來を云へば白は二二で「ほ」に詰めたいのであるが、十二、十八の二子が弱いから、二二の方から行かねばならぬ仕義を生ずる譯である○黑二七と頂けたのは、一着三以下の石の發展を求め置き、而して二九に綽ねやうとするので、白二八を「へ」に綽ねずに圖の如く打つたのは、後に「と」の方から黑を攻めやうといふのである○黑二九と打つて置かぬと眼が無いから、安心して外は打てぬ、のみならず白の眼をも缺いて置く意志が含まれて居る○白三十中央に向ふ方面が出來て居るから、劫に負けたとて甚だしい損害は被らぬ、飽までも劫を以て黑をイヤがらしめ、所謂味で攻めつけやうとするのである○黑三一先づ一つは取敢ず取つて置くものである○白三二別段に劫拋の箇處もないから、大場を占めたのである○黑三三に懸り、白三四に挾んだ時、黑三五、三七と打つたのは此場合大に可い、白三八の手で「ち」に打てば、黑「り」に大場を占めるのである、黑三九は此で白の應手を聞かんとするので、甚だ場合を得て居る、といふのは右上隅の劫である、此劫は黑に眼がなくつて扱て劫拋も少なくなり、白に十四に提られた時「ぬ」に粘いで活きねばならぬといふ破目に陷つては、モウ其碁は殆んど負と決る、されば飽迄も双方此劫を見合つて打つので、全局の策戰は一に此劫が其根原を作すのである、故に黑は生死の劫にならぬ前に提り置くことを心掛けるし、白も亦閑さへあれば提返して置くことを心掛けるし、碁が强ければ强い程、非常に六ケ敷い意味を生じて來て、其方略の苦心は實に一通りや二通りでないのである、黑三九にて白の「ち」に打つか「る」に打つかを見るのは、卽ち此策戰に入る第一期で、正に戰機の熟して來た事を示したものである

第七圖

白十六より第五圖と異つて居る、是は矢張第五圖の如く十七に約へるが普通であるけれども、黒に「い」に拆かれるが具合惡しいとして、少し無理に亘る嫌なきにあらざるも、先づ十六の地點を占奪したので、兎も角も白は趣向で遣つたのである、以下三十までの結果に於て白少しく損失の傾向あるは、十六の無理が然らしむる所である、斯うなつても白四の位置が「ろ」に在れば遣れないことはないが、低く四と在る丈け都合が惡い○黒三一は十二、二十の白を脅しつゝ「は」に懸らんとする意志で、實に好箇の着點である○白三二の手で「に」に肩を衝き出れば、十二、二十の二子は逃げる事は逃げ得られるが、重くて不可ぬ、黒に「ほ」に赶され、「へ」に逃出し、而して「は」に來られては、逃げても損であつて、これは白の堪へぬ所である、圖の如く棄てたとてまだ多少の味は無いでもないから、三二と打つて黒に三三に飛ばせ、自己は三四の大場を

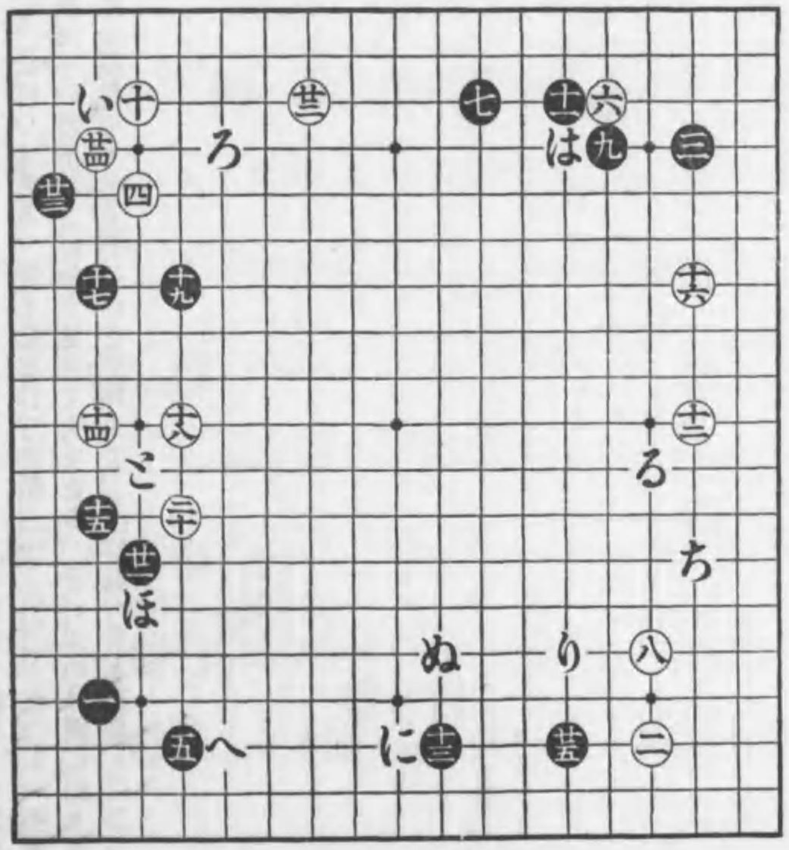


第七圖

占める胸算である○黒三七は打込の好場所である、白若し之を攻める事急なれば、「と」に頂けて振替る手段がある、讀者試みに講究せられたい○白三八は「ち」に打つもある、併し此場合では黒三一、三三と在つて、勢稍や迫つて居るから、圖の如く手堅いが可い○黒四一の詰小なるが如く見えて大である、といふのは隅に種々の手段が存在して居るからで、それを狙ふて意味深長なのである、けれども此手で「り」に煽つても亦惡くはない

第八圖

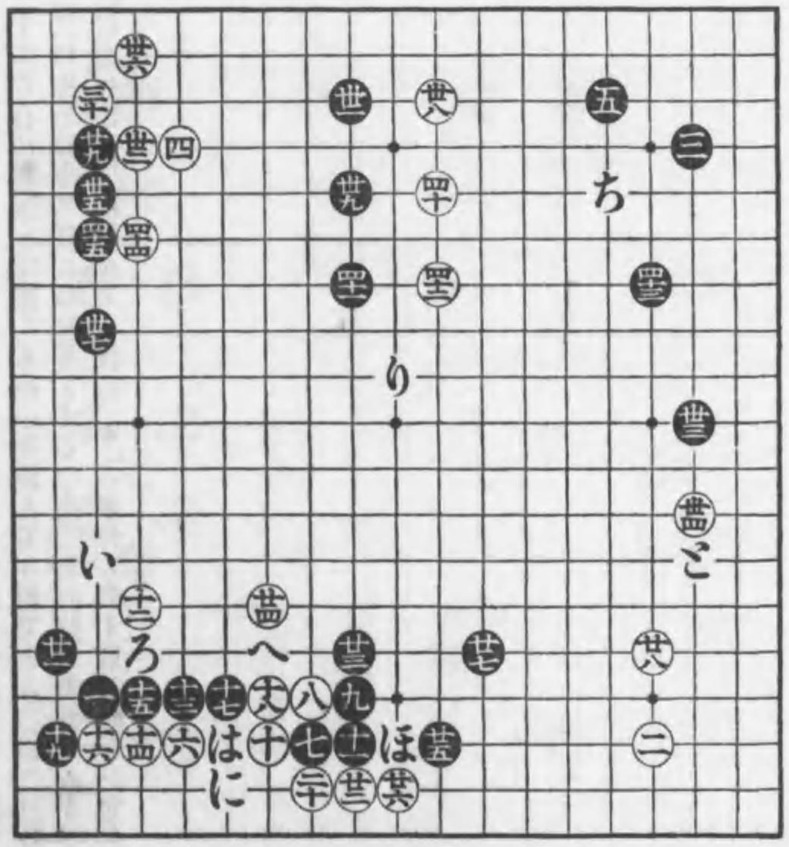
白八の締りを十に締るに較べれば、無論八の方が好い、左上隅は黒十に入るも、七の黒第三線の低位に在るから、「い」に頂けやうと「ろ」に掛けやうと、黒は相待つて忌むべき低位をなすことゝなる、是れ八を擇ぶ所以である○白十は前圖の變化である、一體黒に六の一子を與へるは損であるが、塗られるを嫌ふ場合には、斯うするも亦一趣向であらう、併し後に至つて「は」に截るやうな味が多少殘つては居る○黒十三は好地點である、一、五の如く小目の締りに對して「に」に拆くは不可、間隔を五路にするが法則である○黒十七の打込は急激にして好い、二二の邊に打ちたいやうな氣もするが、右上隅は既に七、十一と片附いて居るから、此方面は小にして緩い、大抵の場合附加は新拓に如かぬものである○白十八場合に依つて十九に一着を浴せることもあるが、併し此碁では二十の曲が大きいから、其趣向は要さぬ○黒二一は小桂馬締りの時は「ほ」



に受けるを普通とする、圖の如く受けるのは五の石が「へ」に在る時である、併し此場合打込んだ黒がまだ弱いから、斯う打つて「と」の覗を狙ひ、以て十七、十九の石に應援して置くも亦一手段とする所である○黒二三の斜走は時機を得たものである、けれども白が二二に拆かぬ中は打たぬを可とする○黒二五の詰は大場である、「ち」に打込んで行かうとするのだ、白若し「り」に曲れば「ぬ」に飛んで、後に「る」の邊から消す策を取るが宜しい

第九圖

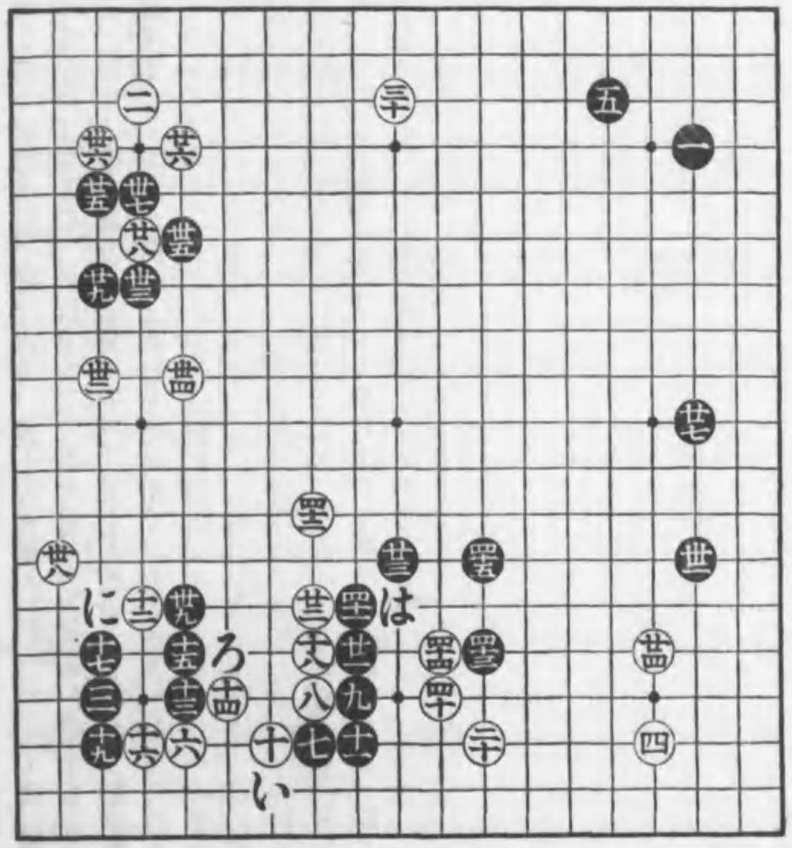
白十二の手より前數圖と變つてるが、是は「い」に挾めば黑は「ろ」に尖出るとは極つて居ない、現に第六圖の如く十二に斜行して來るかも知れぬ、白は卽ち之を嫌つた打方で、例の敵の打着點を先奪するは自己に同樣の利益を齎すと云ふ打算より、黑の來るべき地點に據つたのは、一の新たなる趣向である○黑十三は普通であるけれども、十四に尖頂けるも亦一策たるの値はある○黑十九と綽ねたのは、「は」に突出す手があるからである、されば白二十は止むを得ぬ、此時黑二一と打つたのは所謂形で、此に石が無いと後來の發展が出來ぬ○白二二は「に」の覗を豫防し、兼て自己の石を確實にするのである○黑二三は大事な頭で、肝要な一着である、白若し二四の手を「ほ」に綽ねれば、黑は「は」に突出して「へ」に約へて了ふから、白は何を措いても此閉塞を破らねばならぬ、それで黑二五、二七と打てたのは卽ち二三の賜で、此結果は双方大差なくして面白い○白二八は大場でもあり、且つ七以下の黑がまだ全く治まつて居ないから、二九の締りとは同一にならぬ○黑二九、三一と打置いて三三に大場を占めたのは好手順である、若しも普通の如く三三にて直に三五に出るとすれば、白三六の時是非とも三七に拆かねばならぬ、それでは三三の大場は白の手中に歸することになる、故に三五に打つに先だちて三三を占め、白の三四に應ずるを見て三五、三七と着手したのは、相連絡した手順である、而して黑三三の時白三四に應ずるは、全局の釣合上止むを得ぬ所で、若し此手で三五に二九の黑を抱へれば、黑に「と」に詰められて面白くないのである○白三八は左上隅が堅固であるから、三一の黑を攻める意志を以て打込んだものである、單に黑の模樣を消すが目的ならば、「ち」に打つを本手とする、故に黑は三九、四一と逃げ、白は四十、四二と追ふ譯である○白四四は三一以下の黑をせるべく此處に覗を一着利かしたのであるが、是は時機を肝要とする、餘り後れゝば、黑は場合に依つて二九、三五の二子を棄てるの策を立て、必ずしも四五に應じて呉れぬかも知れぬ、されば中央の石を攻める前に遣つて置くを手順とする、斯くて白の意中には、次に「り」の方より上下の黑を隔てゝ打つの策戰が藏されて居るのである



第九圖

第十圖

白十四より前圖の變化で、以下十七までは當然の成行である○白十八は普通誰でも打つ手であるが、實は此手で十九に約へたいは、白の山々望む所である、けれども黑に十八に綽ねられては、「い」の綽を先手で利かされ、「ろ」へ出て行かねばならぬやうになつては、目も當てられぬ始末となるから、白は十八に立つべく止むを得ぬ、そこで黑十九は卽ち白十八と交換すべく約束されてある手で、三の三の大きいことは今更めて云ふを要すまい○白二十の詰は如何にも好處である、是は既に十二の時から先手を取つて此處に打つべく計畫されて居るので、白當初よりの意志である○黑二一と赶して二三と斜行するのは形で、單に「は」に打つは筋違である○白二四、黑二五はお互大場の交換に過ぎぬ○白二六と尖むのは普通は緩い、併し此場合では他に急を要する箇處がないから、所謂釣合上斯う打つたので、斯うして置けば卽ち二七と三十とが見合の

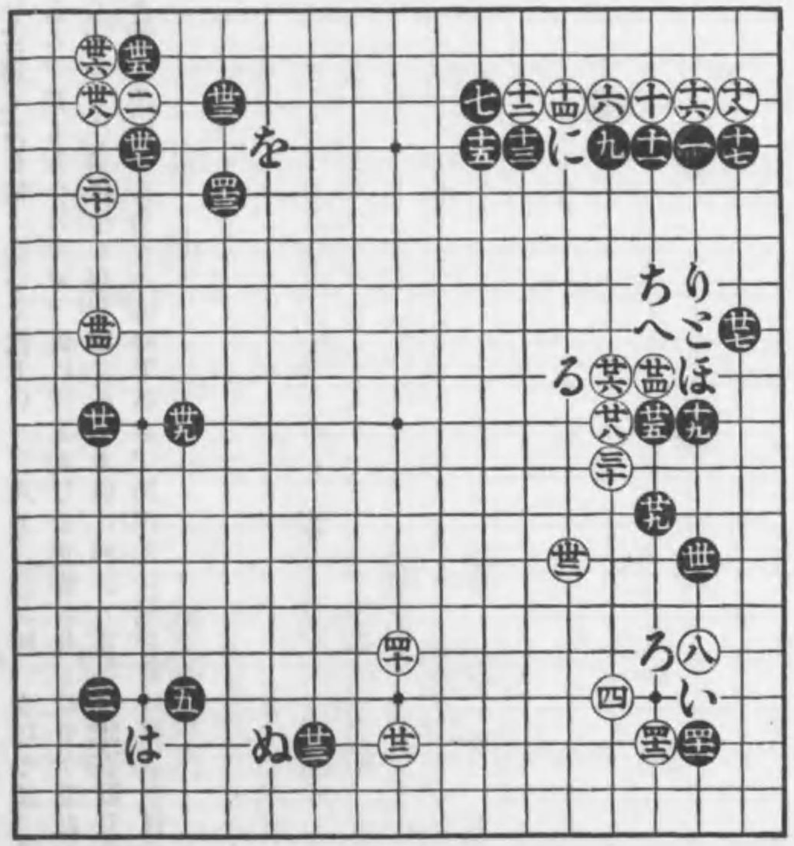


第十圖

大場になるから、碁が廣い意味となるのである、斯くて双方大場々々と打行く間に、分厘の隙をも見出すことが出來ぬではないか○白三二から三八まで輕い打廻し方を能く味ひて欲しい、三八で「に」に約へるなどは、重くて不可ぬ○黑三九は小に見えて大なる手である、是も釣合の手で、直には其大なる實質が分らぬやうであるけれども、隅に種々の手段が伏在して居るから大きい○白四十の覗を四二に飛ぶ前に利かしたのは手順である、之を「誘ひの手」と稱して、四二に飛ぶの歩調を流暢ならしめるものである、黑四五に飛ぶ前に四三と打つたのも矢張此意味に外ならぬ

第十一圖

白四。と高く打つは一の黒が低い位置にあるからで、黒「い」に入ると六に懸つて、一と「い」の石を共に忌むべき低い方に並ばせやうとする趣向の着手であることは、是迄屢屢繰返した次第である、若し此四を「ろ」に打てば、黒は四二に入つて、三の石が「は」の處にないから好い都合となる、布石の變化は斯ういふ所から分れて來るのである○白八。本手は「い」に締るのであるが、變化を求める意味から趣向を弄して見たのである○黒九。と頂けたのは上方より壓迫して、所謂塗つて了ふ手段である、左下隅は三、五と高締りだから、征の關係上白が十一に綽込む手はない、併し場合に依つては「に」に綽出す手はある(そは次圖に示す)○黒十九。の處は大場である、併し時に依て一路「ほ」に控へて打つことがある、即ち白に「へ」に肩側を衝かれた時「と」に受けて、白「ち」、黒「り」となるを豫想する場合である○白二十。と小桂馬に締るのは、右方黒七、十五と

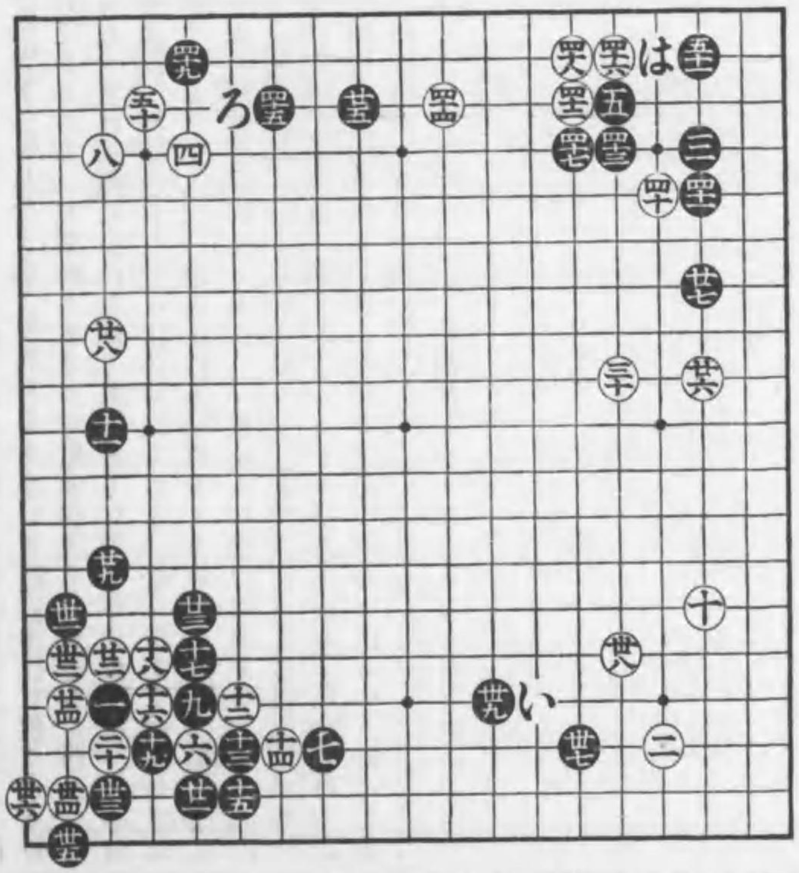


第十一圖

堅くあるから、白も亦堅く締るので、黒二一。、白二二。は例の見合の大場である○黒二三。を「手止り」と云ふ、白に「ぬ」に詰められるが大きい處だから、己れ此處を占據して、サア趣向をして來いと敵の手段を俟つのである、此手止りが抑も先着の効果を完ふする所以であるから、其意味のある所を咀嚼悟了して貰ひたい○黒二七。の手で二八に赶し、白「る」の時二七に打つもある、それは幾らか白を重くして置くに利ある場合に用ひる○白二八。是は至極厚い手で、目に見えぬ大さが包含されて居る○白三十。は緊要の處である、是は決して閑却してはならぬ、黒から綽ねられることになつては大變である○白三二。の地點は何方が打つても好處である○黒三三。は大場である、一側方の堅い時は成るだけ間數を廣く抱擁するが法であつて、敵からは堅いだけそれだけ打込み難い事情があるからである○白三四。の詰普通は距離狹くして好まぬ所であるが、此處では「を」の邊から厚味を消さうとする意匠で、先づ自己を手堅くして置くのである○黒三五、三七。と打つて三九。と飛んだのは、即ち之を豫防した臨機の處置である○白四十。と飛んで局勢の權衡を保ち、自己を堅めて黒の模樣を削るべく睨んだ姿勢は好い○黒四一。は筋である、一着斯う打つて白の四二。と打つを見、而して四三。と上方を堅めた手段は面白い、尤も此四一の處は今直に必ず打たねばならぬといふのではない、「い」に頂けるやうなこともあらうから、モッと後にするも可いのである

第十二圖

黑九。と頂けた時、普通十九に打つて活きるを法則とするが、本圖は又手を拔いて、黑十一。と星下に大場を打つて變化を見た○白十二。今更十九に行びて活きるのは、上邊一帶を塗られて了つて、而も十一の石が丁度お誂の好位置にあるのだから、此際採るべきの手段では無い、さればとて十六に綽込む手は最初から無い、斯ういふ時には圖の如く綽出して變化するのである、以下二四。までは二間挾に於ける定石の一種となつて居る○黑二五。より白二八。までは大場の占めッくらである○黑二九。は大きい手である、何故かと云ふと、三一から三五までの先手を含有して居るからで、二九の一着それ自身はそれ程でなくとも、後の利を有する手は大きいものである○白三十。は釣合の手である、普通は「い」の方に打つが、此處では十二、十四の石がまだ味を存して、幾分の働をなして居て、全然黑の疆域になる氣遣は無いから、後に黑三七に詰めれば白は三



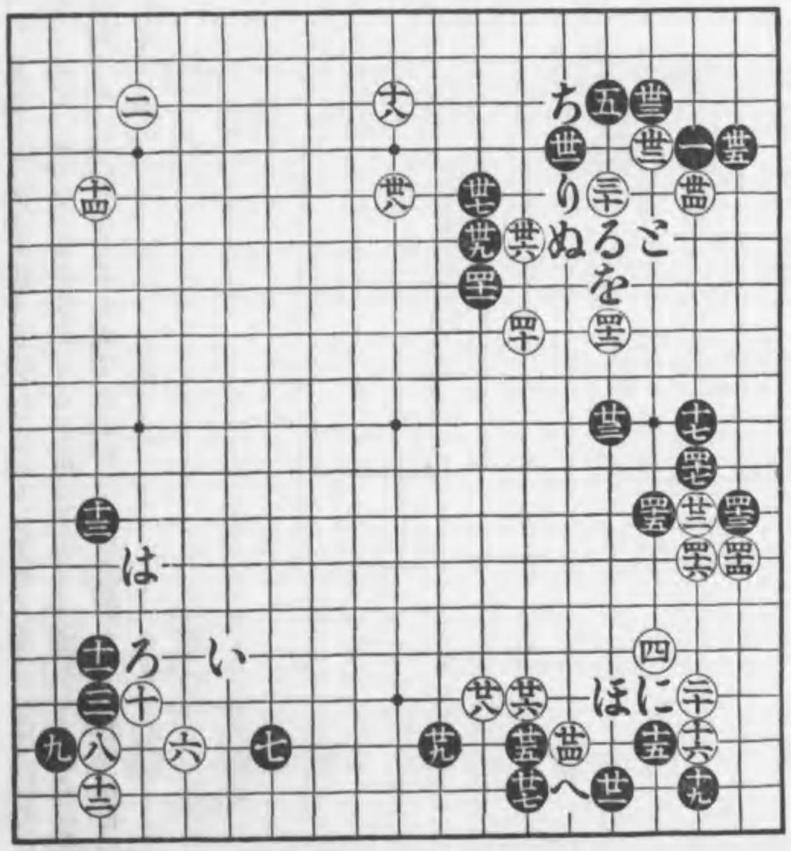
第十二圖

八に應ずるを見込んで打つたもので、又上方黑の模樣に對しても、それを遮つたやうな形姿を成して居る○白四十。と打ち、四二。に頂け、四四。と拆いた手段、一意黑地を減削突破する趣向である○黑四五。斯くの如き場合には可い、「ろ」に打つ方が却つて不可なること往々ある、能く其場合を察するが肝要である○黑四七。と曲るは本手である、此手で「は」に約へるは惡い、四七は何うせ打たねばならぬ處であるが、「は」に約へると五一。に打つとは、利害得失の違ふ場合が往々生ずる所である

一間挾

第一圖

黒七。と一間に挾んだ時、白としては「い」に打つか「ろ」に打つか、兎に角外に出るが元來好ましい、併し圖の如く八。に頂け、十。に膨れ、十二。に下るといふのも定石の一種で、黒としては之を採用して差支ない、是は習ひを示したのである○黒十三。は穩當な手であるが、挾ある時は多くの場合「は」に打つを普通とされて居る○黒十七。普通は四七まで行く所だが、此處では一、五の締りに對する關係上、星下が場合宜い○白十八。黒が四七に來れば「に」に突張るを本手とするが、それが一路遠くて何時でも二二に拆くことが出來るから、他の大場に轉じたのである○黒二五。普通は「ほ」に尖出るが、四と二二との間が狹いから、出る程の必要は無い、假令下邊に這つたからとて、白にそれ程大きな地が出來る氣遣はない、殊に此處では七の孤獨に對する聲援の意味をも含んで居



第一圖

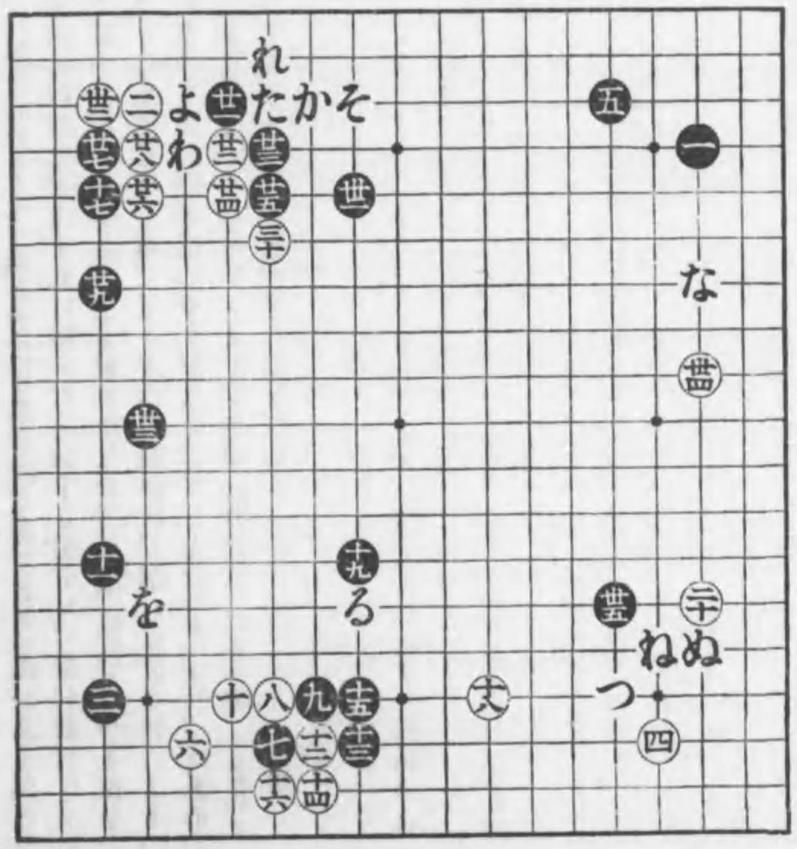
るのである○白二六。の綽は本手で、「へ」に出ては黒から二七に約へられて惡い○白三十。黒が模樣を消す手段の起點たる事は、既に說明した通りである○黒三一。此場合は此方に受けるが好い、之を「と」の方に受ければ、白が「ち」に頂けるから、二三の飛が凝る形となる、地を白に破らしてそして攻め附けて行く方が、却つて利益の多いものである○白三六。の斜行も本手である、黒から「り」に出られるを恐れる心地がするかも知れぬが、其時は「ぬ」に約へて、黒「る」に截る時「を」に綽ぬ、三十以下の三子は棄てゝも構はぬ、此三子は一旦黒に夫々受けさした石であるから、それだけの役は立派にして了つて居て、モウ棄てゝも損はない、棄てゝ惡い時は無論三六には打たぬ○黒三七。より四一。まで白を追ひ出し、轉じて四三、四五、四七。と此石を治める手段は能く記憶して置くが宜い

第二圖（上）

白八と頂けるのも亦定法の一種である、黒其時十二に引けば、白に「い」に飛んで居られて、形が重くて不可ぬ、或特殊の場合を除く外、九と綽ねるに決つたものである○白十と引くは十二の截と「ろ」の邊とを兩天秤にして、何れか一方を打たうといふのである○黒十一右方の模樣に依ては、十二と粘ぐこともあるが、先づ大抵は圖の如く飛んで居るが可い○黒十五白が「は」に出ても馬鹿々々しいといふ場合には、「に」に行びて、白「は」の時「ほ」、白「へ」の時「と」と、一歩お先へと打つことも稀にはある○白十六を「は」に出る時、黒「へ」、白「ほ」となつて「ほ」の一子が征に取れぬやう中りの石ある場合には、黒は「ち」に行びなければならぬから、其時十六に取つて先手を利することもある、併し出るだけ損を招く斯の場合では、只取つて居るに限るのである○以上八より十六までは定石であるが、段々研究の結果、此定石は白が凝つて居て不可ぬといふので、今では古物待遇を受けることになつた、今手順を替へていふと、黒の三に白が六と騙つた時、黒は十一に拆いた、すると白も同じく十二に拆いた、（黒白同形では、先手方だけ黒が優る譯である）黒が九に頂けたから白は八に綽ねた、黒十三に綽ねたから白十四に行びた、黒十五に粘いだら白十と引いた、是が如何にも酷い、「り」に行びても乃至「は」に曲つても、何う打つたからとて十へ引く道理はない、黒が「は」に約へる處を七と截つて十六と取らせたのも酷いが、十の酷さとは比較にならぬ、七と十六の交換は、黒が「は」に約へるものとすれば夫程目立たないが、十五と十の交換に至つては、形の直しやうがない、白にして此九、十三、十五の黒を此堅實を利用して極力攻立てるでなければ、實に其凝形を取返すことが出來ぬ、故に今では此定石は廢れて、黒九の時「り」に行びる定石が採用されて來たのである（そは次圖以下に示す）

第二圖（下）

白十八は卽ちそれを利用した攻擊の第一着手である、凡て九、十三、十五のやうに聚合して眼の無い石に對しては、遠卷に攻めるが肝心で、急に過ぎては却つて餘る、特に此場合では裾が明いて居て、何方のものになるか分らぬのだから、猶更遠くから攻めねばならぬ、尤も普通ならば單に二十の方面に打つのであるが、此處では先づ一着攻めつけるが手順である、若しも黑十九に逃げずに「ぬ」に懸つて來たとすれば、白は「る」に冠せて攻立てるのである、「を」に掛の利いて居る此形勢に於て、黑は左方の走路は扼塞されて居る譯であるから、勢ひ右方に逃出さねばならぬ、さうなると「ぬ」に懸つた石は些の効力を見ることが出來なくなる、故に黑十九に飛ぶは止むを得ざる譯で、從つて白は二十に締り得るのである、併し黑「ぬ」に懸る形勢が、九以下の三子を棄ても優に得失相償ふ場合は此限りで無い○黑二一と近く二の白に迫つたには、少な



からぬ意味がある、之を遠くから挾んだでは利かないから、白に三四の邊に大場を打たれる虞がある、されば

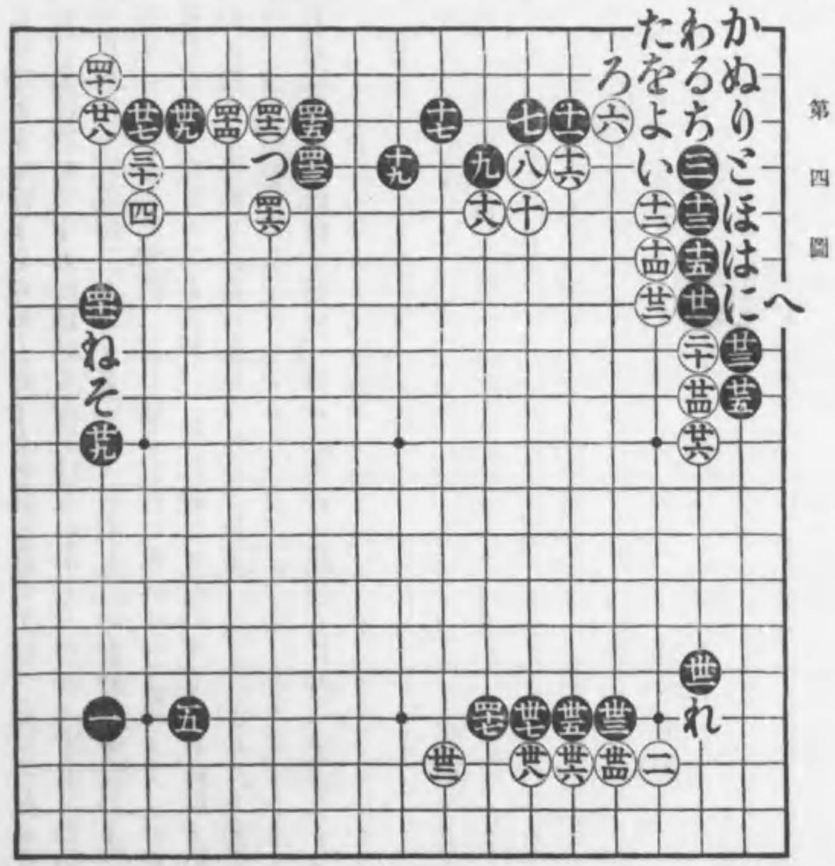
とて三四の方面を打つも惡くはないが、白に「わ」に尖まれたからとて、左邊十七の方面の圍ひ樣に困るから、一寸打ちにくゝなる、それやこれやの關係から、敵に手を讓るまいとして激しい手段に出たのである○白二二普通は「わ」に尖むのであるが、さうすると黑に二二に赶されて、赶しながら圍ふ調子を敵に與へるやうになるから、それで圖の如く頂けたのである○白二四と打つて普通の如く「わ」に引かぬのは、引けば黑は「か」に粘いで、遙に一、五と應呼して形勢を成すから、甚だ具合が惡い○黑二五も同じく考へた手で、之を「よ」に突張れば、白二八、黑二六、白「わ」、黑「か」、白二七となるは必然で、さうなると十七と十一の間が餘りに廣くて面白くない○白二八は止むを得ぬ、此手で「た」に截るもないではないが、黑に「か」に綽ねられ、「れ」に行びた時に三二に約へられて不可ぬ、故に二八と粘いで先手を敗り、三十に綽ねて遙に黑九以下の四子を狙つて居るでのある○黑二九は三二に約へても可い○黑三一は「そ」に打つ手もある、只他方への釣合上斯う打つたのに過ぎぬ○白三二一見小さいやうであるが、此場合非常の要處である、若しも白が此約を怠り、「た」に一子を截取らねばならぬやうな運命にならうものなら、黑は右方に大封疆を成して、指一本染める譯には行かなくなる、斯う辛抱して居れば、今度は何處へでも打込んで行くことが出來るのである○黑三三斯う勢が迫つて來て打込まれては堪らぬから補つたので、白卽ち三四に大場を打つたのである、是は三二の結果の然らしむる所である○黑三五は白が右方に構成せんとする大模樣を妨害に出懸けたのである、白に三五に飛ばれては略其理想を完成せしめるから、先づ其地點を占奪して敵の動靜を窺ひ、而して後に機に乘じて策を立てるが宜いのである、何の途白は受けねばならぬが、（十八の石に對しては「つ」に、損益上よりは「ね」に受けるを可とする）其時は黑「な」に詰めて十分である

第三圖

白十より前圖と異るが、此十と立つ手は前圖よりも優れりとして、近時專ら採用されて居る○黑十一と粘ぐは、白を十二に打たして十三に打ちたいから斯う打つのであるが、此手で十八へ突當るのもある、其時白は「い」に行びると「ろ」に掛けるとの兩手段がある、若し「い」に行びれば、黑は「は」に斜走するか「に」に一間飛ぶかの二つで、前者は白「ほ」に頂け、黑「へ」に行び、白「と」に打つことゝなるし、後者は白「ろ」に尖み、黑十四に拆き、白「ち」に出で、黑「り」に約へ、白「ぬ」に截り、黑「る」に約へ、白「を」に截り、黑「わ」に提り、白十三に抱へることゝなるが、圖の如く征の當りある場合は、白「ぬ」の方より截らずして「を」の方より截り、反對に三の黑を抱へるのである、又白最初「ろ」に掛ける手段の結果は次圖に說明する○白十四は黑の將に拆くべき好點を先奪するのだから甚だ佳い、其代り十二、十三の交換は白の方が少し損であることを知らねばならぬ○白十六は十四の石に對して堅固に締つたのである○黑十七と打つて白に十八に打たせ、而して十九に逃げたのは好手順である、何の途十九には逃出さねばならぬが、此十七を後に遺つては、白に手拔を食ふかも知れぬ、白若し十八に應じて呉れぬ時は、黑は急いで十九に逃げる必要はないから、つまり十七は黑の打德に歸する勘定となる○黑二一の處は此場合に於ける天王山である、互に締りを有して相對峙する姿勢上、黑からも白からも極めて緊要の地點である、斯ういふ場合には空隅二三に懸る定法に拘泥すべき限りでない○白二二も亦前述のやうな意味から、權衡上大場を占領したものであるが、「か」に締つて打つても無論結構である○白二四の尖は此際甚だ肝要とする、若し他に轉じて黑から二四へ掛けられたが最後、二二の効力は全然腐つて了ふ、尤も此二四は二二に打つ時からの白の約束的胸算であつたのである○黑二五は第一の大場である○白二六は十三の黑が低いから、十三、二三間に打込むのは面白くない、寧ろ上方から壓迫して其位地を低下せしむる方が、却つて利益多いものである

第四圖

黑十一は前圖の變化である○白十二の手で稀には「い」に尖頂け、黑十三に行びる時十六に約へるなども、餘りよくない手であるが、一趣向として存在する事を心得て欲しい○黑十五は心得て置くべき手である、七以下の應答が何にも無い時と同じやうに二一に飛べば、白に「ろ」に下る手があつて不可ぬ、白「ろ」に下れば、黑勢ひ十七に用心せねばならぬ、さうすると白十五へ出で、黑「は」、白「に」、黑二三、白二二、黑二十、白「ほ」、黑「へ」、白「と」、黑「ち」、白「り」、黑「ぬ」、白「る」、黑「を」、白「わ」、黑「か」、白「よ」、黑「た」、白「る」、黑「わ」、白「い」となつて、黑は取られて了ふのである、尤も二二に赶された時、二十に粘がずに「へ」に提れば可いが、白に二十に當込まれる損は、黑の堪へる所でない、此場合に於ける十五は甚だ大事な手である○白二十は二一に約へると黑に二十に挾まれて、又二二に行びては二十に飛ばれて、共に面白くないから



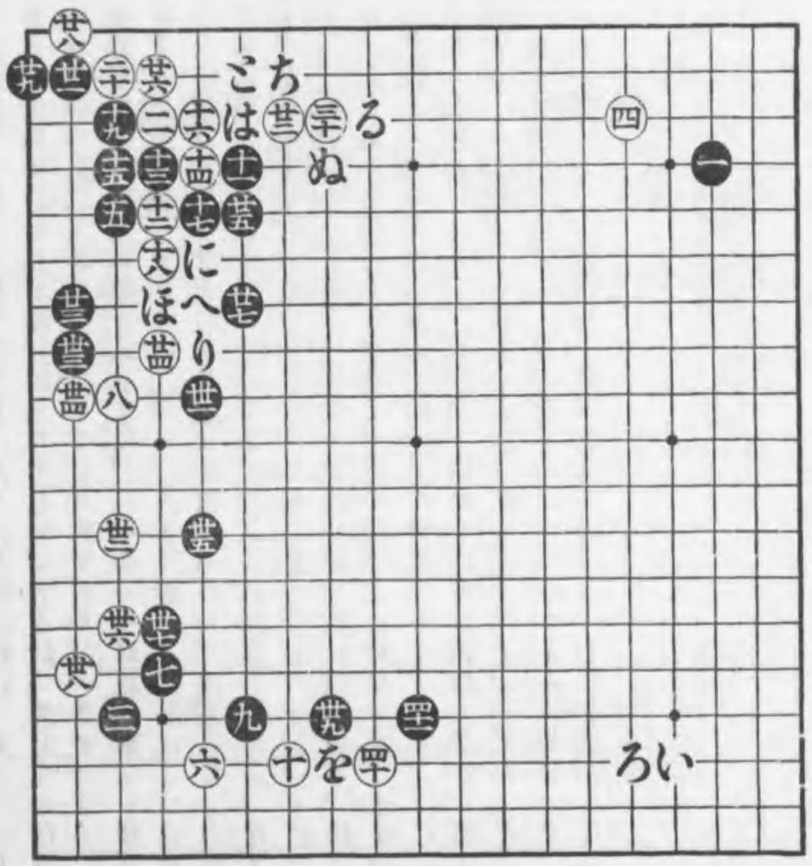
第四圖

斯う外して打つたのである○黑二一、二三、二五と打ち、先手を取つて二七に入つた手順は好い、又二一の手で「ち」に下り、白二一の時他に轉ずる趣向もある、此局勢白中央が厚いから打てる形であるが、若し二の白が「れ」又は三一に在れば、据明であるだけ白は餘程惡い○黑二九普通は「そ」まで行く處であるが、さすれば一、五の締りに對して手薄くなつて面白くない、七以下の黑が非常に堅い此碁では、二七の一子は單に締りを妨げたゞけで十分、モウ棄てゝ了ふ方が早く勝勢を定める上策で、それには二九を「そ」まで進める必要はない○黑三一の時三九に出ても惡くはないが、此方面は白が何う打たうと七以下の黑には響かぬから、放任して二の白に懸つたのである○白三二は趣向の着である、常には黑に三三に掛けられて低地を這はねばならぬから、用ふべからざる惡い手であるが、黑二三、二五と出て居て地を成さぬ處であるから、特に黑に掛けさせるべく注文を附けたのである、斯くて三八までの結果を見ると、白二六の尖端が丁度黑の在れば好い處に出て居て、掛けた厚味の効力を夥しく減殺してる、卽ち三二は二六を働かし利用した打方で、好手必ずしも好ならず、惡手必ずしも惡ならざる所に妙味が存するのである○黑四一の詰は二九の意志を繼承した良着である、一寸「つ」にでも打ちたいやうな處であるが、當初二九と一路控へた結果、白に「ね」に反對に詰められては面白くない、何も七以下の堅固なる石に對して「つ」に屋上屋を架するより、飽までも當初の趣旨に從つて、二七、三九の二子は棄てるが可い、四三、四五は此方針に從つて、棄てる糟から成るべく汁を搾るのである○黑四七は緊要の處、之を白から打たれては形勢が一變する、中央の白が厚いから、其權衡上黑も亦此方面を厚くして置かねばならぬ、卽ち白ッぽいに對する黑ッぽいである

大斜掛

第一圖

黒五は「い」に打つを當世風とはするが、他方面に少し模樣が出來た後に於て、此隅の打着點を擇ばうと云ふ、所謂趣向の手である○黒七の時「ろ」に空隅を占めても可い、併しさうすれば白に八に挾まれて、敵に趣向の餘地を與へる、七に尖むはそれに對する確實を期するものである○黒十一は卽ち大斜掛であつて、既に九と掛けてあるから、此模樣では惡くない、而して白十二から黒十九までは必然の定石である○白二十は普通「は」に約へ、黒二五に粘ぐ時三十に飛ぶのであるが、八の三間挾ある場合では、特に二十に綽ねて二二に飛ぶといふ趣向も出來るのである、八の石がない時だと、黒「に」に赶し、白「ほ」に行び、黒尙「へ」に赶し、白二四に行びる時、黒「は」に出で、白「と」に受けると、黒に「ち」に截られて、二、十四、十六、二十の數子は取られて了ふが、八の

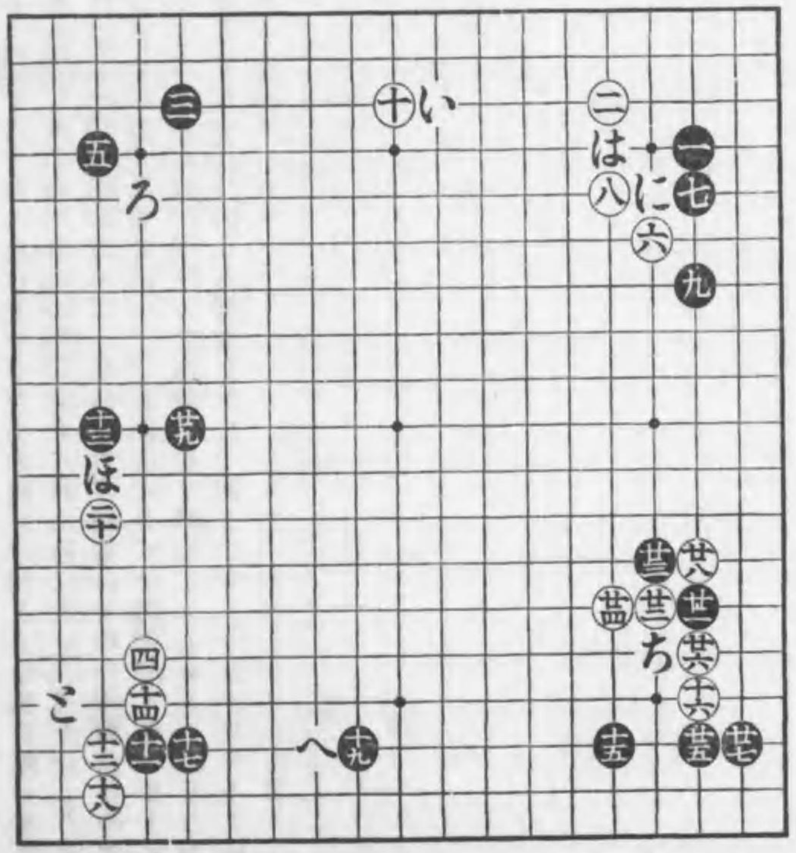


第一圖

石があれば、黒「へ」に赶す時に「り」に綽ねる事が出來るから、それで圖の如く打つても可いのである○黒二七は「ぬ」に掛けるを普通とするが、此碁の如く十二、十八、八の白を攻めて先手を取り、而して中央を厚くするが利勢なる場合には、斯う打つは又良手段たるを失はぬ○白三十は肝要な處で、此に補はないと黒から「る」に挾まれて追立られることゝなる○黒三三は勝田榮輔の考案だと云ふことであるが、此場合では一寸面白い○黒三九と掛けて來た時、白四十と飛んだのは輕い手である、六でも十でも、場合に依つては何方でも棄てやうといふ趣向である、之を「を」に赶しては重くなつて、さらぬだに中央の黒模樣を益々厚壯ならしめることゝなつて不可ぬ○黒四一白が輕く打つたからとて用捨はせぬ、嵩に掛つて壓迫を加へ、飽まで中央を厚くしやうと遣るのである、斯かる大陸的經營も亦一方略として趣味がある

第二圖

黑一に對して白直に二と懸るのは、一體は損の手であつて、好んで用ふべからざる所ではあるが、變化を求める爲に趣向として打つ事が時に行はれて居る○黑三は一、二の對峙上動かすべからざる好點とされて居る、何故といへば、白五に懸れば「い」に二の白を三間に挾んで、「ろ」に掛ける姿形を成すから、つまりは五に締る手順となるので、殆んど此締りを專有するやうな譯になる○白四は前述の意味からして五には懸れないから、斯うして今度「ろ」に高く懸らうといふのである、高く懸るには圖の如く高目に在る方が都合が好い○黑五は今度白の懸らうとする處を締るのだから、更に何等の不思議も無い○白六と掛けるのは趣向の手で、つまり黑の何れに出るかを見るのである○黑七は「は」に頂ける手段も「に」尖頂ける手段もある、圖の如く應ずるは今日では古風と云ふやうになつたが、本因坊秀和が好んで用ひた手段で、九までは卽ち定石

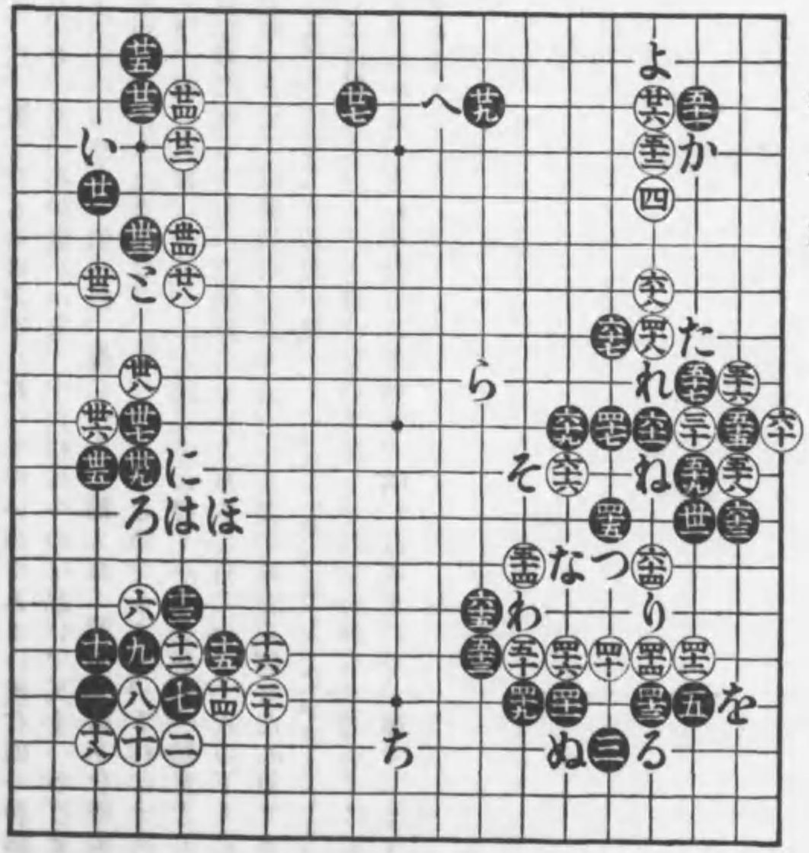


第二圖

である○白十は八と尖んだ以上唯一の大場で、何を差措いても打たねばならぬ緊要の着點である○黑十三普通は十八へ綽ねるか「ほ」に詰めるが定石であるが、三、五と在る時は星下に打つて可いのである○黑右隅の着點を十五の目外しに擇んだのは甚だ其位地を得て居る、九の石が低いから、十六に打つのは惡い、又十一の石を引出すにも、十五に在る方が都合が好い○白十六の手で十七に取れば、黑に十六に締られて所謂兩締りを附與する事となるから、此際十六に懸るのは止むを得ぬ○黑十九普通は「へ」に二間拆するのであるが、それは十八の白が「と」に掛粘いだ場合で、圖の如く十八と下つて在れば、十一、十七の二子は輕く小さいから、御意とあらば棄てる趣向で、それで十五に對して絶好の位置に在る十九に三間拆したのである○白二十は十八の下りに對して重要なる大場である○黑二一は十六の白を攻めて、其成行の序に十五、十九間の補着を利せん心算である○白二二は「ち」に尖む手もあるが、それは黑の注文である、九の黑が低いから、黑に此方面に手をかけさして、自己は却つて十五、十九間に手を染めやうといふ方策から、二二と頂けたのである○黑二三から二七までは定石である、九、二一間に補ふやうでは白の注文であるから、それを避けて實利を右隅に占めたので、却つて此方が利益多い○黑二九は釣合上卽ち位取の良着である

第三圖

黑七。は前圖の變化で、以下二。十。までは定石である、而も是が當時最も普通とされてよく流行して居る○黑二一。普通は三五へ打つを定石とするが、左上隅が全く何方からも手をつけられて居ぬ此場合、三五へ打つては白に二二又は二四へ打たれて、「い」に懸られない事となる（「い」、三五共に低いから）から、それで圖の如く打つたのである○白二二。、二四。は二六に締りたい心算から、單に二六に締つては黑も亦二三に締つて、卽ち兩締りの好委勢を附與する事となる故、其締りを妨げて置いて二六。に締つたのである、又二二の手で「ろ」に飛び、黑「は」に頂ければ「に」に綽ね、黑「ほ」に行びる時三七に掛粘ぐなどの手段もあるが、それは二一の邊に白が在る時は可いが、さうでないと矢張黑に二三に締られて面白くない○白二。八。と飛びたるに頓着なく、黑二。九。と拆いたのは此場合甚だ宜しい、普通は三二に受けるが、受けて見た所で一以下の障壁とは距

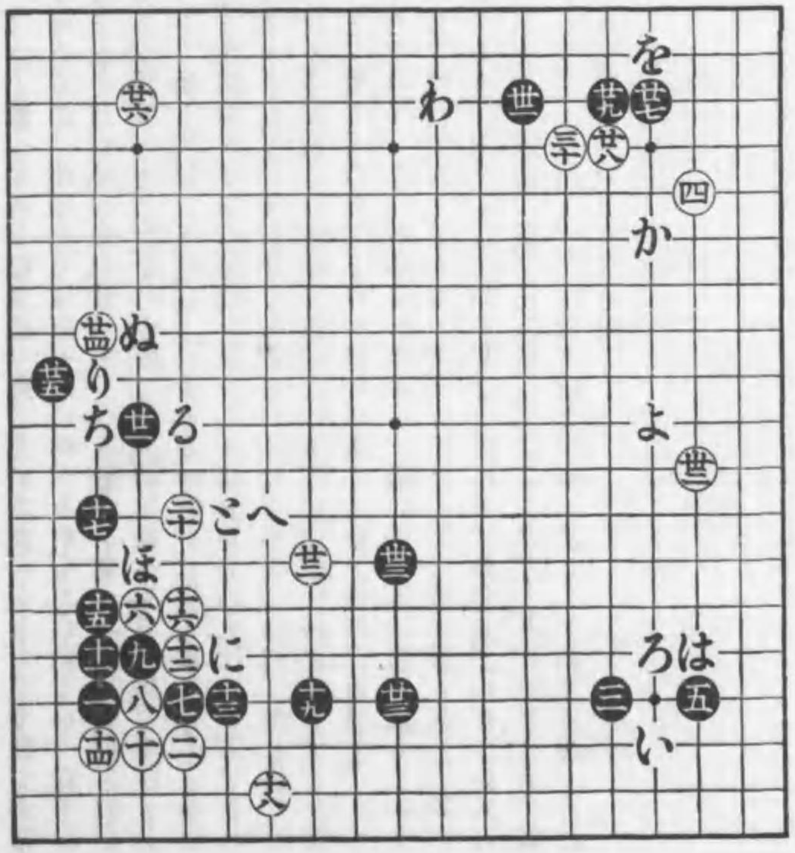


第三圖　七。劫提　十九。同粘　六三。粘

離が遠過ぎて、其間に地境を抱擁する事は出來ぬのみならず、白から「へ」に詰められては二七の石が孤立する事になつて、甚だ面白くない結果を來す、四、二六と締つて居る場合は、此二九が非常に大きい手で且つ非常に好い處である○黑三三。の覗き普通は好まぬ手であるが、此場合では白三四に約へるか「と」に粘ぐか、樣子を聞いた方が具合が宜い、若し「と」に粘げば黑は三五に詰めて、先づ敵の拆くべき好點を奪つた上に、尙三四に出て白を兩斷する傷を晩むことが出來る○白三六。と頂け三八。と綽ねたのは、「と」の出截を先手に防ぐ手段として面白い○黑四一。「ち」の邊に白の石ある時は、圖の如く尖むよりは「り」に受けるが可い、併し茲で「り」に受ければ「ぬ」に頂けられて、左方二以下二十の堅壁と相抱擁する白の地域が恐ろしく廣大なものとなるから、それは甚だ不得策である、そこで敵の廣がるべき方面へと出て、其規模を妨害し行くのである○白四二。黑に四三に引かれてマヅい時には四三に尖頂け、黑「る」に受ける時四二に綽ね、黑「を」に下る時「わ」に斜走する打方を採るが可い○黑五一。の頂は甚だ時機を得て居る、之に對して白五二。と打つたのは蓋し止むを得ぬ、普通は「か」に約へるが、さうすると黑に五五、五七の手順を打たれて「よ」に綽ねられるから、隅に又多大の損が殘ること、なる○黑五五。より六一。までの手段は、三一、四五、四七の石を早く治めやうとするので、圖の如き委形に於て常に用ふる所である○黑六七。と頂けたのは手筋である、次に「た」に出る意志を含んで、白の「た」に打つか六八に引くか其應答を試みたので、圖の如く六八。に引かせれば、既に幾らかの利益である、今度「れ」に粘げば直ぐ眼形をなす事が出來る、斯くて白若し「そ」に行びれば「つ」に出て「ね」の截を防ぎ、白「な」に二丁粘する時「ら」に斜走するのである、五一の一子尙何となく味を存してウマいではない

第四圖

黑十三から前圖の變化で、秀策が始めて打出した手である、併し斯う行びるには條件があつて、右下隅の關係を考へた上でないとウッカリ遣れぬ、圖の如く三、五と締つて在るか、又は三、五の締が「い」、「ろ」と在るか、若くは黑「い」、白「は」、黑三と尖んで在るか、さういふ場合には十三と行びて差支ないけれども、黑「い」、白「は」と對峙の場合に行びやうものなら、黑二三までの當然の成行を呈した時、白から三に掛けられる手順となるから、位が低くなつて甚だ面白くない、卽ち右下隅の黑が白から掛けられぬ位地でなければならぬといふのが、十三と行びる第一の必要條件である○白十六に粘ぐ手は「に」に赶して打つ手段もあり、「ほ」に行びて打つ手段もあつて、其變化は多々あるが、圖の如きは最も普通の常形に屬する○白二十の手を「へ」に打つた碁なども、二子の局にはある、又黑に二三に打たして二一に打つ趣向から、「と」に打つこと

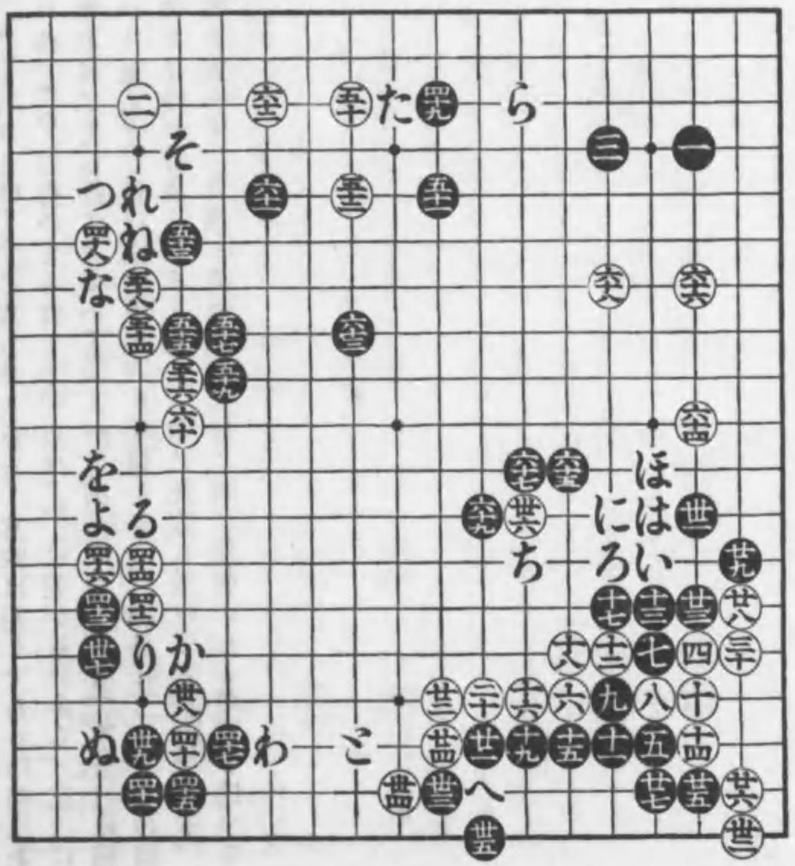


第四圖

なども稀にはある○黑二三までは大斜掛の一種の定石である○黑二五は後に三三の煽りを痛切に利かすべく、「ち」に下る手もある、又「り」に尖頂けて、白「ぬ」に行びる時「る」に双ぶ手もある、意味は同じである○黑二七は二八に懸り、白二七、黑二九、白「を」となつた時、「わ」に拆いても打てる、白は「か」に尖がないから、三二に拆くのは調子が惡い、併し就れかと云へば、實利は二七に掛る方多いと云ふが定則になつて居る○黑三三は局中の要害で、大變な好い手である、斯う打たれて見ると、白は六以下の石が手薄いから、容易に三と二三の間に打込めぬが、之と反對に黑からは「よ」に削地の手段が打易くなると云ふ、實に此際に於ける天王山である、凡て地面模樣などは、敵を攻擊して削減の餘裕を與へず、自然に出來上つて行く所に價値が在るので、圍つて拵へるやうでは、碁勢に後れて不可ぬ

第五圖

白十六から前圖の變化である、前圖の如く十八に粘げば、前圖二三までの定石が出來上つた時に、一、三の締りが在るから、黑の抱擁する地境が廣くなつて面白くない、故に圖の如く一、三と締りが在る際には、十八に粘がずに十六に行びるが宜しい○黑十七と曲つて十九に赶す手順は心得て置かねばならぬ、若し十七に曲らず單に十九に赶せば、白に十七に赶され、「い」に行びれば「ろ」に、「は」に行びれば「に」へと赶付けられ、尙「ほ」に行びなければならぬ、すると白から二一に綽ねられ、「へ」に綽ねる時三三に二段綽を喰ふから、黑頗る面白くない○白三六普通は「と」に掛粘ぐを確かとするが、此場合黑から「ち」に斜走して羽翼を張られると、一、三の締りと相應呼して此處に非常な大模樣が出來る、白はそれを妨げて反對に自己の羽翼を伸ばしたのである○黑三七の際は此隅の占據點に迷ふ秋である、普通「り」に打ちさうな處だが、白に

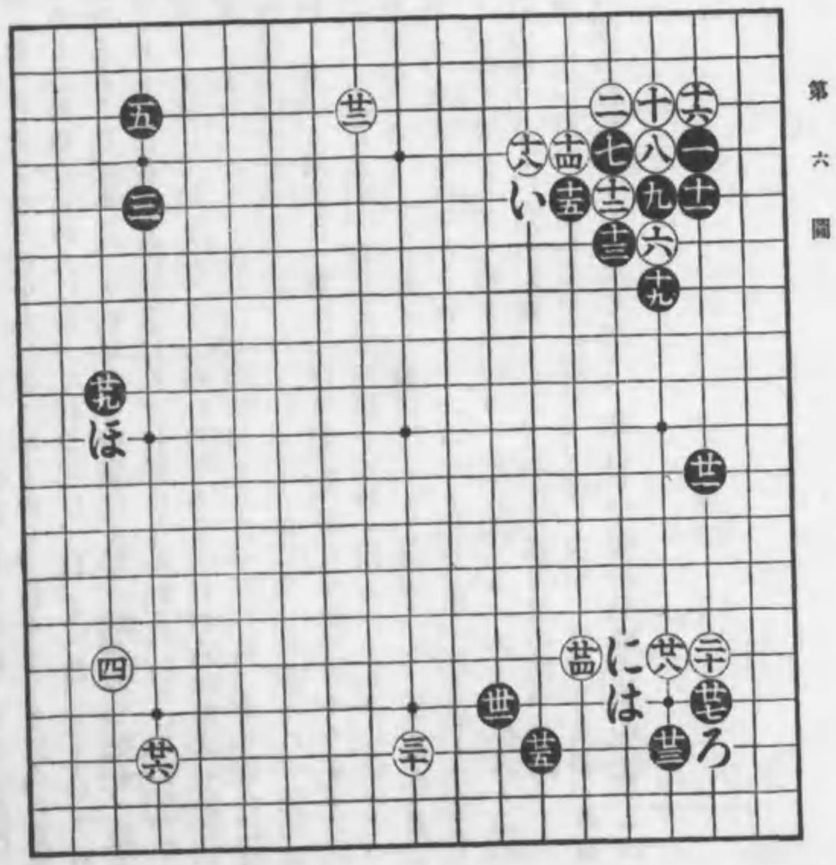


第五圖

「ぬ」に入られて面白くない、一面白の壁が在る此場、では、矢張三七の目外しが適好の打着點である○白四二は手を拔いて他に轉ずるを普通とするが、黑に四二に尖まれては中央が薄くなるから、飽くまでも三六の意志を繼いで、それを役に立てやうと打つ趣向である○黑四五を四六に這つて行つては、白「る」、黑「を」となり、白に尤大な地面が出來て、遂に手の附けやうが無くなる虞がある、それは白の待設けて居る所であるから、黑は之を外して四五に曲り、敵の樣子を窺つた譯である、白若し「わ」に受ければ打德になるから、「り」に出て「か」に約へさせ、「よ」に飛んで打つても可し、又は手を拔いて他を打つても可いのである○白四六は如上の意味から「わ」に受けるを肯んぜず、勢ひに乘じて變化を試みたので、黑之に應じて四七と打つたのは、前を進れば後に、右を衝けば左にの筆法である○黑四九は普通「た」の星下まで拆く處であるが、白に六二に拆かれて後の運びが思はしくないから、態と一路控へて圖の如く五一と飛置き、新たに白模樣の削減に手をつけやうとするのである○黑五三に對する白の受手は「れ」にも「そ」にもあるが、白は比較的廣い方面を圍ふべく五四に受けて、そして黑の手段を俟つ策を取つた、それには黑普通の如く「つ」に頂けて來れば「れ」に綽出して、黑「ね」に截る時「な」に引いて打たうと云ふ意志が含まれて居る○黑五五はそれを察して上方から頂け、隅の味を殘して五七、五九、六一、六三と運び、自己を補ひつゝ能く侵略の意をも達し得たのはウマい○黑六五、六七、六九と白の打込に構はず、手厚く自己に備へたのは雄健の姿勢である、白の六四、六六、六八は孤身黑の圍中に在つて、甚だ手薄い石であるから、其負擔上「ら」の方面には一指だも染める事が出來ぬ、即ち放つて置いても黑の確實な地面である、のみならず六九の綽は六以下一圍の白に嚴しく迫つて居て、此白が又薄弱を感せずには居られまい

第六圖

白四は黑三に對して何時でも斯う打つのである○白十六から前圖の變化で、前圖のやうに「い」に綽ねると後手になるから、先手を取らうとする時に此手段を用ふる事がある○黑十九を前圖の如く十二に粘ぐのは、白が「い」に曲つて呉れゝば可いが、曲るか曲らぬか分らんから、それだけ黑が惡い譯で、此處までが一つの定石である○黑二一普通の如く二三に懸れば、白に二一に拆かれて具合が惡いから、それで二一の方から行つたのである○白二二の手で二三に繕つても可い○黑二七は片時も早く二九の大場を打ちたいが、只打つては白に「ろ」に頂けられる、それが又イヤである、それで一着二七に尖頂けて、「ろ」の頂を防ぎ置いたのは働きである、二七と尖頂けた以上、普通は二九で「は」に覗き、白「に」に粘ぐ時、三一に尖むが定石であつて、「は」、三一と連續せぬ二七、二八の交換は、常には打たぬ方が可い



第六圖

● 劫提

●大阪屋號發行圍碁書類目錄●

名人本因坊秀哉著	● 新案詰碁	死活妙機（詰碁）	和裝菊判全一冊	定價金壹圓 送料金六錢
四段高橋清致著	● 圍碁の魂	一手千盤（定石）	和裝菊判全一冊	定價金壹圓貳拾錢 送料金六錢
六段中根鳳治郎著	● 圍碁移訣	はめ手千態（妙手）	和裝四六判全一冊	定價金七拾錢 送料金四錢
棋聖村瀬秀甫著	●	圍棋新報（合本）（打碁）	和裝美濃倍判全三冊帙入	定價金拾圓 送料金三拾三錢
五段井上保申著	● 初心編習	圍碁の打方（定石）	和裝菊判全一冊	定價金壹圓 送料金六錢
同	● 再訂無疵	圍碁獨習定石解（定石）	和裝菊判全一冊	定價金壹圓 送料金四錢
同	● 自九目至四目	置碁必勝石立集（布石）	和裝菊判全一冊	定價金七拾錢 送料金四錢
同	● 自三目至二目	同（布石）	和裝菊判全一冊	定價金七拾錢 送料金四錢
同	● 再訂無疵	圍碁の道しるべ（定石）	和裝菊判全一冊	定價金六拾錢 送料金四錢

●大阪屋號發行圍碁書類目錄●

八段中川龜三郎 七段岩佐銕共講 ●最新講評 置碁石立軌範 九、八子(布石) 和裝菊判一冊 定價金八拾錢 送料金六錢

八段中川龜三郎 七段岩佐銕共講 ●最新講評 置碁石立軌範 七、五、三子(布石) 和裝菊判一冊 定價金八拾錢 送料金六錢

八段中川龜三郎 七段岩佐銕共講 ●最新講評 置碁石立軌範 六、四、二子(布石) 和裝菊判一冊 定價金八拾錢 送料金六錢

同 ●最新講評 互先石立軌範(定石) 和裝菊判一冊 定價金八拾錢 送料金六錢

八段中川龜三郎校 八段林元美著 ●碁經衆妙(詰碁) 和裝菊判一冊 定價金壹圓 送料金四錢

名人本因坊秀哉校訂 八段林元美原著 ●碁經衆妙後編(詰碁) 和裝四六判一冊 定價金七拾錢 送料金四錢

七段廣瀨平次郎著 ●圍碁秘傳 地の中に手あり(妙手) 和裝四六判一冊 (未定)

同 ●圍碁講義 布石通論(論碁) 和裝菊判一冊 (未定)

五段井上保申著 ●圍碁三世石立集(打碁) 和裝菊判一冊 (未定)

昭和六年十月五日印刷
昭和六年十月十日發行

瓦先石立軌範
定價金八錢

編纂者 圍碁同志會
著者 中川千治
發行者 濱井松之助 東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
印刷者 高橋赤次郎 東京市京橋區新湊町五丁目一番地

發兌 大阪屋號書店 東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
振替東京一三七五番
電話 日本橋(24)三七三番 四五六七番 五三八九番

著作權所有

不許複製

終